

1.中山城跡第5・6次発掘調査報告

1. はじめに

今回の発掘調査は、一般府道西神崎上東線の拡幅に伴う西神崎上東線地方道路交付金業務委託に係わる調査として、京都府建設交通部の依頼を受けて実施した。

中山城跡は、舞鶴市中山ほかに所在する。由良川東岸に面した細長い丘陵上に築かれた戦国時代の山城として知られていた。中山城の主郭は北側にあり、そこから南へ7か所の郭(平坦面)で城は構成されている。中山城は北から4番目から7番目の郭を、過去4回調査しており、戦国時代の城に伴う土塁3条と郭(平坦面)1か所および安土桃山時代から江戸時代にかけての火葬墓や土壙墓が9基確認されている。また、土塁や空堀も確認されている。

ここで報告するのは、第5次と第6次の調査成果である。第5次調査の調査範囲は、主郭から南へ3番目の郭の西斜面および、その下である。調査の結果、自然地形を人工的に改変していること、戦国時代の遺物が出土し戦国時代の山城の一部であることが判明した。第6次調査では、この成果を受けて、遺構が確認された郭1-1から1-5の5か所、さらに、人工的に加工された斜面である^{きりぎし}切岸を調査した。

現地調査に当たっては、京都府教育委員会、舞鶴市教育委員会、京都府建設交通部、京都府中丹東土木事務所の関係機関ならびに地元自治会の協力を得た。ここに記して感謝の意に代えます。なお、本報告は伊野が執筆した。

現地調査責任者 調査第2課長 肥後弘幸

現地調査担当者 調査第2課主幹第3係長事務取扱 石井清司

同 次席総括調査員 伊野近富

調査場所 舞鶴市中山地内

現地調査期間 第5次 平成21年11月17日～12月22日

第6次 平成22年4月6日～10月8日

調査面積 第5次 320㎡

第6次 1,800㎡

2. 位置と環境

舞鶴市中山城跡は、丹後半島の東の付け根からやや東側の海岸近くに位置している。そこには、京都北部最大の河川である由良川が日本海に注いでおり、中山城は河口から5.5km上流の東岸に所在する。現在、由良川にかかる八雲橋があり、その東詰め^{東詰}の山頂にある。

城が所在する山は、標高約60mで、由良川に沿った南北に細長い独立丘陵状をなしているが、



第1図 中山城跡周辺城館跡分布図(国土地理院 1/50,000 舞鶴)

- | | | | | |
|---------|----------|-------------|---------|--------|
| 1.中山城跡 | 2.建部山城跡 | 3.田辺城跡 | 4.愛宕山城跡 | 5.福井城跡 |
| 6.福井支城跡 | 7.高野由里城跡 | 8.引土(茶臼山)城跡 | | |

南端の打越峠を介して、低い丘陵は南東方向へと続き、建部山に接続している。建部山は西舞鶴地域を見下ろすことができる標高315mの山である。南北朝期から戦国時代にかけて城が築造されていたということである。中山城の位置は東は若狭に通じ、西は宮津に通じ、南は京都に続く交通の要所である。

丹後の戦国時代について概観すると、この地の守護は一色氏であった。記録に残る丹後一色氏は、初代が満範(1368～1409)である。建部山城を城としているが、実態は不明である。丹後の守護は一色氏から山名氏や武田氏などに代わっているが、1500年代における名目上の守護は一色氏であった。この頃に若狭から武田氏が攻め入っており、一時期支配されたようである。

舞鶴市域での城館の発掘調査は、8遺跡で実施されている。由良川流域では大俣城跡が調査されており、16世紀の状況が判明している。中山城に関する同時代の文献はない。周辺に関する史料からは、永正17(1520)年に白井清胤が若狭の武田元信から、水間村の支配を命じられている。水間村は中山村の隣村である。天文7(1538)年に水間で戦いがあり、白井清胤が武田元信から、



第2図 中山城跡全体図

軍功を誉められている。このように由良川河口の東岸は、16世紀前葉には若狭武田氏の支配下であった可能性がある。しかし、今回報告するように、出土した土師器皿は16世紀前半でも終わりの時期のものであり、また、もっとも地域色が認められる土師器皿は京都系であり、若狭の影響は認められない。ただし、今回の調査地での結果であり、もっとも水間村に近い主郭周辺は未調

査であり、今後検証が必要である。

江戸時代に書かれた『一色軍記』をはじめ、いくつかの文書を総合的に検討すると、一色氏が城主であった1579年、織田信長の指示で丹後に攻め入った細川藤孝・忠興、および明智光秀の連合軍によって、まず、建部山城が破られ、一色義道は中山城に逃げ込んだものの、中山城は落城したようである。その後は、細川氏の部下であった沼田清延が城主であったようで、1600年あるいは1602年に主君の細川氏が九州の小倉に移ったときに、沼田氏は主君と同行した。後述するが、城の出土遺物が1600年初頭の唐津焼きを最後に以後の時期のものが出土しないことと合致する。

中山城跡に関する研究としては『日本城郭体系^(注2)』がもっとも古く、ついで、村田修三氏による



第3図 第1～4次調査トレンチ配置図

見解が八雲公民館発行の『八雲のれきし』^(注3)に載っている。それによれば、「これらの郭は同時期に全部が完成したのではなく、必要に応じ、順次築造されたものであろう。山城としては中級程度の規模」であるとしている。最近では『舞鶴の山城』^(注4)で詳細に紹介されている。

上記の研究成果をまとめると以下のとおりである。中山城跡は南北300m、東西100mの丘陵高所(標高約60m)の範囲に7か所の郭を設け、その西側の1段下がったか所にも腰曲輪(郭)を配置した、中規模程度の山城である。建部山城(標高約315m)を主城と考えれば、中山城は北側の守りの最前線に位置した支城であるといえる。一色氏が南北朝期から丹後に勢力を伸ばした際に、この建部山城を築城したとされているが、その当否はともかく、室町時代の段階に逃げ城として築城され、この2つの城が有機的に結びつき、戦国時代に徐々に城の体裁を整えていったというのが、実情であろう。

なお、『舞鶴の山城』の見解は、中山城は南北に延びた尾根を10本の堀切で遮断し、14か所以上の曲輪数を有する大規模な遺構を残し、舞鶴市内では5か所を大規模城館として評価しているが、その1つであるという。これらの大規模城館の城主は、守護、守護代や国人クラスあるいは在地領主連合の盟主であったと推定している。ただし、城の構造としては曲輪の構成に連続性がなく、縄張りにまとまりがないのが特徴であるとしている。

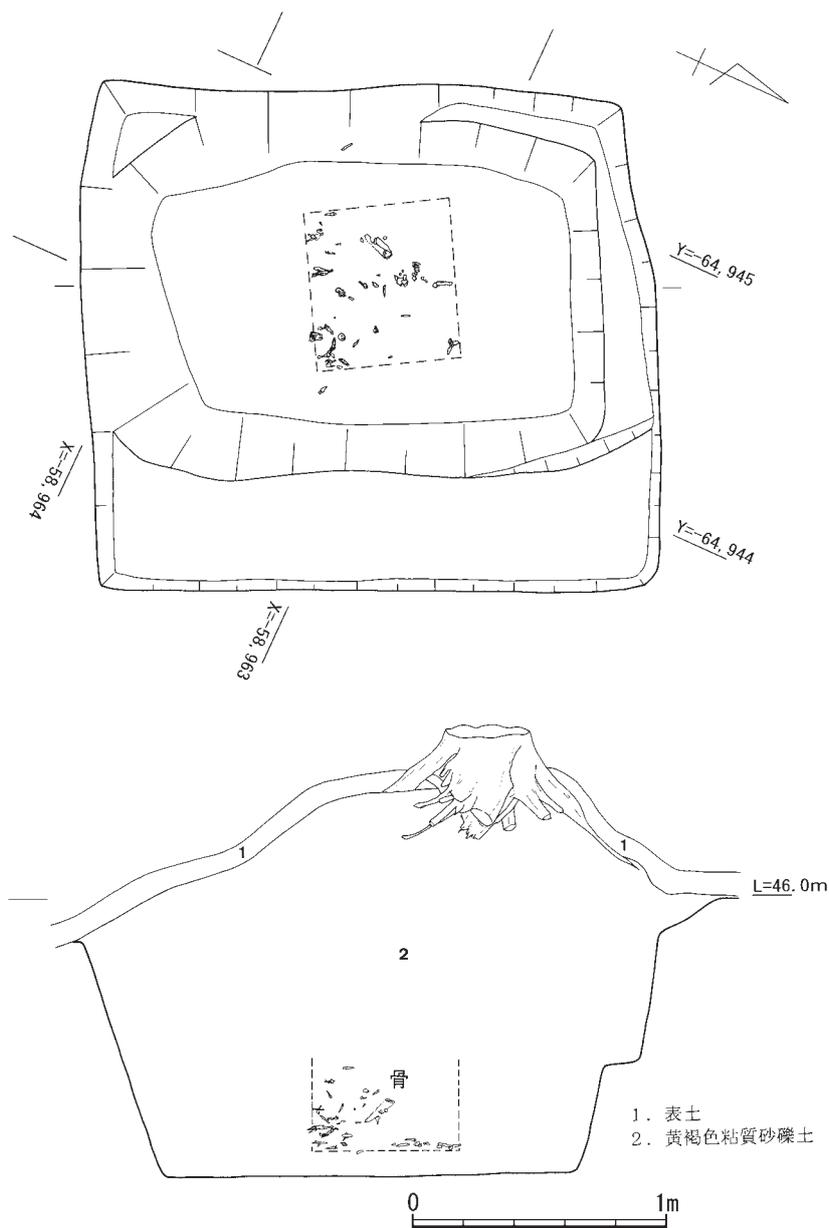
今回調査した地点には中山(城山)八幡神社があった。いつ建造されたのかは不明であるが、『八雲のれきし』によれば、『丹哥府史』天保12(1841)年に城山八幡と記載され、地元でも以前は城山八幡と呼んでいた。『加佐郡寺社町在旧記』享保16(1731)年には中山の氏神については触れられていない。現在の祭神は誉田和気命と天御中主命である。山城の築城によって八幡神が守護神として祀られ、廃城後、氏神となったのではないかと考えている。山城の急坂を一直線に登る石段があった。明治末期頃まではこの数十段の石段を村人が太鼓やぐらを担いで一気に引き上げたという。中の段には土俵があったが、八雲橋の架設によって今はなくなっている。

3. 過去の調査

中山城の発掘調査は今回の報告が5・6次調査のものである。昭和57年度が第1次調査で、昭和58年度が第2次調査である。この2度の調査は、中山城の南端でおこなわれた。城としての設備は堀切が1条認められ、この堀切を境に、やせ尾根の南側で安土桃山時代ころの火葬墓15基、その北側で土壙墓が13基確認されている。出土遺物は寛永通寶のほか、修験道の修行者などが使う錫杖などが土壙墓の中に埋納されていた。火葬墓については地元の伝承では、1579年の一色氏と明智・細川連合軍との戦いで、死亡した武将の墓とされている。

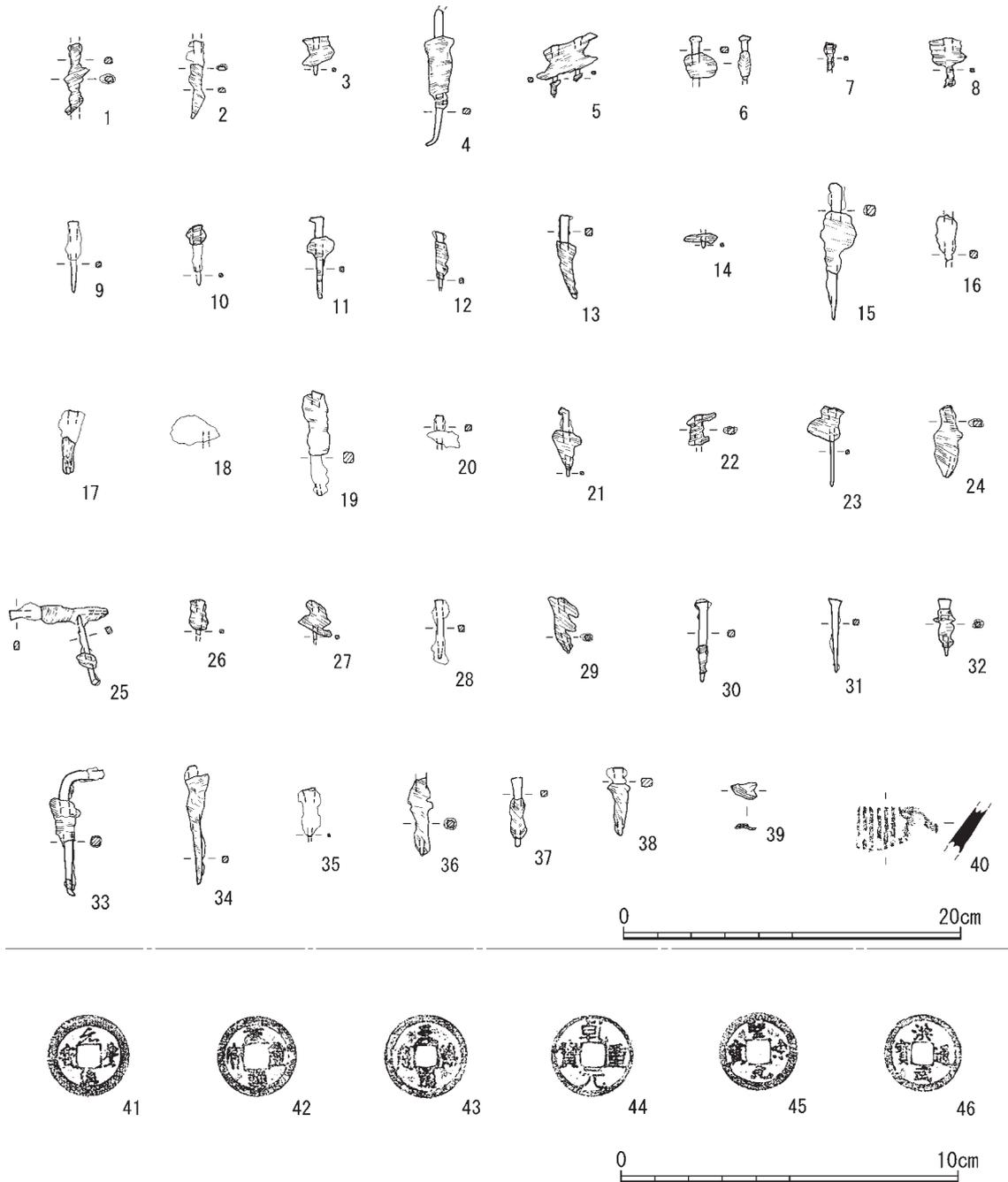
第3次調査は平成18年度に行われた。この調査では城の南部に6か所のトレンチを設定した。調査の結果、南端で3本の土塁を確認した。最高所の平坦面では堀跡らしき痕跡を確認し、一段低い中山八幡神社のある平坦面では建物跡と思われる柱穴を確認した。また、焼土も確認した。

第4次調査は平成19年度に行われた。この調査では第3次調査で確認した土塁部分を調査し、その結果、3本の土塁と、1か所の平坦面を確認した。第1・2次調査の続きの平坦面では、江



第4図 墓S X 07平・断面図

戸時代の土壙墓を確認し、出土遺物は寛永通寶のほか、修験道の修行者などが使う錫杖などが発掘された。墓は合計13基確認された。『八雲の歴史』によれば、祥雲寺の歴代住職の墓ではないかと推定している。この平坦面の北側は3mほどの段差があり、三日月状の平坦面があった。この西端に直径約2m、高さ0.6mの土饅頭があった。調査したところ東西2m、南北2.3mの長方形の土坑(墓S X 07)があった。深さは1mであった。土坑の中央の下部には38点の鉄釘が認められた。この一部を図示した。釘の中央に木質が残っており、その年輪方向から木製の箱に使用されたと推定する。また、小破片ではあるが、骨片があった。歯の破片もあった。それ以外に瓦質すり鉢の小破片が1点と銭貨6点があった。銭貨の種類は「元豊通寶」(初鑄年1078年以下同じ)3枚、「乾元重寶」(758年)、「聖宋元寶」(1101年)、「洪武通寶」(1368年)で、すべて中国銭であ



第5図 第4次調査出土遺物実測図

る。鉄釘は第4図に復原したように、0.6mの方形に集中しており、その状況から方形の箱に遺体を埋納していた可能性が高い。瓦質すり鉢は戦国時代のもので、もっとも新しい「洪武通寶」でも15世紀であり、この墓は戦国時代のものである可能性が高い。しかも、調査成果によれば一度造り替えられた城の南端に存在することから、城の最終段階である1579年から1600年ごろまでに築造された可能性が高い。



第6図 第5次調査範囲図

4. 第5次調査

1) はじめに

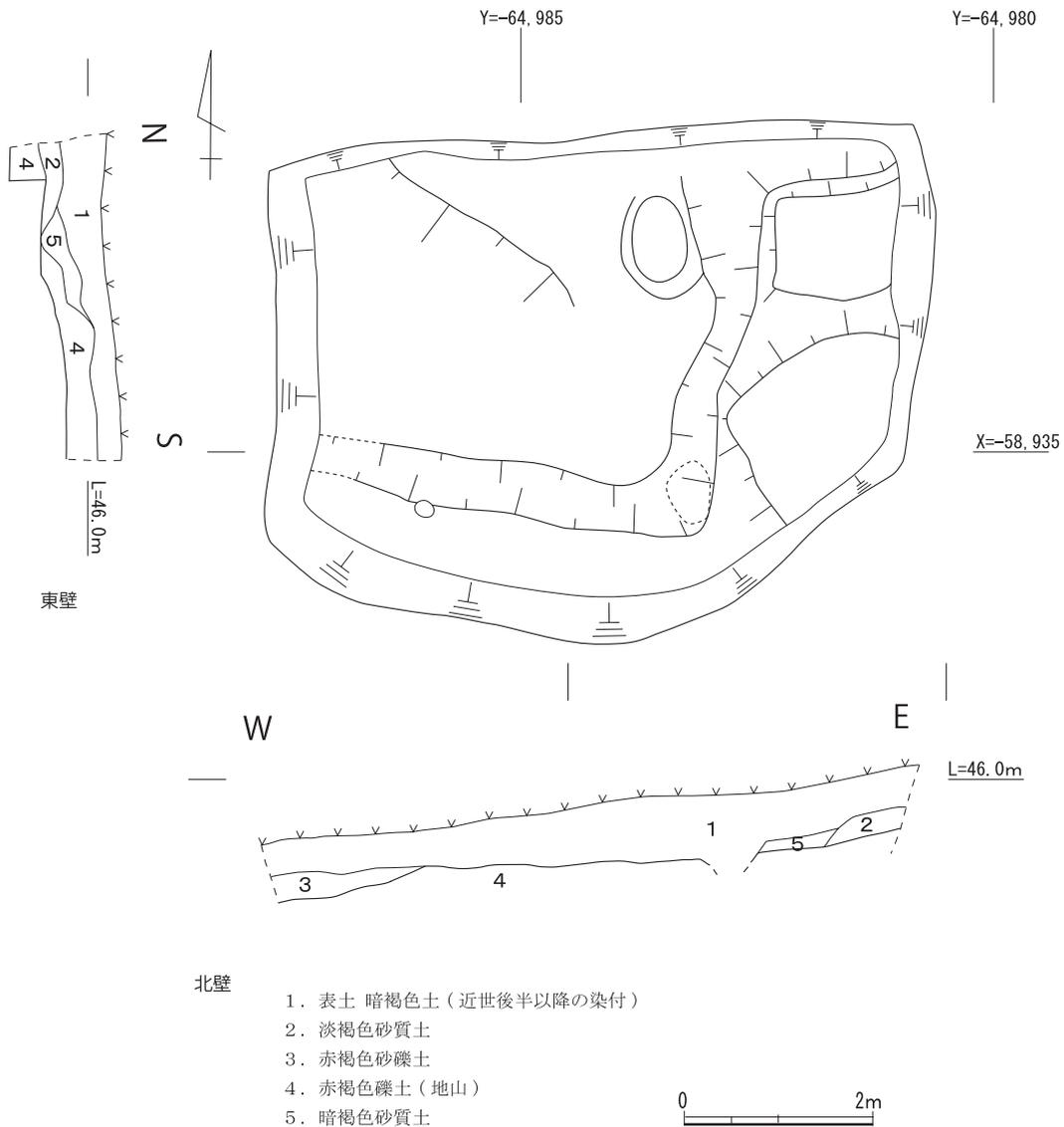
中山城の主郭は北端にあり、そこから南へ3つ目の郭が郭1-1である。その西側の1段下がったところが郭1-2、さらに西側の1段下がったところが郭1-3で、ここに中山(城山)八幡神社がある。調査は郭1-1の西斜面(切岸1)と郭1-2およびその西斜面(切岸2)、さらに郭1-3の範囲に8か所のトレンチを設けて実施した。調査前は木々が茂る林であった。樹木伐採後、人力により掘削を開始した。

土層は単純で、表土直下に淡褐色砂質土があり、その下に赤褐色砂礫土があり、その下に地山である赤褐色礫土がある。地山の表面は風化していた。

2) 各トレンチの調査

第1トレンチ 郭1-3の南端に設定したトレンチで、2か所に分かれる。東側を第1-1トレンチ、西側を第1-2トレンチと呼称する。

第1-1トレンチは地形に即して設定したので、平面は台形である。北辺7m、南辺4m、西辺4m、東辺3.6mである。東側はすぐ赤褐色礫土の地山が露出した。もともとの地形は東側が高く、西側に傾斜するものであり、また、南側に大きく傾斜する地形でもあった。このように、基本的には南西方向に傾斜する地形であったのだが、平坦面を拡張するため、東側を削り、西側へ盛土したのである。南端は地山を少し掘り残して、土塁状にしていた。西端は深さ0.7mで、

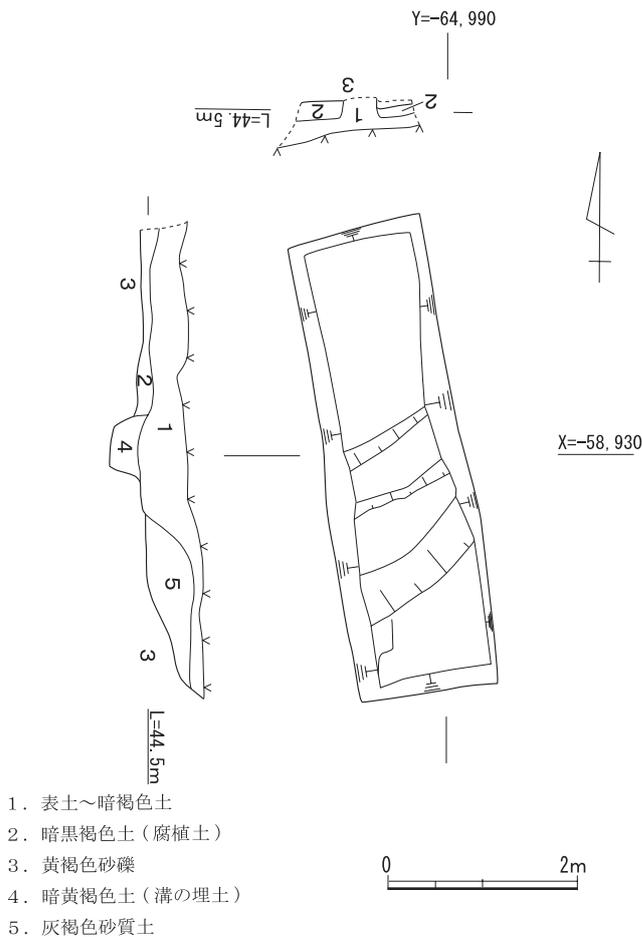


第7図 第1-1トレンチ平・断面図

下面から16世紀の土師器皿が出土した。表土および暗褐色土には江戸時代後期以降の遺物を含んでいることから、(城山)八幡神社を建設するときに盛り土したと推定する。戦国時代の地面は3層(赤褐色砂礫土)の上面と、その下面の地山上面の2面が認められる。地山上面で16世紀の土師器皿が出土した。

第1-2トレンチの平面は長方形である。東西1.5m、南北4.8mである。上層は暗褐色土で、下層は赤褐色砂礫土である。地山(赤褐色礫土)は南側が高く残されていた。この南に虎口が想定されるが、大木があり、掘削できなかった。

第2トレンチ 郭1-2と郭1-3との間の斜面(切岸2)に設定した。トレンチの平面は長方形で、東西7m、南北1mである。調査の都合上、中位のところでトレンチを分けた。トレンチ上半部の上層は暗褐色土で、下層は地山で黄褐色砂礫土である。地山を45度に削り、防御施設(切岸)を形成していた。トレンチ下半部の表土は黄褐色砂礫土(地山)の2次堆積層で、下層は地山



第8図 第1-2トレンチ平・断面図

である。ここからは銭貨が1枚出土した。

第3トレンチ 郭1-2の南端に設定した。第3次調査の第5トレンチが中央部で重複している。地形に即して設定したので、平面は台形である。北辺4m、南辺5.2m、西辺4.6m、東辺6.4mである。上層は暗褐色土層で、下層は暗黄褐色砂礫土層である。遺物はなかった。

第4トレンチ 郭1-1と郭1-2との間の斜面(切岸1)に設定した。平面はほぼ長方形であるが南側のほうが狭い。北辺6m、南辺2.4m、西辺22m、東辺22mである。地山を45度に削り、防御施設(切岸)を形成していた。上層は暗褐色土層で、下層は暗赤褐色砂礫土層である。

第5トレンチ 郭1-2と郭1-3との間の斜面(切岸2)に設定した。平面は長方形である。東西5.6m、南北1mである。上層は暗褐色土層で、下層は淡黄褐色砂礫土層である。地山を45度に削り、

防御施設(切岸2)を形成していた。ここから土師器皿が出土した。

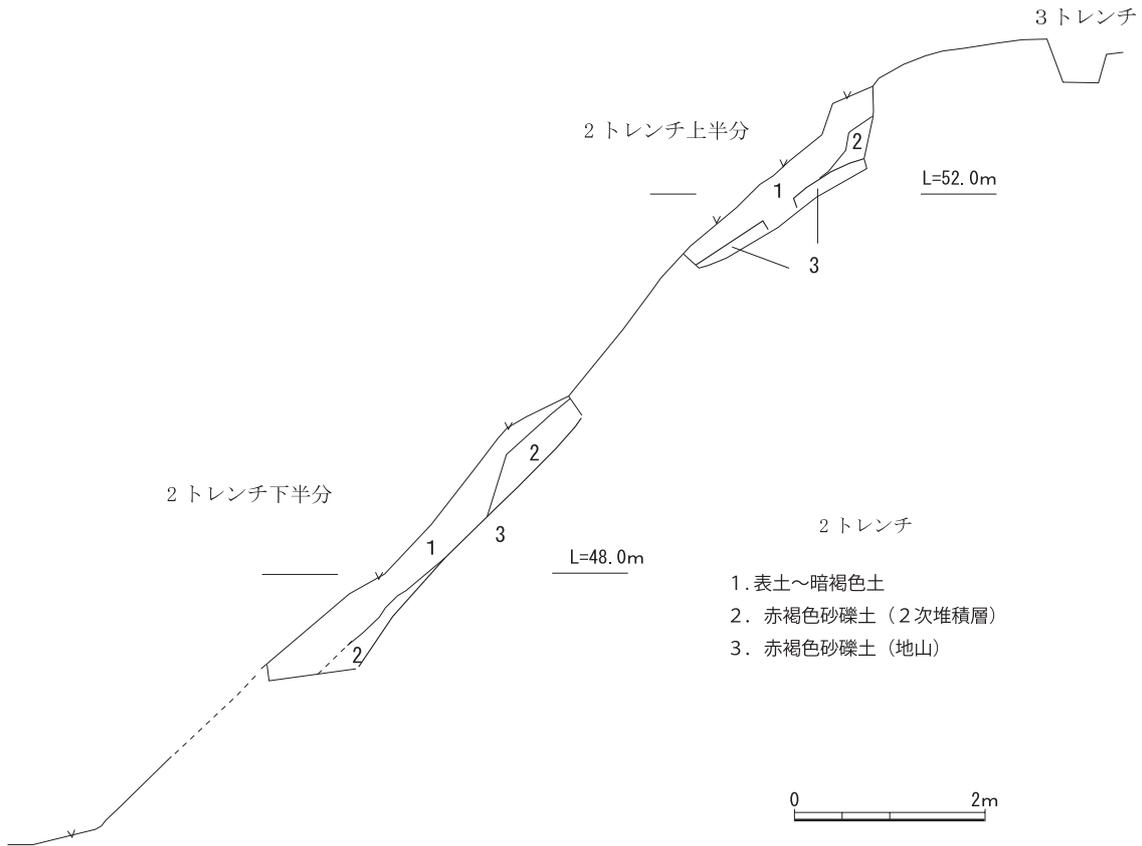
第6トレンチ 郭1-2と郭1-3との間の斜面に設定した。斜面を上がる山道があったので、トレンチはこれを境に上下2か所に分け、上側を第6-1、下側を第6-2トレンチと呼称する。

第6-1トレンチの平面は長方形である。東西2.6m、南北1mである。上層は暗褐色土層で、下層は黄褐色砂礫土層である。土師器皿や中国製染付けが出土した。

第6-2トレンチの平面は長方形である。東西3.4m、南北1mである。上層は暗褐色土層で、下層は地山で黄褐色土層である。地山を45度に削り、防御施設(切岸)を形成していた。土師器皿や中国製染付けが出土した。

第7トレンチ 郭1-2と郭1-3との間の斜面に設定した。平面は長方形である。東西10m、南北1mである。上層は明褐色砂礫土層で、下層は赤褐色砂礫土層である。標高51.9mの地点がやや緩斜面となっており、幅4m、奥行き2mの広場を造っていた。このほかは地山を45度に削り、防御施設(切岸2)を形成していた。ここでは、中国製染付けや戦国時代の土師器が出土した。

第8トレンチ 郭1-1と郭1-2との間の斜面(切岸1)に設定した。第4トレンチと接している。平面はほぼ長方形であるが北側のほうが狭い。北辺5m、南辺6m、西辺22m、東辺21m



第9図 第2トレンチ断面図

である。上層は暗褐色土層で、下層は赤褐色砂礫土層である。現状では斜面の途中に幅1～2mの平坦面を造っており、帯曲輪状となっていたが、途中で止まっており、あまり機能的とはいえない。ここでは、中国製染付けや古墳時代の須恵器が出土した。

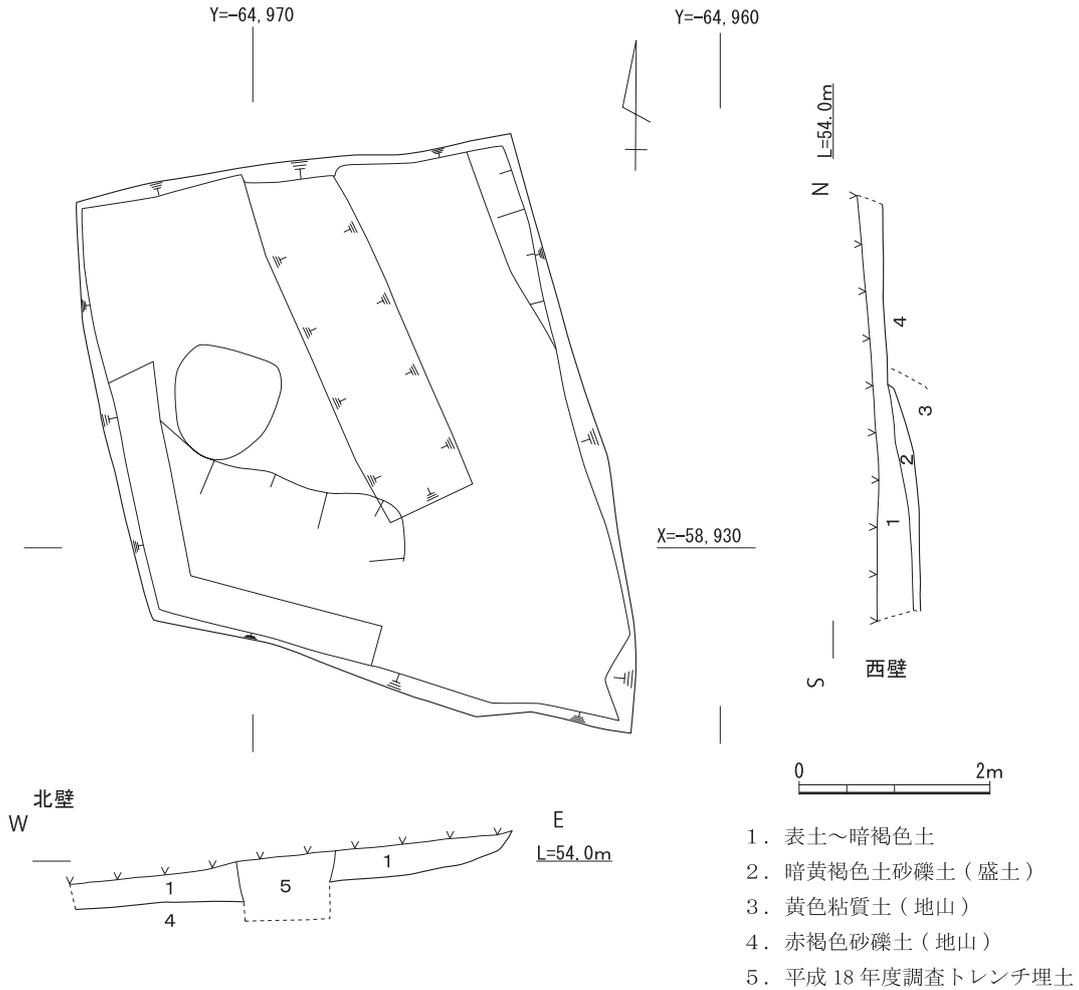
3) 出土遺物

1・2は須恵器杯蓋である。天井部を一部欠損している。1は口径14.0cm、現存の器高3.6cmである。2は口径14.0cm、現存の器高3.3cmである。いずれも口縁部は回転ナデ、天井部は回転ヘラケズリである。色調は灰褐色で、胎土には微量の白色砂を含む。これらは第8トレンチから出土した。

3・4は須恵器杯身である。下半部を欠損している。3は口縁端部を欠損している。推定口径13.4cm、器高3.6cmである。4は口径12.7cm、器高3.6cmである。いずれも口縁部は回転ナデ、体部下半部は回転ヘラケズリである。色調は灰褐色で、胎土には微量の白色砂を含む。受け部はやや退化しており6世紀中葉のものである。これらは第8トレンチから出土した。

5・6は中国製染付けである。下半部を欠損している。5は口径12.0cm、現存の器高3.2cmである。ややくすんだ白色の釉にコバルトで濃い青色の花模様を描いている。5の断面には漆が付着しており、使用時に破損したものを接着し修復している。これらは第6-1トレンチから出土した。7は中国製白磁杯である。下半部を欠損している。釉はややくすんだ白色である。第6-2トレンチから出土した。5～7は16世紀のものである。

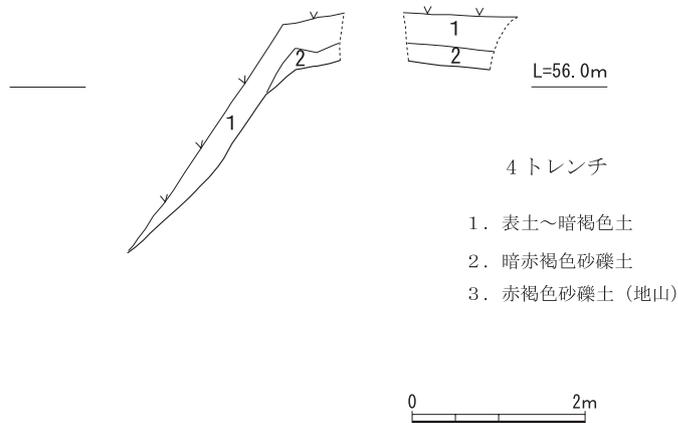
8は鉄製品である。両端を欠損している。断面は上が平坦で、下が尖っており、おそらく刀子



第10図 第3トレンチ平・断面図

の一部である。現存長2.1cmである。第5トレンチから出土した。

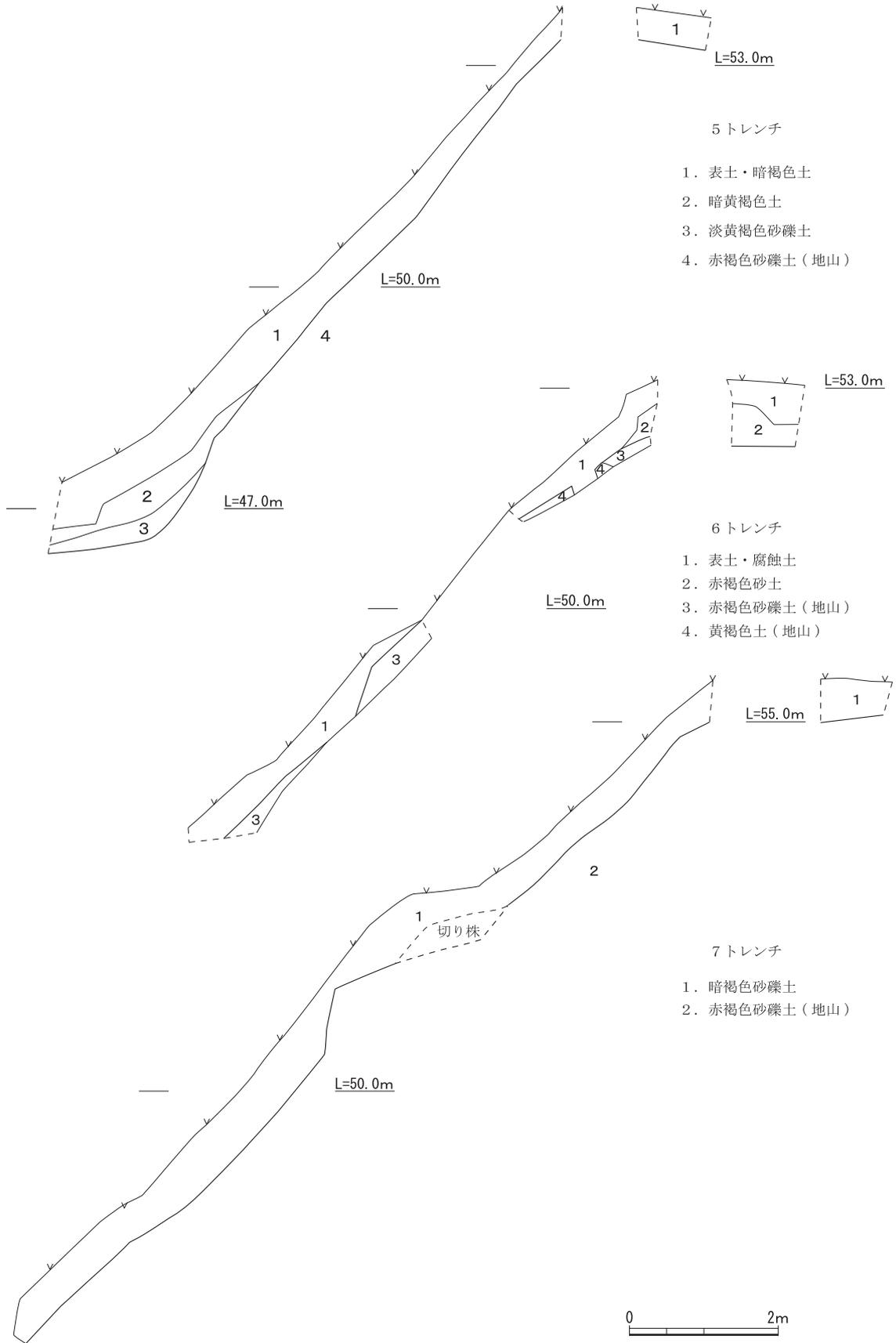
9は土師器皿である。口径7.4cm、器高1.7cmである。てづくね成形であるので、体部にはユビ押さえの痕がある。胎土は密で、1mm程度の白色砂を含む。焼成は軟、色調は淡褐色である。内面には油焔痕がある。第8トレンチから出土した。



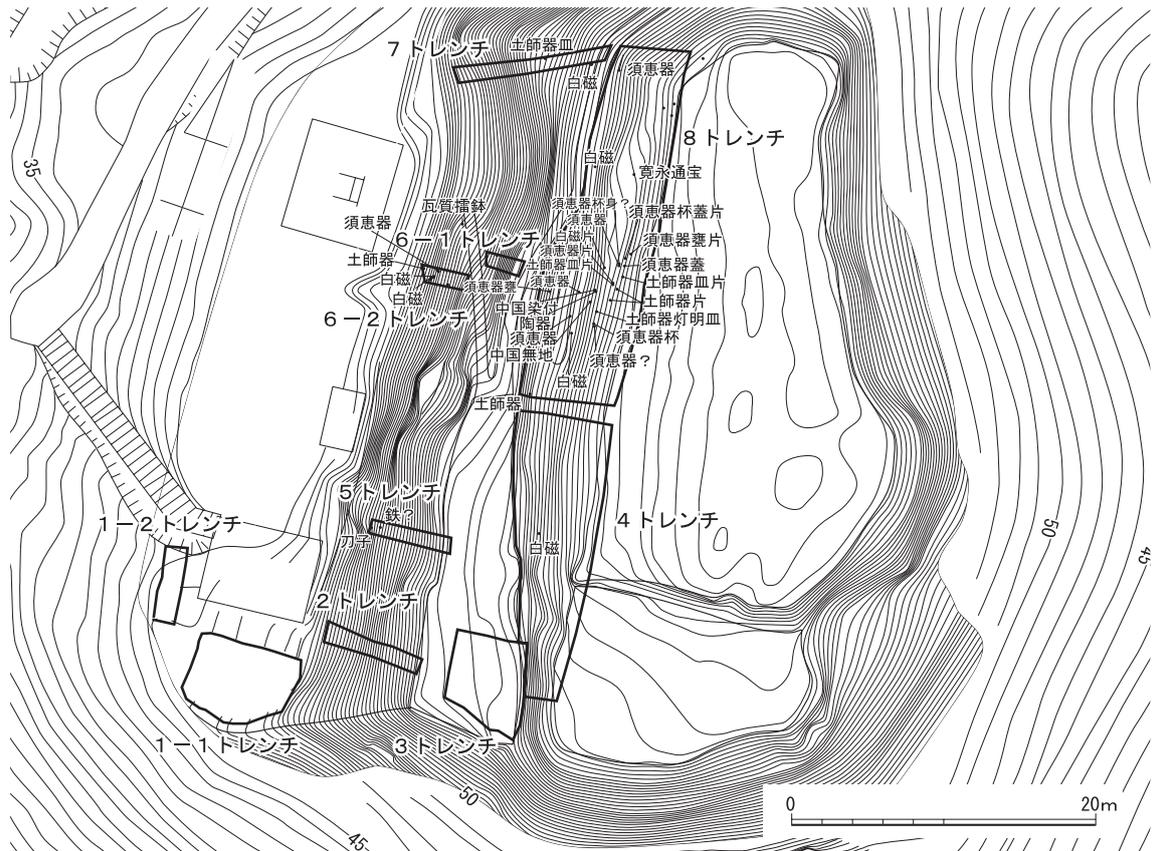
第11図 第4トレンチ断面図

10は土師器皿である。底部を欠損している。てづくね成形である。口縁部はヨコナデである。口径14.0cm、現存の器高2.5cmである。胎土は密で、焼成は軟、色調は淡褐色である。第7トレンチから出土した。平安京左京内膳町編年のS D168タイプで16世紀中葉のものである。

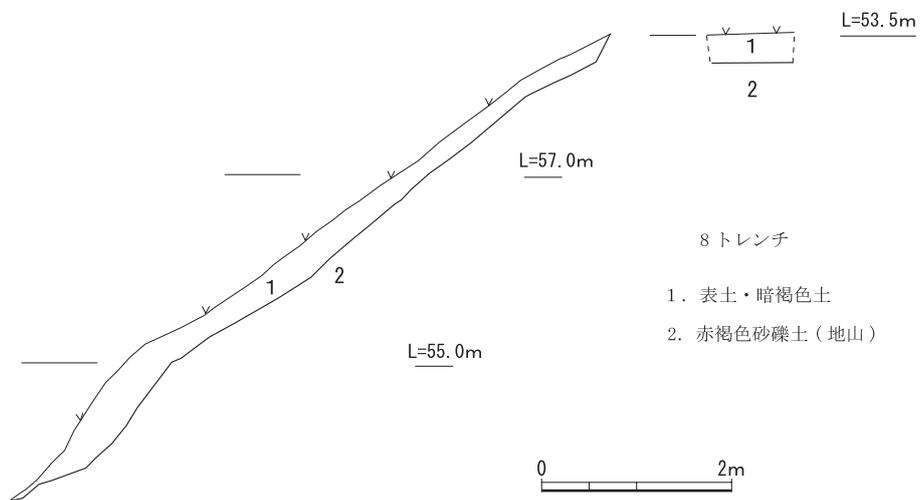
11は土師質の素地に柿色の釉薬をつけた灯明皿である。口径10.6cm、器高



第12図 第5～7トレンチ断面図



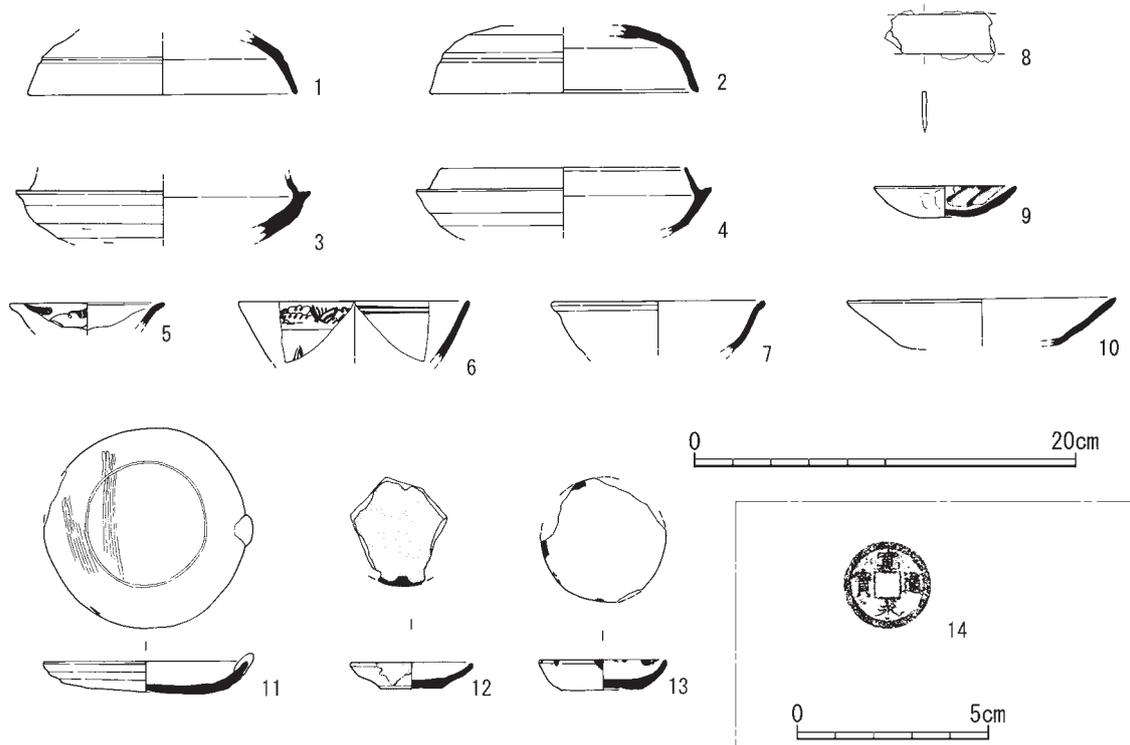
第13図 第5次調査遺物出土地点図



第14図 第8トレンチ断面図

1.8cmである。完形品である。口縁部の一部に小さな半円形の突起をつけている。灯明心を安定させるものである。内面にはハケ目が施されている。見込みの端には沈線が施されており、18世紀のものである。

12・13は灯明皿である。12は口径6.6cm、器高1.6cmで、13は口径6.4cm、器高1.4cmである。底部は糸きりで18世紀のものである。11・12は第6-2トレンチから出土した。13は第4トレン



第15図 第5次調査出土遺物実測図

チから出土した。

14は銭貨である。「寛永通寶」である。直径2.3cmである。第1-2トレンチから出土した。15は中国製染付椀である。花文を施す。16は中国製染付椀である。碁笥底タイプである。17は陶器すり鉢である。内面に櫛描きのすり目を施す。色調は橙褐色で、焼きしまっている。なお、小破片なので図示できなかったが、第1-1トレンチの下層から16世紀の土師器皿が出土した。

4) 小結

調査の結果、戦国時代の陶磁器が出土したことや、人工的に斜面を45度に削り、防御施設(切岸)を構築していたことから、山城であることが確認できた。また、古墳時代の須恵器が出土したことから、最高所にかつて古墳があった可能性が出てきた。

5. 第6次調査

1) はじめに

今回の発掘調査は、南北に長い城の南半部の広い曲輪周辺で行った。城の中心(主郭)はこの地点の2つ北側の尾根の頂点と考えられる。調査地の最高地点・標高60m付近には、南北40m、東西17mの細長い平坦面からなる郭1-1がある。その南は1mほど下がっており、郭1-1南と名づけた。実際の使用方法は郭1-1と一体のものであろう。これらの西側斜面には階段状に3つの郭(郭1-2、郭1-3、郭1-4)を造り、防御を固めていた。郭1-2は幅が狭く、帯曲輪として使用されたと考えられる。郭1-4は狭い郭であるので腰曲輪として使用されたい。郭1-1の東側の1段下がったところにも郭1-5を造っていた。これも狭い郭であるので腰曲

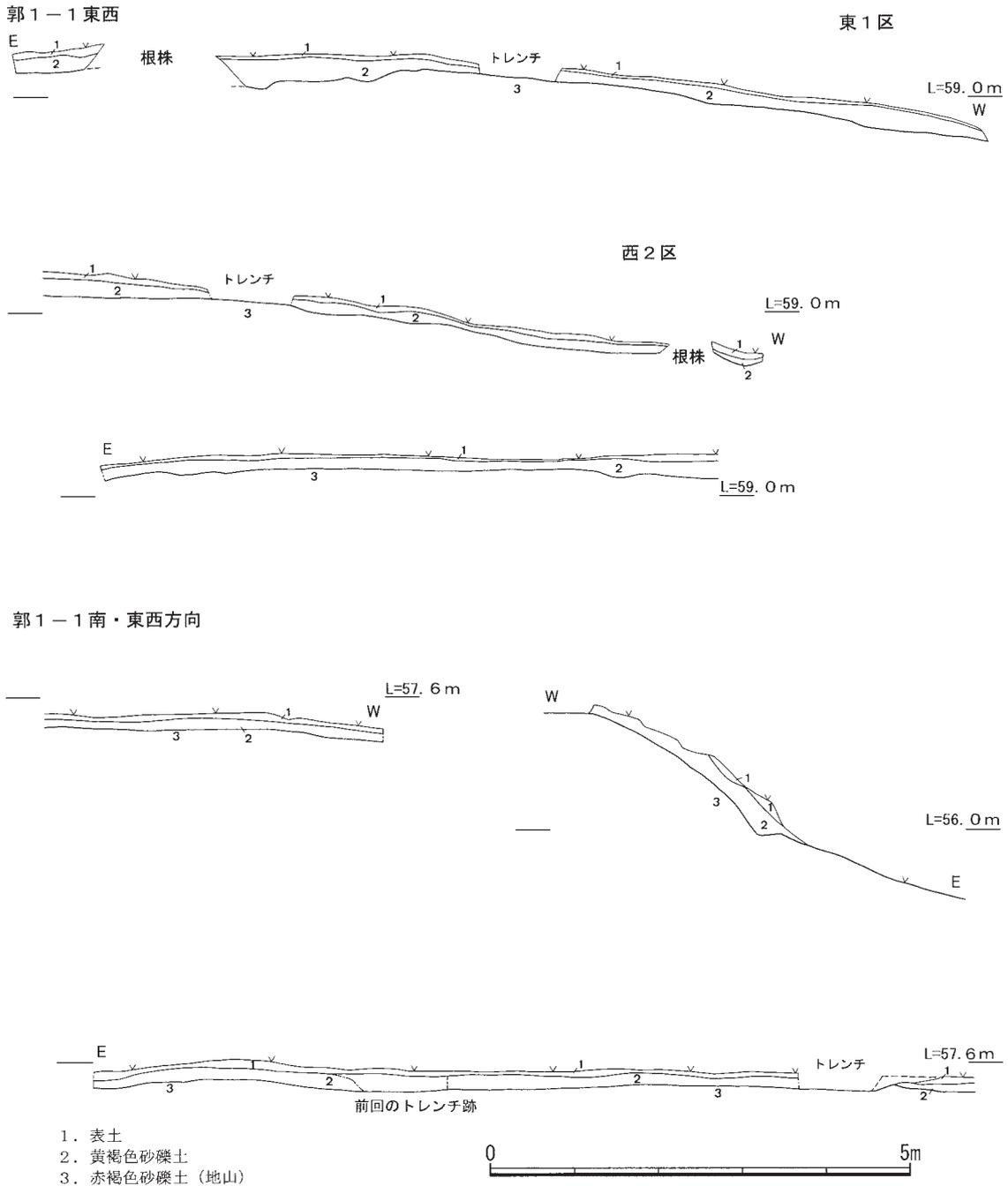


第16図 第6次調査範囲図

輪として使用されたい。郭と郭との間は人工的な斜面である切岸が造られていた。

2) 検出遺構

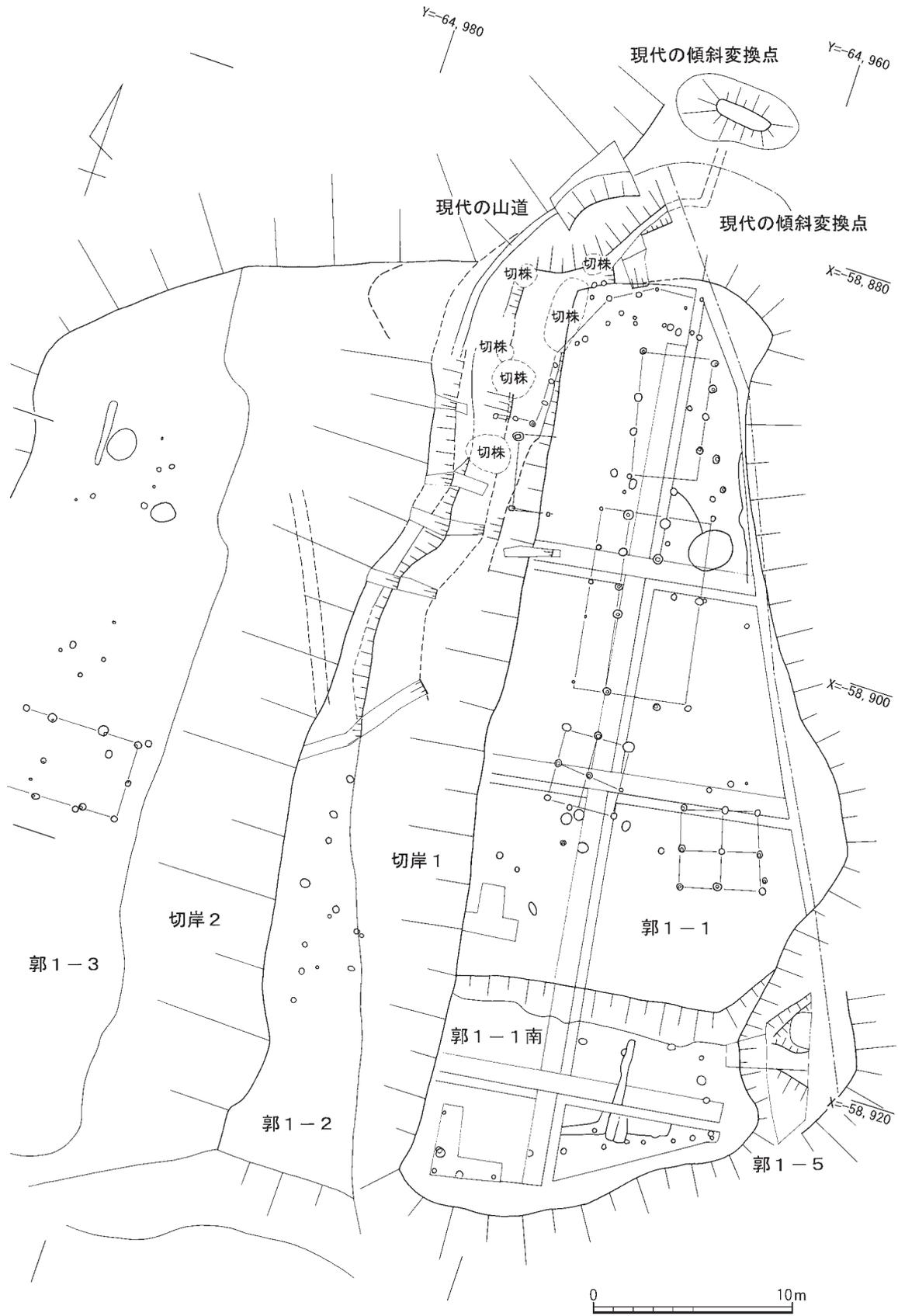
郭1-1 南側が広い台形である。北辺は10.5m、南辺は19.5m、長さ36.9mである。東端については調査範囲から外れており、遺構の有無は確認できなかった。平坦面を調査した結果10cm程度掘削すると地山が確認できた。包含層は黄褐色砂礫土層で、地山は同色か、赤褐色砂礫土層であった。北端には柵1が作られていた。柱穴は直径15～25cm、深さ5～30cmである。東端は確認できなかったが、さらに東側にまで作られていたと推測する。西端は南に折れている。郭1-1の西端は少し窪んでおり、ここに北から進入できる道があった。詳細は後述する。



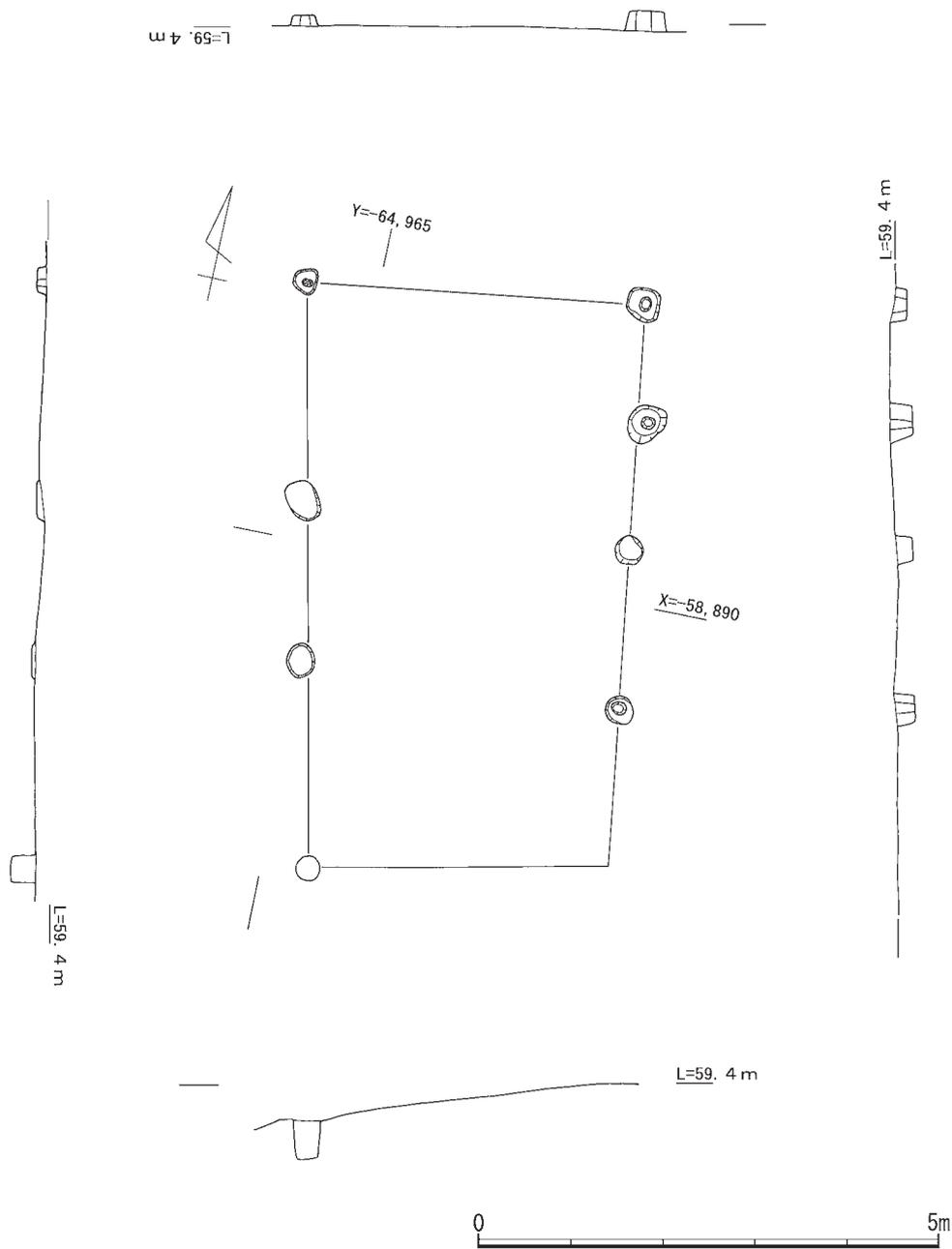
第18図 郭1-1、郭1-1南、郭1-5 東西断面図

その南で掘立柱建物跡4棟を確認した。掘立柱建物跡1と掘立柱建物跡2は南北に並んでおり、掘立柱建物跡3と掘立柱建物跡4はこれらの建物の南にあり、東西に並んで検出した。

掘立柱建物跡1 削平が激しく柱穴が残っていないか所が多いが、おそらく東西2間、南北4間と推定する。本来あるべき11か所の柱穴のうち、8か所が確認された。柱掘形の平面は円形で、直径0.3～0.4mである。復原した平面形はやや歪な長方形である。北辺が3.68m、南辺が3.26m、西辺6.4m、東辺6.06mである。西辺の柱間寸法は北から2.4m、1.72m、2.28m(1間不明)である。埋土は黄褐色砂質土で、深さは2～10cm程度である。出土遺物はなかった。



第19図 郭1-1～郭1-3平面図

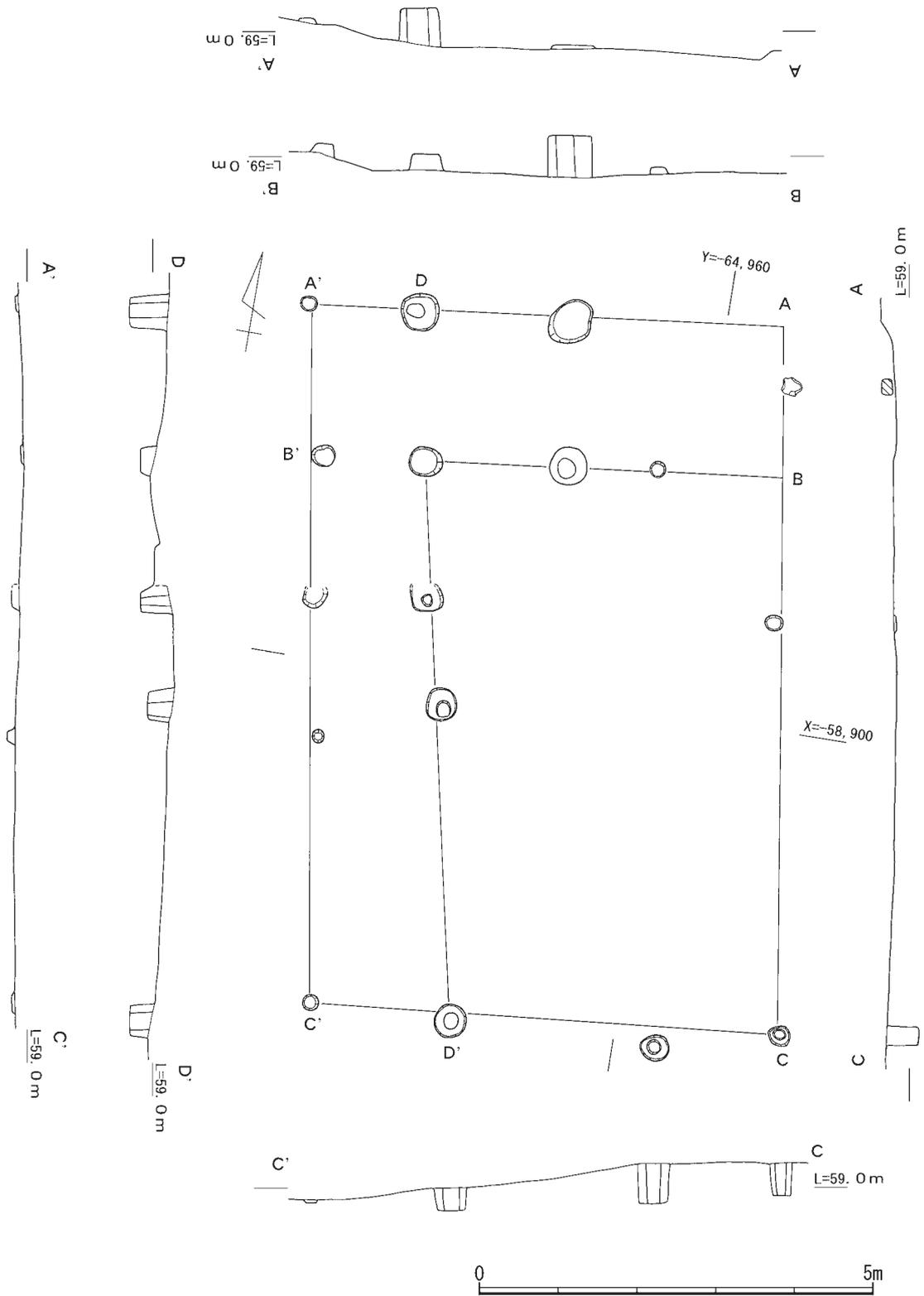


第20図 掘立柱建物跡1 実測図

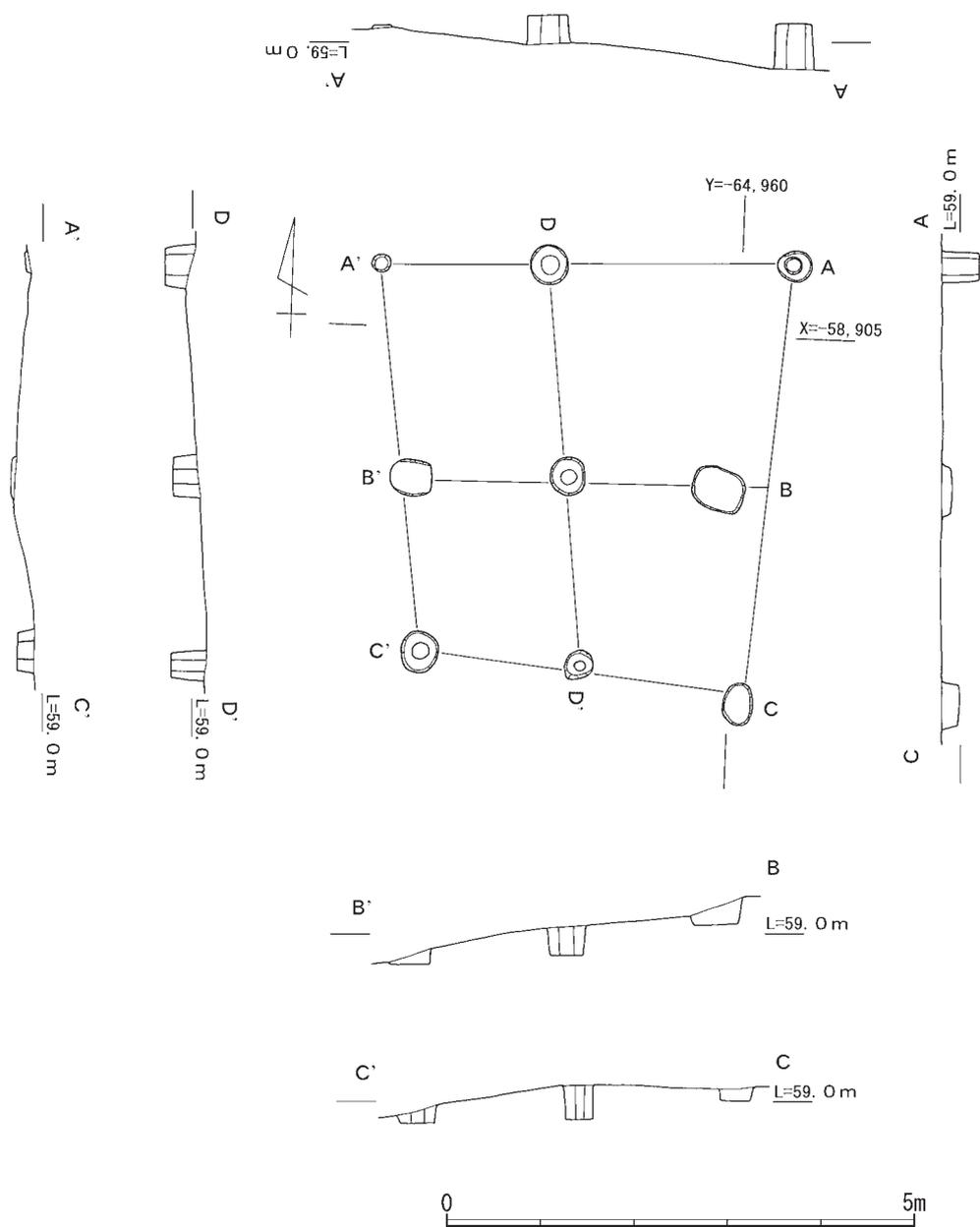
掘立柱建物跡2 東西2間、南北5間で、西廂と北廂をもつ。平面は円形で、身屋の柱の直径0.2m、廂の柱は0.15mである。北辺が6.08m、南辺が6.0m、西辺8.16m、東辺8.96mである。西辺の柱間寸法は北から1.92m、1.76m、1.68m、3.36mである。埋土は黄褐色砂礫土で、深さは10～30cm程度である。出土遺物はなかった。

掘立柱建物跡3 東西2間、南北2間の総柱建物跡である。柱穴の平面は円形で、直径0.3～0.4mである。北辺が4.56m、南辺が3.52m、西辺4.24m、東辺4.64mである。西辺の柱間寸法は北から2.4m、1.8mである。歪な建物である。出土遺物はなかった。

掘立柱建物跡4 東西2間、南北2間の総柱建物跡である。柱穴の平面は円形で、直径0.2～



第21図 掘立柱建物跡2実測図

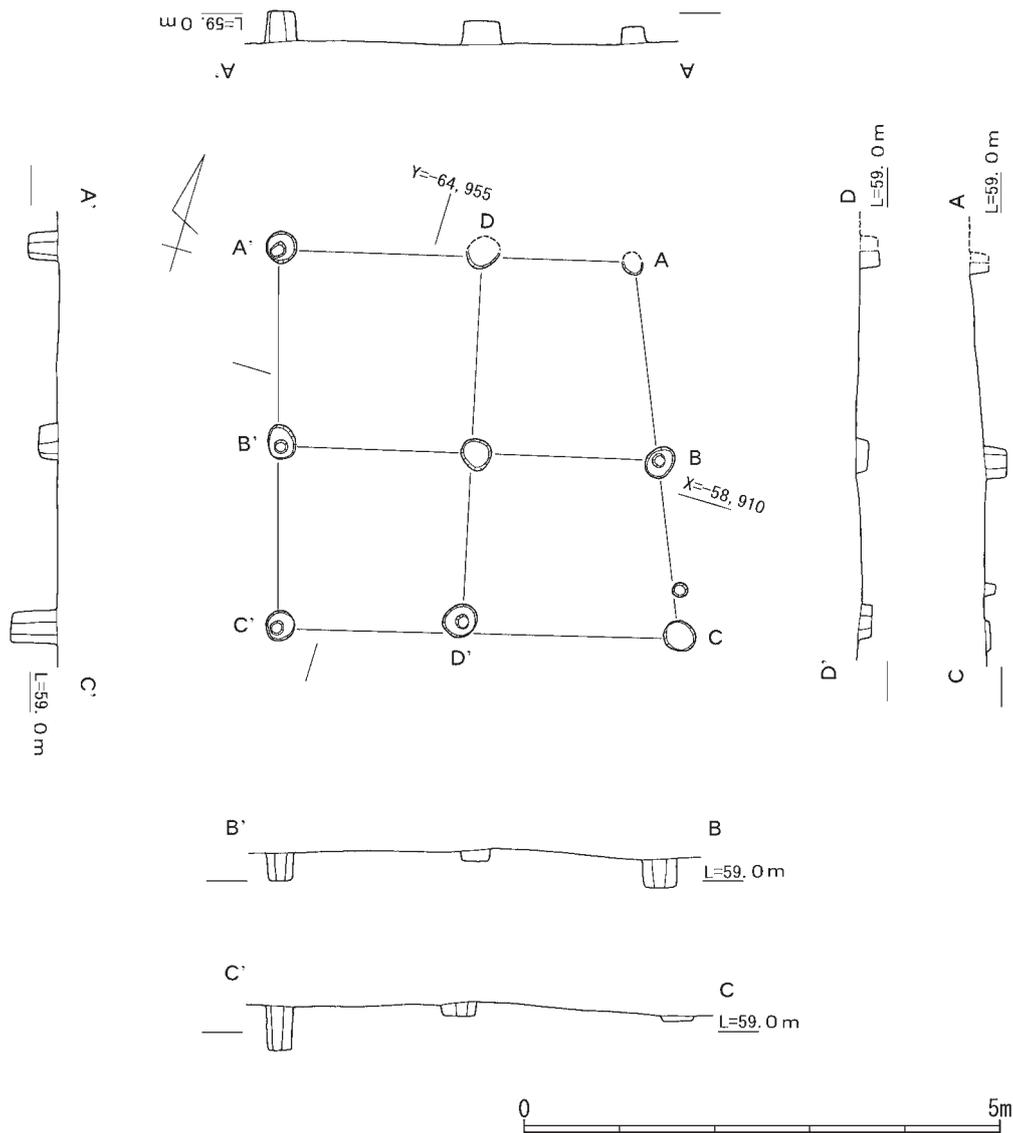


第22図 掘立柱建物跡3実測図

0.3mである。北辺が3.36m、南辺が4.24m、西辺4.0m、東辺4.0mである。西辺の柱間寸法は北から2.08m、1.92mである。歪な建物である。出土遺物はなかった。

堀切 郭1-1の北側には隣の郭へ続くやせ尾根がある。そこに向けて切岸があり、さらに堀切も認められた。地表からの観察で確認できる幅は上端で8.2mである。さらに北側には、掘り残した土塁状の高まり、堀切があり、北から3番目の郭へと続く。

さて、土塁状の高まりは地山を掘り残したものだが、堀切も土塁中央に向かうか所は幅1~2mだけ地山を掘り残していた。いわゆる土橋を形成していたようである。これは、地表観察の結果から判断した。そこから、斜めに道(幅0.5m)が造られ、郭1-1の北西部へ上がるようになっていた。

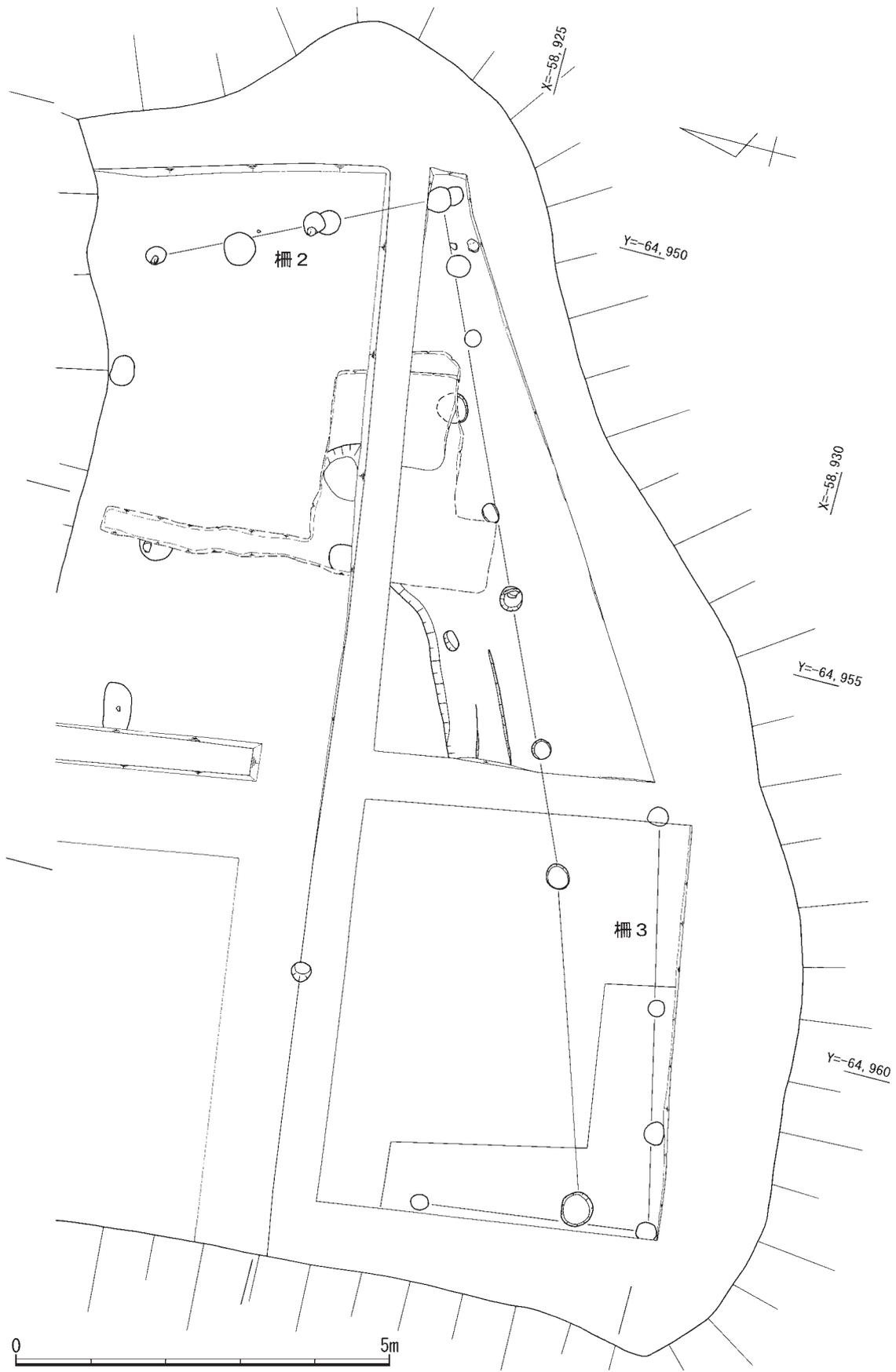


第23図 掘立柱建物跡4実測図

また、堀切は尾根に直交する形で造られていたが、西側は丘陵腹部に沿うように北西から南東方向に山を削って、人工的な切岸を築造していた。出土遺物はなかった。

柵1 郭1-1の北西隅で確認された「L」字状に屈折する。柱穴の掘形は直径は0.2～0.3m、深さは0.2～0.5mである。埋め土は黄褐色砂礫土である。郭の北辺に沿って10か所の柱穴をもつ。長さは5.8mである。その中央部は北側の郭に続く地点となる。西端で郭1-1から切岸1へ南側に屈折する。柱穴は6か所で、長さは6.6mである。南端ではさらに西側に屈折し、郭1-2の平坦面に設置されている。柱穴は4か所で、長さは2.2mである。郭1-2の下層は人工的な斜面である切岸1であることから、この施設は城が造り替えられた後の施設と判断される。

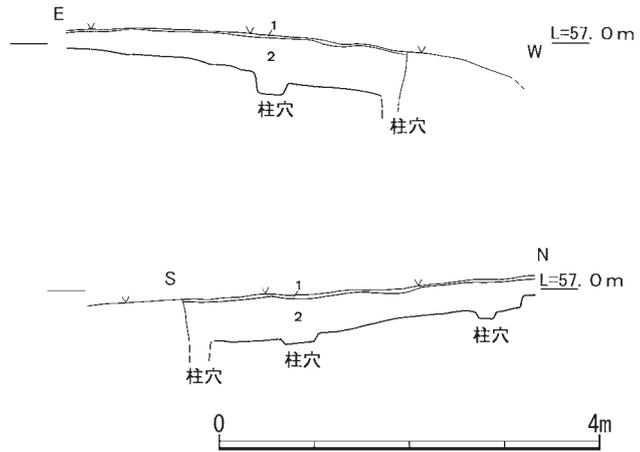
栈敷状建物跡 柵1の南側にある。郭1-1で1か所の柱穴を確認した。郭1-2・切岸1では礎石2か所を確認した。これらがつながって1つの建物を構成していたと考えられる。郭1-



第24図 郭1-1南実測図

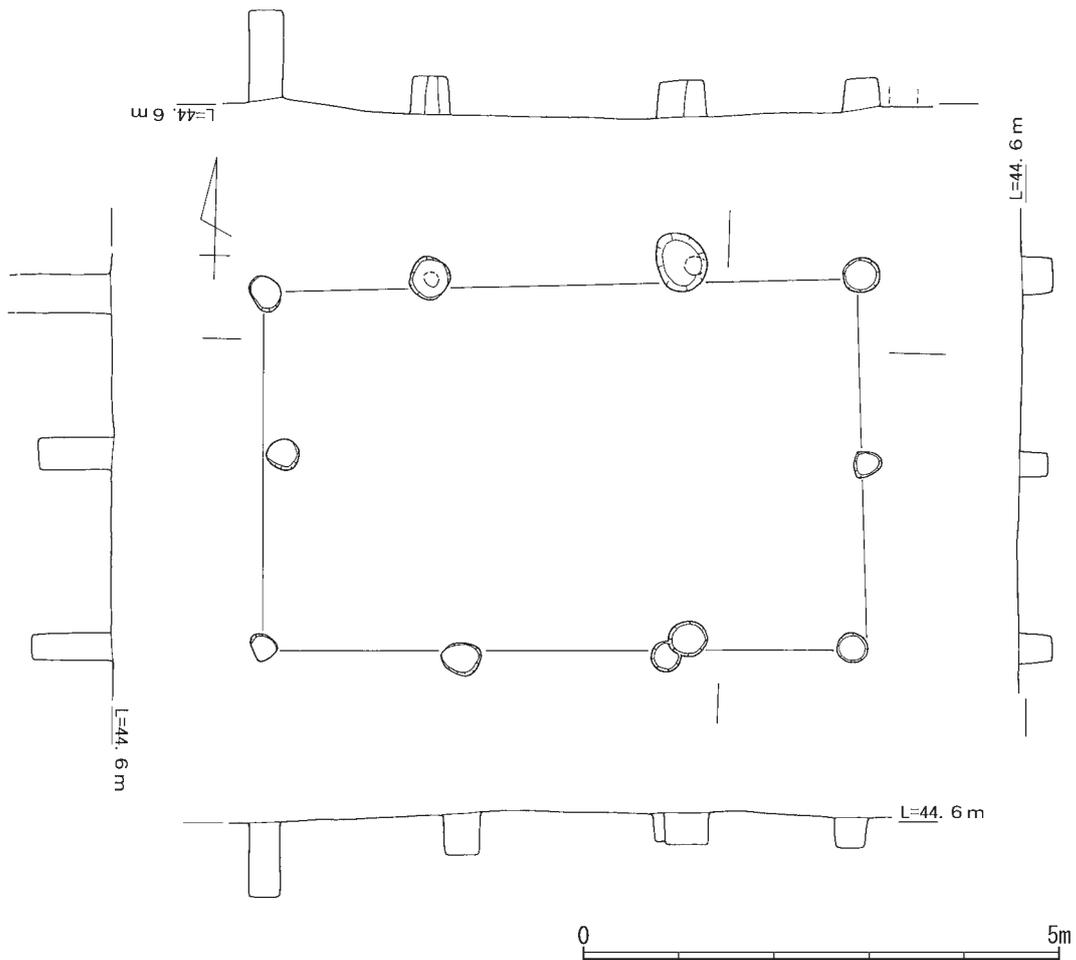
2の礎石の内、北側のものは、五輪塔の地輪を転用したものである。1辺25cmの方形で、厚さは23cmである。材質は花崗岩である。それを裏返しにして使用していた。1面には梵字が刻まれており、「(ア)」と書かれていた。意味は北を表す。南側の礎石は川原石である。長さ35cm、幅20cm、厚さ5cmである。2石の距離は3.6mであった。南側の礎石と組み合う柱穴は、直径は

郭1-1南・南西部断ち割り



第25図 郭1-1南下層断ち割り断面図

20cm、深さは12cmである。その距離は1.7mである。北側の礎石に伴う柱穴は木株によって攪乱され、確認できなかったが、これらを一体のものと考えれば、郭1-1から由良川に向かって西に張り出した棧敷あるいは舞台のような施設が想定できる。柱を据えるため礎石は小さく、高低



第26図 掘立柱建物跡5実測図



第27図 郭1-4実測図

差のある郭の高所部分は掘立柱建物用の柱穴であるが、これも小規模なものである。これらのことから、簡便な施設であったと推測する。また、礎石と掘立柱建物用柱穴を併用したことは、山頂でもあり、強風で倒壊しないようにしたためではないだろうか。こういった点から、この施設は城が造り替えられた後の施設と判断される。

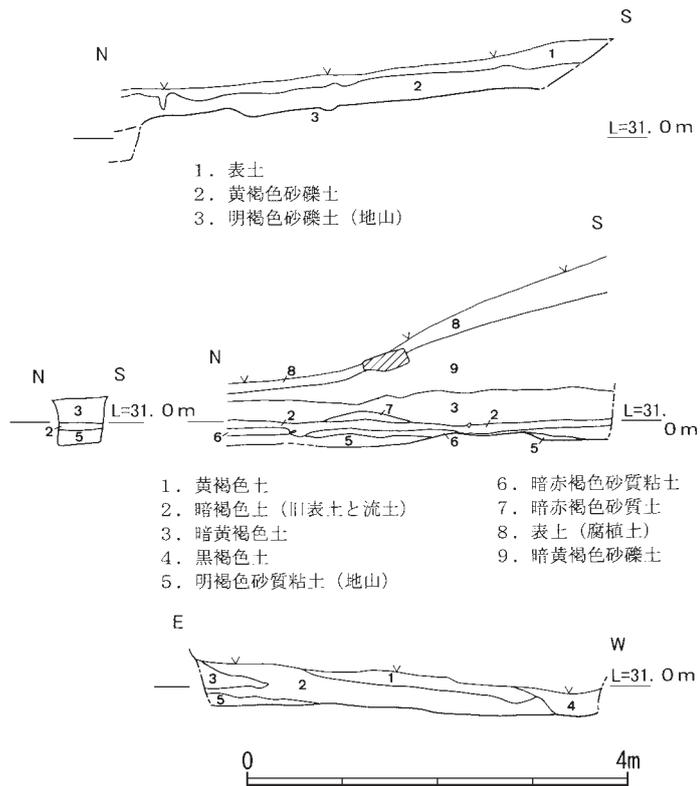
この部分とは反対の丘陵南端では郭1-1南を造成していた。

郭1-1南 平面形は、北辺16.8m、南辺18.6m、西辺9.6m、東辺5.7mの台形である。標高は57.5mである。南と東には逆「L」字状に屈折する柵2が作られていた。下層を調査したところさらに南側に柵3が検出された。また、丘陵南西部の平面形は本来は丸いものであったが、自然地形に40cmほど盛り土され、方形に整えられている。

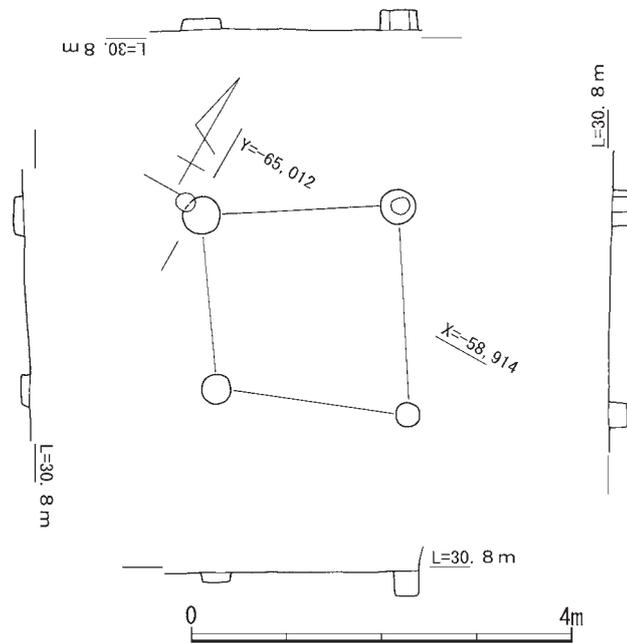
柵2 南辺8か所、東辺4か所の柱穴をもつ。柱掘形の直径は20～40cm、深さは20～60cmである。表土下の黄褐色砂礫土から掘り込まれている。

柵3 南西のみ確認できた。西辺2か所、南辺4か所の柱をもつ。柱掘形の直径は20～30cm、深さは20～30cm以上である。黄褐色砂礫土の下から掘り込まれていた。

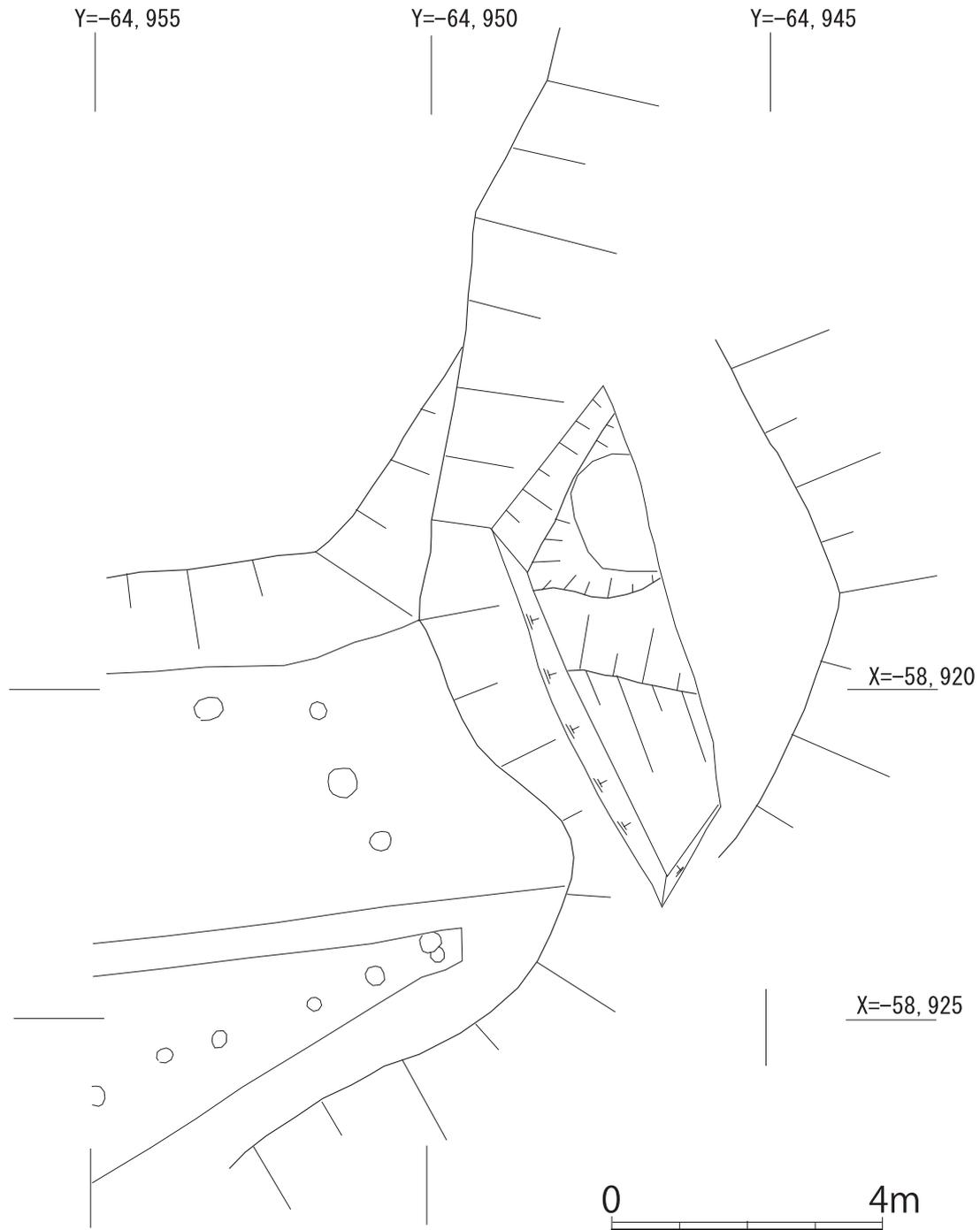
郭1-2 郭1-2は郭1-1の西側に造成した平坦面である。郭1-2の平面形は、南北47.6m、東西7.3～5.4mの北に狭まる台形である。標高53.2～55.5mの地点にある。北側が高く、



第28図 郭1-4断面図



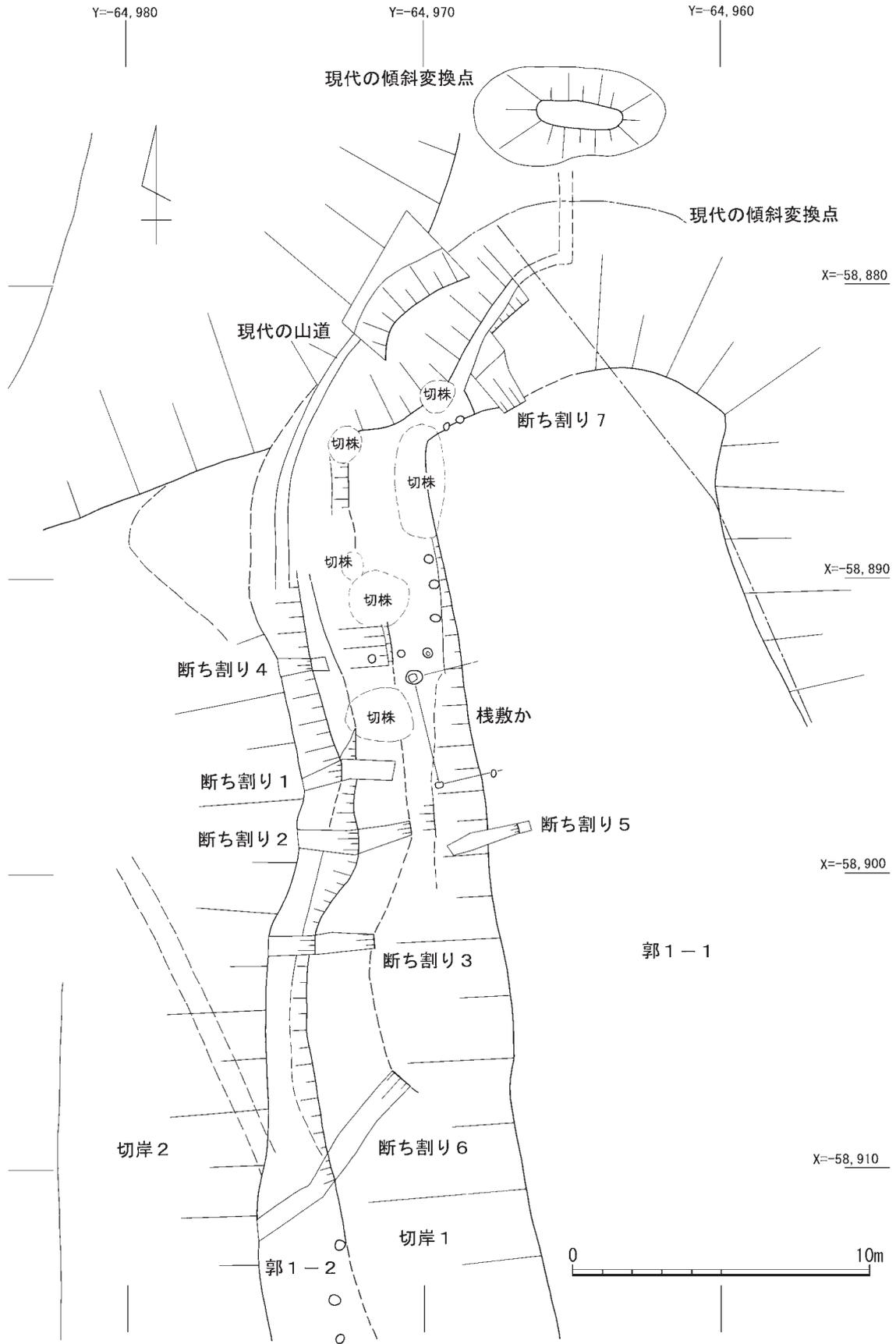
第29図 掘立柱建物跡6実測図



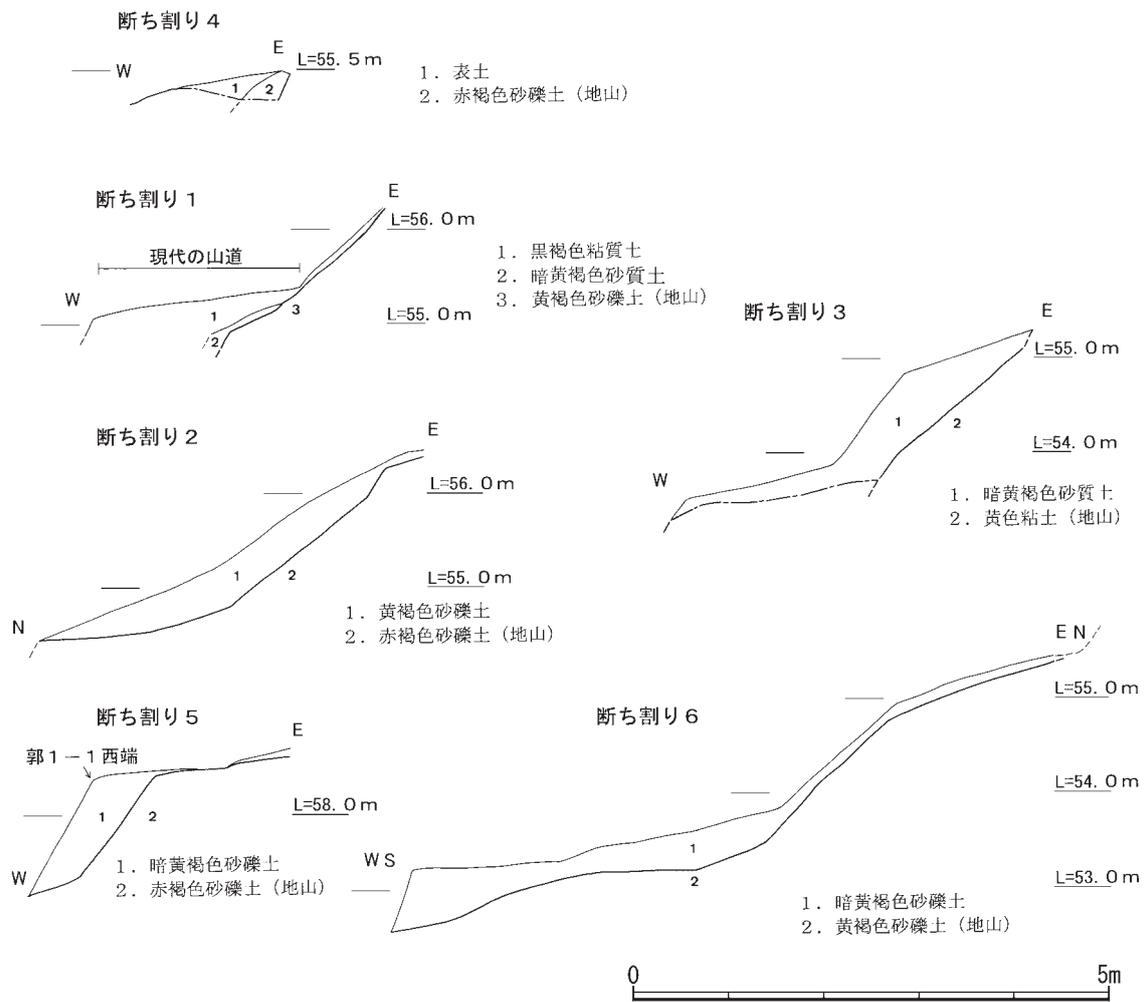
第30図 郭1-5平面図

南側が低い。調査前は台形であったが、調査の結果北部は、切岸1となっていた段階があり、その後、土が盛られ、細い平坦地が造られ、そこに先述の積敷状施設の礎石が置かれた。なお、盛り土の中に多数の古墳時代の須恵器片が包含されていたので、おそらく郭1-1北部に古墳があり、それを削平した結果であろう。南部では数か所のピットが検出されたが、建物や柵列としてまとまったものはなかった。おそらく、兵士がたむろする帯曲輪として使用されたと推定する。

郭1-3 郭1-3の平面形は、南北45m、東西6～10mの北に狭くなる台形である。標高



第31図 郭1-1周辺断ち割り平面図



第32図 断ち割り断面図

44～45mの地点にある。調査前には北端に中山八幡神社の社殿があった。また、南端には物置小屋があった。下層を調査した結果、郭の中央部で掘立柱建物跡5を検出した。

掘立柱建物跡5 東西3間、南北2間である。平面は円形で、柱穴の直径0.2～0.4mである。北辺が6.24m、南辺が6.32m、西辺3.8m、東辺3.94mである。西辺の柱間寸法は北から1.7m、2.1mである。北辺の柱間寸法は西から1.8m、2.72m、1.72mである。埋め土には焼土を含み、暗褐色土である。郭の中央部にあり、また、東西棟であることから郭の幅を狭めている。

郭1-4 もっとも西側にある郭である。南北1.4m、東西2～5mの両側に狭まる台形をなしている。標高は30.8mと低い。丘陵の斜面を削り、下に土を置いて平坦面を造っている。郭の中央部に東西1間、南北1間の掘立柱建物6が建てられていた。上層は暗褐色土層(旧表土と流土)で、下層は暗褐色砂質粘土層である。トレンチは地形に沿って北側が幅4mと広く、南側は幅0.6mと狭い。

掘立柱建物跡6 東西1間、南北1間の掘立柱建物跡である。柱掘形の平面は円形で、直径0.2～0.4mである。北辺2.16m、西辺2.0m、南辺2.0m、東辺2.32mで、やや歪な建物である。埋め土は暗褐色砂質土で、深さは0.6～0.7mであり、非常に深い。したがって、高い建物が想定で

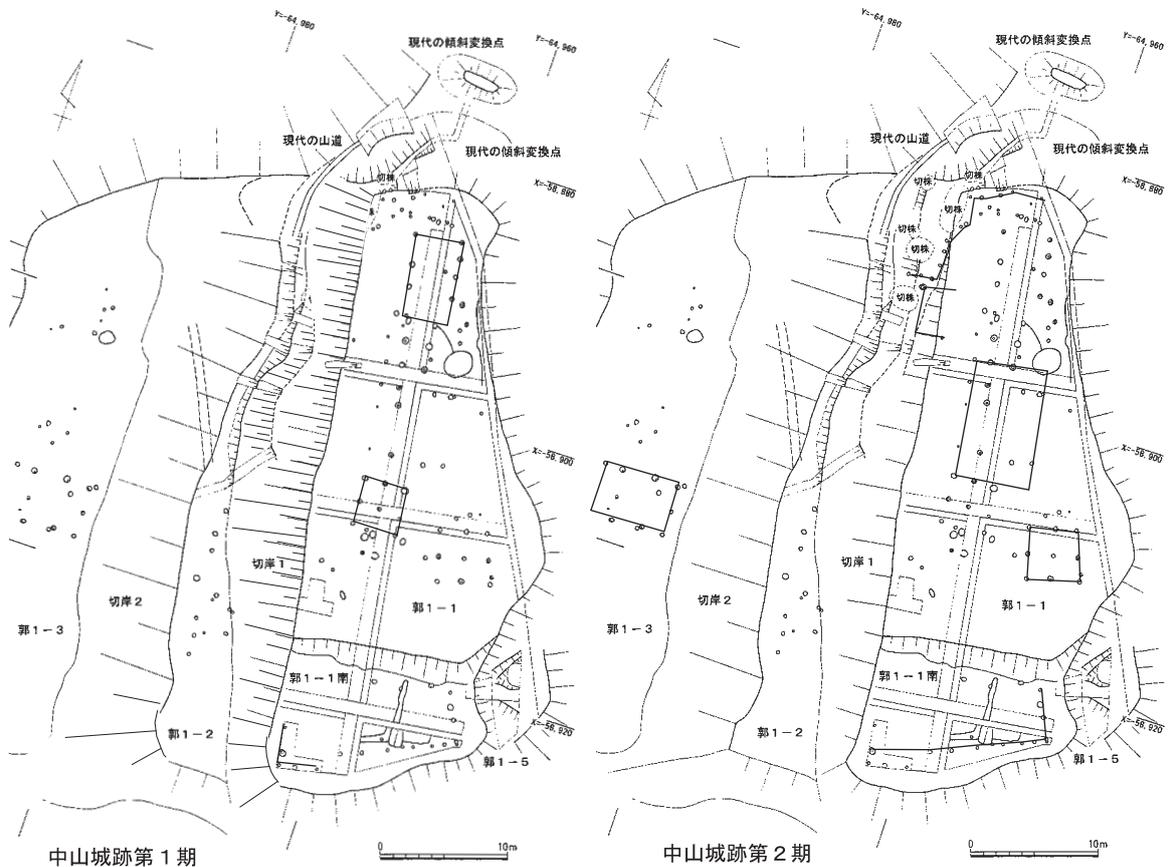
き、この場所から由良川が一望できることから、見張りのための建物が想定できる。

郭1-5 郭1-1南の斜面下にある。標高55.2mで、郭1-1南より2.2m低い位置に自然地形の斜面を削り、平坦面を造成していた。南北7.2m、東西4.6mの方形である。一部は調査地外であるので、トレンチは東西12m、南北6.5mの範囲に設定した。掘削した結果、すぐ地山となった。南側は自然の傾斜面であった。北側は三角形に削られており、下側から上がる道として使用されていたかもしれない。ただし、郭1-1北側斜面で確認されたような幅0.5mの直線的な道ではなく、自然の地形の凹凸を利用した簡便なものである。

城の造成 以上の調査結果を検討すると、城は1度造り替えられたことがわかる。古い時期を第1期、新しい時期を第2期とする。

第1期 郭1-1の北部は建物1があり、南側に建物3があった。これは、埋め土が砂質土で共通していることによる。建物1をこの時期とした根拠は、柱穴の深さがほとんどないほど削平されていることがあげられる。つまり、かつて、数十cm高かった地形を削ったことでこのような状況になったと考えるのである。切岸1や郭1-2などで須恵器が出土したことは、建物1近辺に古墳が存在していたことを示している。それを、第2期に削ったと推定する。郭1-2の北部は平坦面はなく切岸であった。また、郭1-1南と郭1-3の南西部は自然地形のままであった。なお、郭1-1南の南西部には柵3を設置している。

第2期 郭1-1の北部は建物2と建物4があった。これは、埋め土が砂礫土で共通している



第33図 中山城跡変遷概念図

ことによる。北部を削り、平坦面を造り、その丘陵端から西側には棧敷あるいは舞台を張り出していた。この施設の礎石を据えるため郭1-2・切岸1の北部を盛り土し、平坦面を造っていた。柵1と道はこの段階の施設である。郭1-1南と郭1-3の南西部に盛り土をして、隅を方形に張り出した。織豊期城郭にみられるやりかたである。郭1-1南の南端と東端には柵2が作られていた。

3) 出土遺物

遺物は整理箱7箱分が出土した。土師器皿、陶器甕、瓦器鉢、中国製白磁・青磁、鉄製品、銅製品、碁石など多種にわたる。小破片ではあるが400点以上が出土した。中世の山城としてはその出土数は多い。遺物のほとんどは表土掘削時に出土したもので、遺構に伴うものはほとんどない。

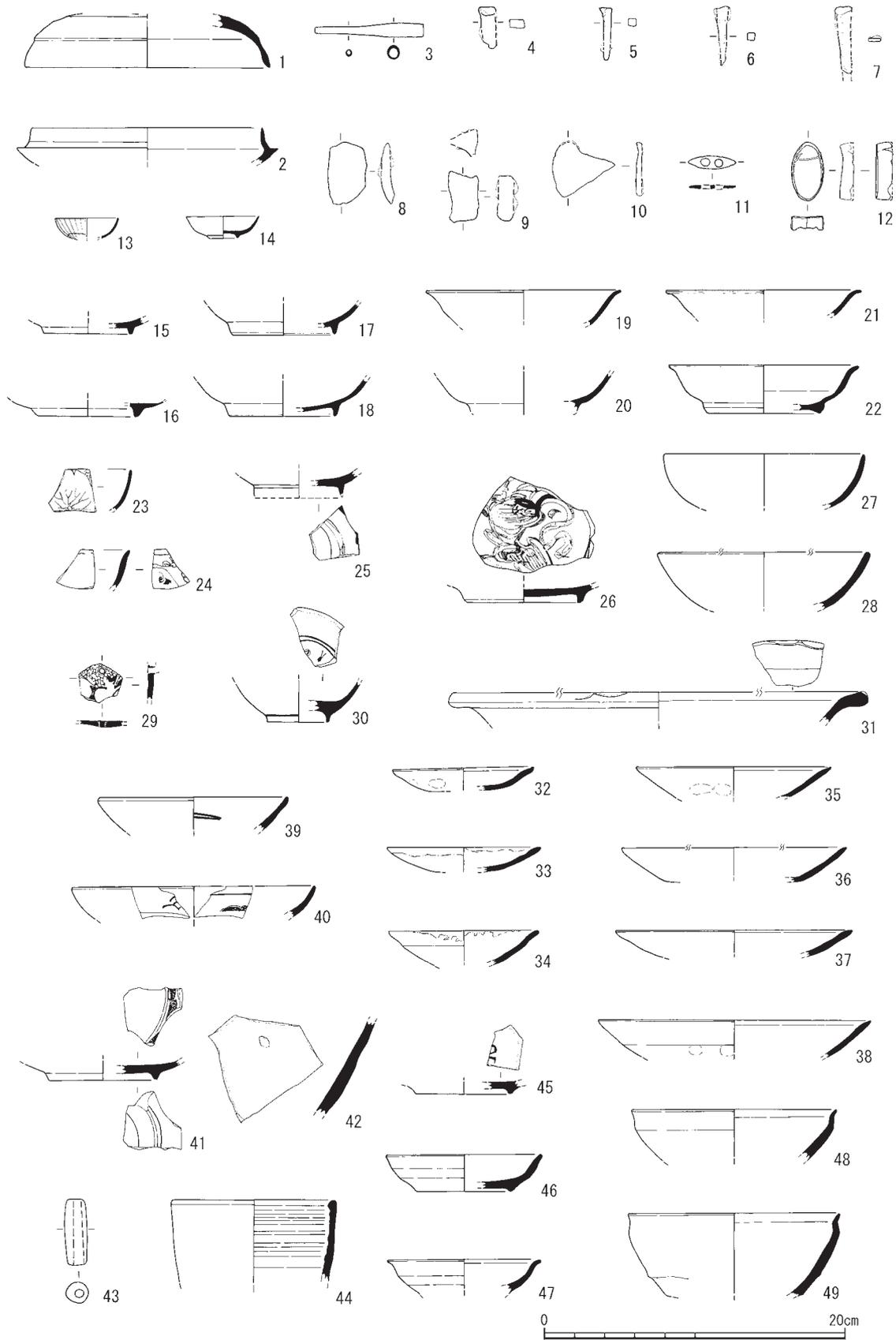
遺物の出土状況を見ると、郭1-1ではほとんど出土せず、西側の斜面である切岸1の北部で集中的に出土した。種類は土師器皿、丹波焼甕・すり鉢、越前焼鉢、美濃・瀬戸天目茶碗、中国製染付け・白磁皿などである。郭1-1南では、土師器皿や中国製染付け・青磁碗などのほか、甲冑の部品である^{こはぜ}靴が出土した。もっとも多く出土したのは郭1-4である。土師器皿と、瓦質すり鉢、丹波焼甕、中国製の白磁皿・碗、染付け皿・碗、刀の柄頭や、鉄釘などがある。出土遺物の年代観より、戦国時代の後半(16世紀前半)に城は造られ、16世紀後葉に平坦地を広げて造り替えたようである。もっとも新しい遺物は1600年前後の唐津焼や土師器皿である。

1・2は須恵器である。いずれも切岸1の北部から出土した。1は須恵器杯蓋である。天井部は欠損している。口径16.2cm、現存器高3.6cmである。外面は回転ナデである。胎土は良で、焼成はやや軟である。色調は灰色である。2は須恵器杯身である。口縁部は回転ナデである。口径15.2cm、現存器高2.4cmである。受け部は退化してやや低くなっているため6世紀中葉のものである。

3は銅製のキセルである。吸い口の直径0.5cm、長さ7.2cmである。郭1-1の北西部の表土から出土した。江戸時代である。

4～7は鉄釘である。いずれも錆びており、下半部は欠損している。長さは2.8～4.5cm、幅は0.6～1.4cmである。4は郭1-1の北西部、5は郭1-1西部中央、6は郭1-1西南部から出土した。8～10は鉄製品である。用途は不明である。8は郭1-4から出土した。9は郭1-1南西北部から出土した。10は郭1-1南東部から出土した。

11は銅製の^{こはぜ}靴である。平面形はレンズ状である。2か所に円形の穴を開けている。長さ3.2cm、中央部の幅0.8cm、両端は尖っている。厚さ0.3cm、厚さは平板である。紐を通す円形の穴は直径0.8cmである。甲冑の胴巻きと肩当などをつなぐ際に使用するものである。郭1-1南の西北部から出土した。12は銅製の刀の柄頭である。平面は楕円形で、断面は刀の柄にかぶせるため、「コ」の字となっている。長さ4.5cm、幅1.4cm、両端は細くなっているが丸まる。厚さは0.3cm、かぶせるため両端の厚さは0.9cmである。郭1-4のトレンチ東辺の中央部の地山直上の暗褐色土層から出土した。



第34図 第6次調査出土遺物実測図(1)

13は白磁小杯である。内外面とも白色に施釉されている。外面は花形である。型押し成形で、内面は平滑である。口径4.1cm、器高1.4cmである。郭1-4の表土層から出土した。14は白磁小杯である。内外面とも白色に施釉されている。高台を施す。口径4.9cm、器高1.5cmである。郭1-3から出土した。15は中国製白磁皿である。口縁部は欠損している。削りだし高台である。高台径5.8cm、現存の器高は1.2cmである。郭1-1東部中央から出土した。16は中国製白磁皿である。口縁部は欠損している。削りだし高台である。全面施釉しているが、畳み付けのみ露胎である。高台径3.3cm、現存の器高は1.1cmである。郭1-4の茶褐色土層から出土した。17は中国製白磁皿である。釉調は灰色がかかる白色である。口縁部は欠損している。削りだし高台である。高台径6.8cm、現存の器高は2.2cmである。郭1-4の黄褐色砂質土層から出土した。18は中国製白磁皿である。釉調は灰色がかかる白色である。口縁部は欠損している。削りだし高台である。高台径6.9cm、現存の器高は2.4cmである。郭1-4の黄褐色砂質土層から出土した。19は中国製白磁皿である。釉調は灰色がかかる白色である。底部は欠損している。口縁端部は端反りである。口径12.8cm、現存の器高は2.4cmである。郭1-4から出土した。20は中国製白磁皿である。釉調は灰色がかかる白色である。口縁部は欠損している。削りだし高台である。高台径6.8cm、現存の器高は2.7cmである。郭1-4の黄褐色砂質土層から出土した。18と同一個体である可能性がある。21は中国製白磁皿である。釉調は灰色がかかる白色である。底部は欠損している。口縁端部は端反りである。口径12.8cm、現存の器高は1.8cmである。郭1-4の暗褐色土層から出土した。19とともに端反りのものは16世紀前葉から中葉である。22は中国製白磁皿である。釉調は灰色がかかる白色である。底部は一部欠損している。口縁端部は端反りである。口径12.5cm、現存の器高は3.3cmである。郭1-4の黄褐色砂質土層から出土した。23は中国製染付け椀である。口縁部のみ出土した。外面は灰色で、貫入がはいる。内面は樹木のような絵がコバルトで描かれている。郭1-3から出土した。24は中国製染付け椀である。口縁部のみ出土した。外面はコバルトで花文が描かれている。内面は口縁部に近いところに1条の線がコバルトで描かれている。郭1-3から出土した。25は中国製染付け椀である。底部のみ出土した。全面施釉されている。底部外面には1条の線がコバルトで描かれている。釉調は青色がかかる白色である。底径は6.0cmである。郭1-1南の西南部で出土した。26は中国製染付け椀である。底部のみ出土した。内面の見込みにはコバルトで文様が描かれている。削りだし高台である。底径は4.1cmである。現存の器高は1.2cmである。郭1-1北西部に近い切岸1から出土した。27は中国製龍泉窯青磁椀である。口縁部から体部まで遺存していた。全面施釉しているが、無紋である。釉調は緑灰色である。素地は淡褐色である。口径13.2cm、現存の器高は3.7cmである。郭1-1西北部の黄褐色砂質土層から出土した。28は中国製龍泉窯青磁椀である。口縁部から体部まで遺存していた。全面施釉しているが、無紋である。釉調は緑灰色である。素地は淡褐色である。口径13.8cm、現存の器高は3.9cmである。郭1-4から出土した。29は中国製染付け水滴である。外面はヘラにより立体的に仕上げている。そこに施釉しており、内面は露胎である。外側から内側に向けて円孔が空けられている。破片であるが現存の縦2.7cm、横2.9cm、厚さ0.5cmである。30は中国製染付け椀である。

内外面とも施釉しており、内面の見込みにはコバルトで文様を描いている。底部は大きく抉っており、いわゆる碁笥底である。小野分類のE群である。底径は4.1cm、現存の器高は2.8cmである。郭1-4の黄褐色砂質土層から出土した。31は中国製龍泉窯青磁盤である。口縁部が遺存している。内外面とも施釉している。口縁部はヘラにより花形に刻んでいる。釉調は緑灰色で、素地は灰色である。口径は21cmである。

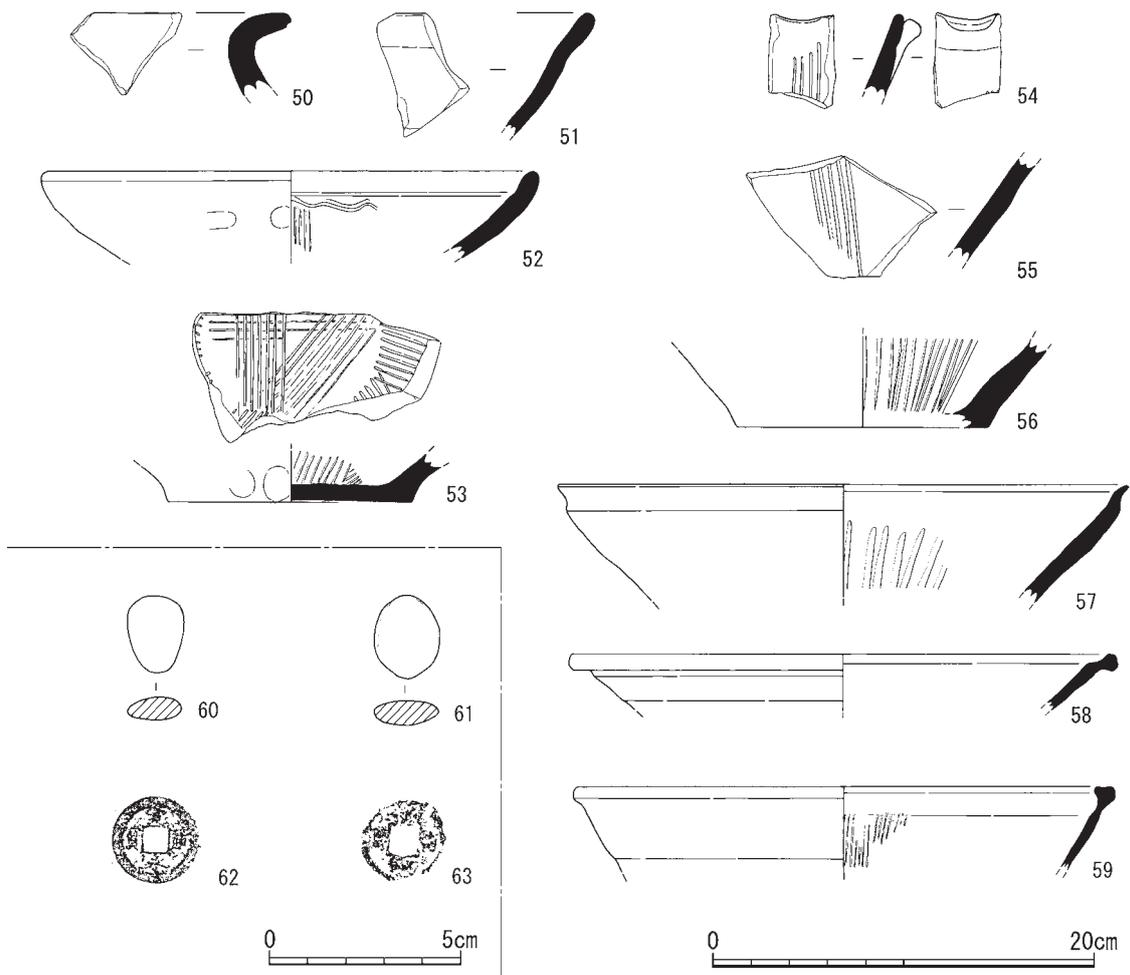
32は土師器皿である。底部が一部欠損している。口径9.4cm、現存の器高は1.5cmである。口縁部にはヨコナデを施し、体部外面はユビ押さえを施す。口縁端部はやや外反している。色調は淡褐色で、焼成は良好、胎土には半透明の3mm程度の砂を含んでいる。郭1-1北西部横の切岸1の黄褐色砂質土層から出土した。平安京左京内膳町跡のSD164タイプに類似しており、16世紀中葉のものである。33・34は土師器皿である。底部が一部欠損している。33は口径10.2cm、現存の器高は1.7cmである。口縁部に油煤痕があり、灯明皿として使用されたものである。郭1-1北西部横の切岸1の黄褐色砂質土層から出土した。34は口径10cm、現存の器高は2.3cm、口縁部に油煤付着。35は土師器皿である。底部が一部欠損している。口径13.0cm、現存の器高は2.0cmである。口縁部はやや外反気味であり、平安京左京内膳町跡のSD164タイプよりやや新しい傾向であるので、16世紀第3四半期と推定する。郭1-1北西部横の切岸1の黄褐色砂質土層から出土した。36は土師器皿である。底部が一部欠損している。口径は不明であるが、中型の皿である。現存の器高は2.4cmである。口縁部は直線的だが、やや内反り気味であり、平安京左京内膳町跡のSD170タイプよりやや新しい傾向である。16世紀第4四半期と推定する郭1-1北西部横の切岸1の黄褐色砂質土層から出土した。37は土師器皿である。底部が一部欠損している。口径15.8cm、現存の器高は1.8cmである。口縁部は直線的であり、平安京左京内膳町跡のSD170タイプである。切岸2から出土した。38は土師器皿である。底部が一部欠損している。口径18.2cm、現存の器高は2.5cmである。口縁部は直線的であり、平安京左京内膳町跡のSD170タイプの典型例である。口縁部がやや外反したこの形式は1568年の織田信長京都上洛以降の型式と判断しており、1590年ごろまで盛行したと考えている。切岸2から出土した。

39は中国製染付け椀である。内面にコバルトで絵が描かれている。口径12.5cm、現存の器高は2.3cmである。郭1-1の西部中央から出土した。40は絵唐津皿である。体部内外面に焼成前に絵を描いている。口径16.1cm、現存の器高は2.1cmである。切岸1から出土した。41は40と同一の高台部分である。底径7.2cm、現存の器高は1.4cmである。切岸1から出土した。

42は唐津鉢である。内外面とも施釉されている。釉色は緑灰色を基調に、黒い斑点が入る。体部片のみ遺存していた。破片の大きさは縦7.2cm、横7.0cmである。郭1-4から出土した。

43は土錘である。黒色である。体部は円筒形である。長さ4.5cm、胴部の径1.5cm、穴の直径は0.6cmである。郭1-4から出土した。

44は唐津香炉である。円筒形で、口縁端部は内側にやや肥厚している。体部内面にはロクロ目が遺存していて、露胎である。外面は茶褐色の釉が掛かっている。底部は欠損している。口径10.8cm、現存の器高は5.6cmである。郭1-1南の西南部の表土から出土した。



第35図 第6次調査出土遺物実測図(2)

45は美濃・瀬戸皿である。底部のみ遺存している。内面には印花文を施している。全面に釉が施されている。底径6.3cm、現存の器高は0.9cmである。郭1-3から出土した。46は美濃・瀬戸皿である。全面に釉が施されている。釉調は淡黄緑色で、素地は灰色である。口径10.2cm、現存の器高は2.5cmである。郭1-4から出土した。47は美濃・瀬戸皿である。底部が欠損している。全面に釉が施されている。釉調は黄緑色で、素地は灰色である。口径10.0cm、現存の器高は2.4cmである。郭1-4の黄褐色土層から出土した。48は美濃・瀬戸の天目茶碗である。底部は欠損している。口縁部は直立して端部が外反するものである。全面に釉が施されている。釉調は茶褐色で、素地は灰色である。口径13.6cm、現存の器高は3.5cmである。郭1-1北西部横の切岸1の黄褐色砂質土層から出土した。49は美濃・瀬戸の天目茶碗である。底部は欠損している。口縁部は直立して端部が外反するものである。全面に釉が施されている。釉調は茶褐色で、素地は灰色である。口径14.0cm、現存の器高は5.6cmである。郭1-4から出土した。48・49は口縁部の形状から16世紀末から17世紀初頭のものである。50は丹波壺である。「く」の字状の口縁部のみ遺存している。

51は瓦質すり鉢である。内外面とも黒色で、断面は灰色である。郭1-4から出土した。52は

瓦質すり鉢である。内外面とも黒色で、断面は灰色である。口縁部内面には1条の沈線が施されている。そのすぐ下に横方向に波状の沈線を施し、縦方向に4条以上の櫛状の沈線を施す。越前すり鉢の影響を受けた在地製品と考えられる。郭1-4から出土した。53は瓦質すり鉢である。底部のみ遺存している。見込みには7条の櫛状の沈線が、体部にも密に櫛状の沈線が施されている。外面は黒色で内面は灰色である。切岸1から出土した。

54は陶器すり鉢の口縁部である。片口のみ遺存している。色調は茶褐色である。内面には4条の櫛状沈線が施されている。55は土師器すり鉢である。体部のみ遺存している。内面には5条の櫛状沈線が施されている。色調は淡褐色である。郭1-1北西部横の切岸1の黄褐色砂質土層から出土した。56は丹波すり鉢である。底部のみ遺存している。色調は茶褐色である。内面にはヘラにより多数の沈線が施されている。郭1-4から出土した。57は信楽あるいは丹波すり鉢である。口縁部のみ遺存している。口径29.6cm、現存の器高は6.2cmである。色調は明褐色である。口縁部は尖り気味である。端部は強くナデており、さらに細くなっている。内面にはヘラにより多数の沈線が施されている。郭1-4から出土した。

58は唐津鉢である。口縁部は丸く肥厚して、やや外開きである。色調は茶褐色である。口径28.4cm、現存の器高は3.0cmである。郭1-1の西部中央から出土した。59は58と同様の口縁部であるが、やや内側に肥厚している。色調は緑灰色である。口径28.2cm、現存の器高は4.5cmである。郭1-1南の西南部から出土した。

60・61は碁石と思われる黒色の石である。やや歪な楕円形で、碁石とは断定できないが、当地では採取できない石であることから判断した。60は長さ2.0cm、幅1.5cm、厚さ0.6cmである。

62・63は銭貨である。表面は錆びついており、不鮮明だが「寛永通寶」である。

4) 小結

以上、紹介した遺物の内容をまとめてみる。ほとんどは16世紀の戦国時代と16世紀末から17世紀初めの織豊期から江戸時代初期のものである。それ以外は、古墳時代後期と江戸時代後期である。古墳時代後期の須恵器は40点出土した。江戸時代後期の陶磁器は8点出土した。その内、「寛永通寶」は2点である。これは、中山八幡神社に伴うものと推定する。文献では18世紀後半以降神社の存在が確認できるが、出土遺物もこれを裏付ける。16世紀末から17世紀初めの織豊期から江戸時代初期の唐津は12点である。ほとんどは唐津焼皿・鉢であるが、陶器甕なども少量ある。

6. 調査成果から見た中山城跡

1) 出土遺物の傾向

切岸1北部から郭1-2北部、切岸2北部に連続するか所で出土したのは、古墳時代後期の須恵器類である。それ以外は土師器皿、瓦質鉢、陶器甕、中国製染付け・白磁皿などである。16世紀のものが主体である。土師器皿は京都系のものである。地元特有のものがないのは、この城の主が京都と密接につながっていたことを示している。一色氏は室町幕府の三管領四職のうち、四職家の1つであった。三管領は斯波、畠山、細川で、四職は赤松、一色、京極、山名である。京



第36図 第6次調査遺物出土地点図

都系の土師器皿が出土するのは、とりもなおさず、室町幕府の重臣であったためと考えられる。土師器皿は武士の対面の場で使用するものであり、京都とつながりがある杯(土師器皿・かわらけ)を使用して、主君と主従、あるいは同盟関係の強化をするための、重要な道具であったのである。

郭1-1南では土師器皿、瓦質鉢、陶器甕、中国製染付け・白磁皿、また龍泉窯青磁碗が出土した。これは、蓮弁文が細弁のタイプで、15世紀末から16世紀前半のものである。この他、唐津香炉が出土し、16世紀末から17世紀初頭のものである。さらに、甲冑の部品であるこはぜの靴が出土した。したがって、この場所は中山城第1期と第2期の2時期のものが出土した。

郭1-3は最近まで中山八幡神社があった場所で、江戸時代後期以降の陶磁器や、「寛永通寶」が出土した(第5次調査第1-1トレンチ)。郭1-4では土師器皿、瓦質鉢、陶器甕、中国製染付け・白磁皿、刀の柄頭が出土した。柄頭は下層から出土した。下層は16世紀中葉から後葉である。この他、上層から唐津鉢が出土した。16世紀末から17世紀初頭のものである。

郭1-4では土師器皿、瓦質鉢、陶器甕、中国製染付け・白磁皿、刀の柄頭が出土した。柄頭は下層から出土した。下層は16世紀中葉から後葉である。この他、上層から唐津鉢が出土した。16世紀末から17世紀初頭のものである。

2)一色氏段階と細川氏段階の丹後

文献史学の成果に依って一色氏段階と細川氏段階の丹後について簡単にまとめた。今谷明氏は『金屋比丘尼城跡』報告の中で、丹後一色氏関係の文献史料を検討した。^(注5) その結果、14世紀から16世紀前葉までの一色氏史料は確認できるものの、16世紀後半の第1次史料はなく、不明とした。今谷氏の検討のポイントを列挙した「第4章 室町・戦国期の丹後守護と土豪」を以下に紹介する。永正6(1519)年2月に将軍が一色義清に年始祝儀返礼の内書を遣わしたのを最後に一色氏の史料・記録は杳として途絶し、大永から永禄までの50年が欠史の時代に入ることを指摘した。そして、『細川家記』によれば、天正7年7月に明智光秀・細川藤孝らが弓木城に一色義有を攻めて講和せしめたことが見えるが、同書は軍記類を編纂して作られた二次史料で、登場人物に明らかな誤謬が多いと断定した。そして、この一色義有なる人物も、永正初年にすでに登場するなど、如何にも作為の跡が見え、当時の確実な史料には出ない、いわば架空の人名と判断した。さらに、細川忠興が宮津城に一色義有を誘殺したとなす、かの著名な伝承は、一次史料による限り全く裏付けることができず、一色氏滅亡周辺の諸事実の検証は今後の課題として後日を期したい、と結んでいる。

前述のとおり、今谷明氏の厳密な史料の検討では、16世紀後半の一色氏については不明とされたが、別の史料を基にこの時期の一色氏を考察した成果がある。それは、京都府立丹後郷土資料館による「明智・細川と両丹地方」(1979年)と「細川幽斎と丹後」(1992年)という展覧会図録で展開されている。以下に紹介する。天正7年10月、明智光秀は、近江安土城におもむき、信長に丹波、丹後の平定を復命した。天正8年、信長は、丹波を光秀に、丹後を藤孝に宛がい、藤孝は8月2日、丹後に入国して、八幡山城にまず入城したといわれている。そしてすぐ、信長の許可を得て宮津城築城に取り掛かった。また、田辺城築城を行ったようであるが、翌年の暮れごろまでには完成し、続いて城下町の建設も行われたようである。信長は藤孝に対して、光秀と相談し、政道を油断なく努めよと指令した(八月十三日付黒印状)。天正9年、信長は光秀と藤孝とに丹後の検地をさせる。3月5日、藤孝は丹後国中をすべて調査し、知行人から指出を呈出させた。9月、一色の知行分と矢野藤一の知行分について光秀と藤孝とに処置を命じた。二万石知行の一色は、藤孝の女婿一色義有、四千五百石知行の矢野藤一は、義有の家老矢野藤一郎である(「細川家記」)。

天正10(1582)年6月2日、信長が本能寺で明智光秀に討たれるの報に接した藤孝と忠興父子は剃髪し信長に対する弔意を表し、光秀より与力の請を受けるが同心せず、藤孝は幽斎玄旨と号して隠居し家督を忠興に譲って田辺城に移った。この時、忠興が妻玉(光秀女)を味土野山中(京丹後市弥栄町)に蟄居させた。7月20日、幽斎は、本能寺で故信長追善連歌会を催した。この間、忠興と丹後弓木の一色義有との争いがあり、9月8日、忠興は義有を宮津城に誘殺し、弓木城を落城させた。これには、諸説がある。さて、本能寺の事変後、秀吉政権下で、忠興は小牧長久手の戦いや九州平定、関東平定に出陣活躍し、幽斎が実質的に領国経営にあたっていたようである。

展示図録の解説なので、断定的に書かれているが、諸説はあるものの弓木の一色義有の存在を肯定している。さて、ここで、年表を元に再整理してみよう。ここで使用する記事は安永年間(1772～8)に細川幽斎・忠興・忠利・光尚四代の事績を集成した、ふじろうかげきよ めんこうしゅうろく小野武次郎景湛の綿考輯録。一名細川家記であるが、これは後人の編纂した藩史としての限界は否めず、また、史料批判の十分でない文献が混じり、慎重に利用する必要がある(小川剛生「細川幽斎——人と時代」『細川幽斎——戦塵の中の学芸』2010)。そこで、文学研究者により詳細な年譜が編まれた。これは、公家日記や古文書などの一次史料に基づくものであり、その検討された年表(稲葉継陽・徳岡涼編「細川幽斎年譜」『細川幽斎——戦塵の中の学芸』と、丹後郷土資料館が作成した年表によって記述したい。

天正6(1578)年3月頃から信長の命で明智光秀とともに丹波・丹後攻略に入る(細川家記・細川家文書)。光秀とは天正2年に信長から長男忠興と光秀女(玉、後のガラシャ)との縁組を命じられており(細川家記)、子を通して深い関係であった。天正7(1579)年10月24日、光秀、丹波・丹後を平定したことを、安土に赴き信長に報告する(信長公記)。すなわち、第一次史料では、建部山城攻防戦や中山城で一色義道が主従と切腹することは確認できない。

ただし、一色氏との関係をたどることができる。天正9年5月に息女伊也を一色五郎(義有とも)

に嫁がしている(細川家記)。9月、一色の知行分と矢野藤一の知行分について光秀と藤孝とに処置を命じた。天正10年6月2日本能寺の変が勃発したが、豊臣秀吉との山崎の合戦によって光秀は敗死する。7月11日、秀吉は誓書を与えて忠興に丹後国一円に支配を安堵した(細川家記)。9月8日、幽斎父子は一色五郎主従を宮津城下に招き、そこで刺殺している(細川家記)。

このように、細川氏が丹後入国まで勢力を有していた一色氏は、天正9年10月までには勢力を減じられていたが、それでも、一色氏の力は無視できるほどではなく、一色五郎と姻戚関係をもつ。しかし、信長から秀吉へ政権が交代する混乱期に乗じて、反勢力を一掃したのである。地元勢力を一掃するのは戦国武将の常道であったのである。

3)舞鶴市内の城館との比較

舞鶴市内の中世の城館でもっとも注目される調査は、舞鶴市大俣の大俣城跡^(注6)である。1995年に発掘調査がされた。由良川左岸にあり、中山城からは上流16kmの地点に位置する。標高85m、比高差65mを測る、由良川に張り出したような独立丘陵上に30m範囲に主郭を構築していた。発掘調査の結果、16世紀前半に築造され、後半に廃絶したと考えられている。中国製白磁皿135点をはじめ、瓦器鉢、土師器皿など多種の遺物があり、晴れの儀式や生活に密着したものなどが出土している。城主については、近世の地誌類では浮島左近が比定されている。左近が活躍したのは明応年間(1492～1501)といわれ、「郷土史岡田上」では、1506年に逸見駿河守らの若狭勢が加佐郡に侵入した際、ここで防ぐため一色氏方の浮島氏が築造したのではないかと推定されている。これより更に上流に福知山市大江町南有路の引地城跡がある。由良川右岸にあり、川が屈曲した地点にほど近い標高20m、比高差10mの丘陵上にある。1995年の発掘調査の結果、中国製青磁稜花皿や土師器皿、鉄刀などが出土し、15世紀後半から16世紀にかけて使用されたい。城の外周は横堀と帯状曲輪で囲まれており、『舞鶴の山城』では、鉄砲の普及や兵士の職業化に伴い、永禄年間(1558～1570)に流行したもので、加佐郡では引地城跡だけであると紹介している。綾部市梅迫町の「渡辺家文書」には、丹波国何鹿郡物部城主上原氏が、隣村の丹後国有路郷を將軍足利義昭から安堵されたことを、織田信長が追認したもので、永禄11(1568)年頃とされている。引地城跡の使用された時期に合い、関連が注目される。

4)戦国時代の文芸

さて、戦国時代の武将たちの中には、戦いの合間に文芸に楽しみを求めていた者もいた。京都や奈良などにその道の達人がいて、場合によっては彼等を招くこともあった。

永禄11年に織田信長が京都に入り、政権を担うこととなった。その時期に連歌師として有名であった里村紹巴は永禄10年に富士山に行き、歌日記を残している。そして、丹後の天橋立行きも念願しており、永禄12(1569)年5月に京都を出発し、若狭と丹後とを旅行している。その歌日記が『天橋立紀行』である。これは単なる歌日記ではなく当時の緊迫した情勢と、各地の城を訪れていることから、城館の存在を知ることができる一級資料である。また、後年になるが細川幽斎や明智光秀との歌会も頻繁に行っており、とくに明智光秀が本能寺の変を起こす数日前におこなった歌会では光秀の歌に謀叛を起こす予兆が見えたので、これを諷める歌を残しており、単なる



第38図 1569年当時の丹後の城跡

- 15日 小浜より舟で和田へ向かう。
- 19日 松尾を経て志楽より舟で蛇島^{じゃしま}に上陸する。
- 23日 千歳浦よりくんだ(宮津市栗田)を経て文殊堂に入る。
- 24日 天橋立、府中等を見物し、忌木(岩滝町弓木)より、嶺山(現峰山)に到り連歌をおこなう。
- 26日頃 伊勢物語を講釈する。
- 28日 嶺山にて連歌をおこなう。
- 29日 三方三浦介が興行連歌をおこなう。
- 晦日 小西山東坊にて連歌をおこなう。
- 7月1日 堀江作州宅にて宴を催す。
- 2日 大悲寺正寿院で興行連歌を催す。
- 4日 帰洛を志成相寺に宿す。
- 7日 文殊堂前より舟にて蛇島へ。
- 8日 安久の城より岸谷峠を経て上林加州館に入り宿す。
- 11日 帰洛する。

以上のように各所で連歌を催しているが、当時の丹後地域は一色氏の勢力範囲であったので、一色氏の武将たちが文芸に興味があったことが知られる。しかし、これは、単に文芸にとどまっ

てはおらず、一色氏が各武将との連携を強めるためにおこなったと考えられる。おそらく、対面の場も設定されたと考えられ、京都系の土師器皿はその際に使用されたのであろう。この紀行の中で緊迫した情勢を窺える記事がある。実は永禄9(1565)年、毛利元就が尼子晴久を攻め、富田城を落城させたのであるが、東福寺の僧であった尼子勝久は還俗し、富田城奪還のため、永禄11年6月に島根半島^{ちくみ}千酌に上陸したのである。尼子勝久は丹後の水軍に協力を求めており、舞鶴市の東部にある蛇島渡航の際には、そこが敵味方の境である危険な場所なので、危惧したことが述べられている。詳細を述べると、「松尾山を拝みて、志楽の地中というところから、出航しようとしたが、前日和田よりの案内が不届きで、迎えの舟が来ない。敵味方の境目なのに、迎えが来ないと待ちわびていたところ、あやしい釣り船を得て、同行していた心前などを残して、渡航し蛇島に上陸した」のである。

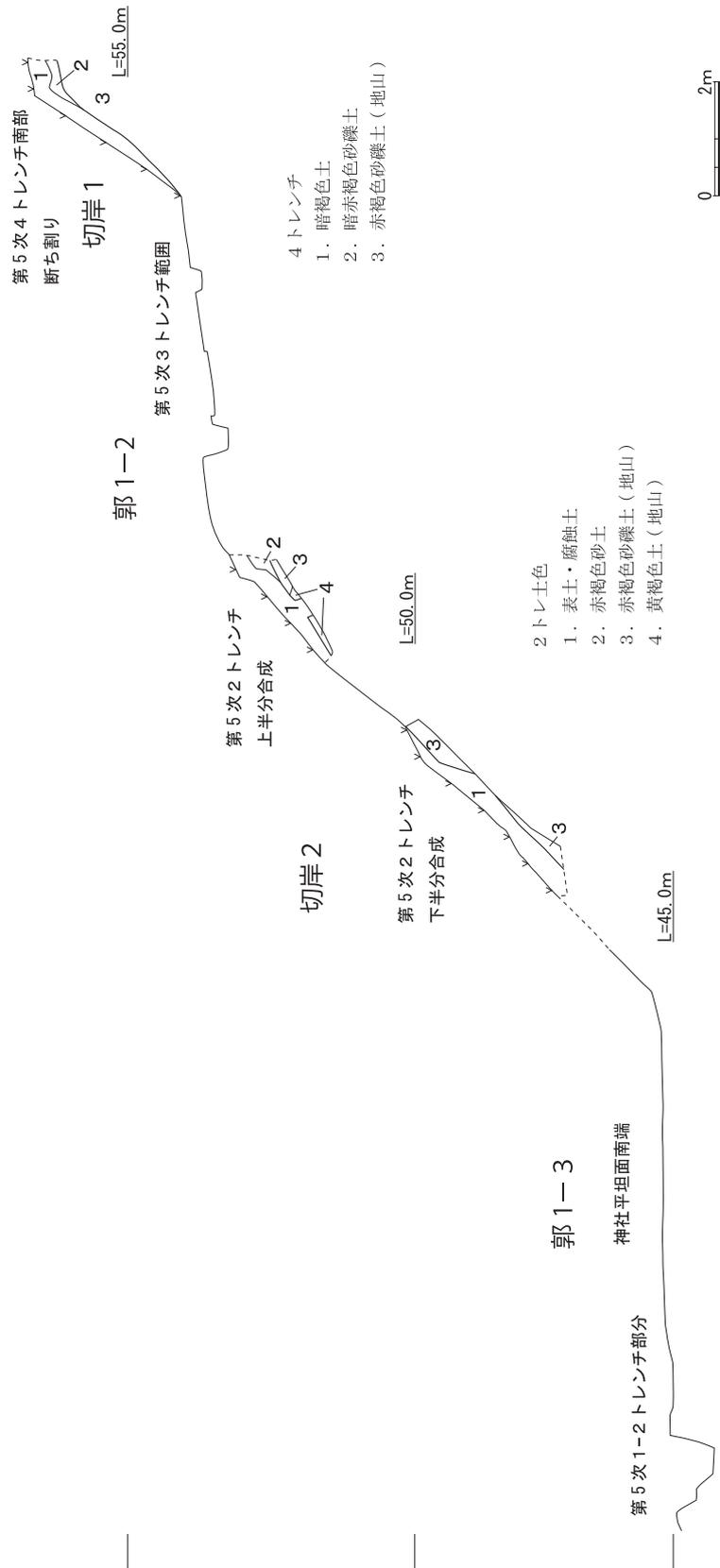
これは予定外のことなのかもしれないが、一色氏と対立する若狭の勢力にも会っていることから、この情報は京都へ戻った際、政権の中枢に報告されたのかもしれない。1例をあげると(天正元(1573)年6月5日に勝竜寺城(現京都府長岡京市)において藤孝、紹巴が連歌興行を催しており、このような会を通して情報が伝えられたのかもしれない。

なお、里村紹巴は細川藤孝(幽斎)と天橋立で連歌会を催している。天正9(1581)年4月12日に光秀、紹巴、宗及らと丹後で遊び天橋立において連歌興行を行っているのである(宗及茶湯日記)。また、忠興が居城した宮津と、幽斎が居城した田辺において盛んに能の会を催している。その具体的な内容は天正11(1583)年から慶長4(1599)年までに計50回、433番に及ぶ能番組を集成した『丹後細川能番組』(永青文庫蔵)によって知られる(大谷節子「細川幽斎と能」『細川幽斎一戦塵の中の学芸』)。

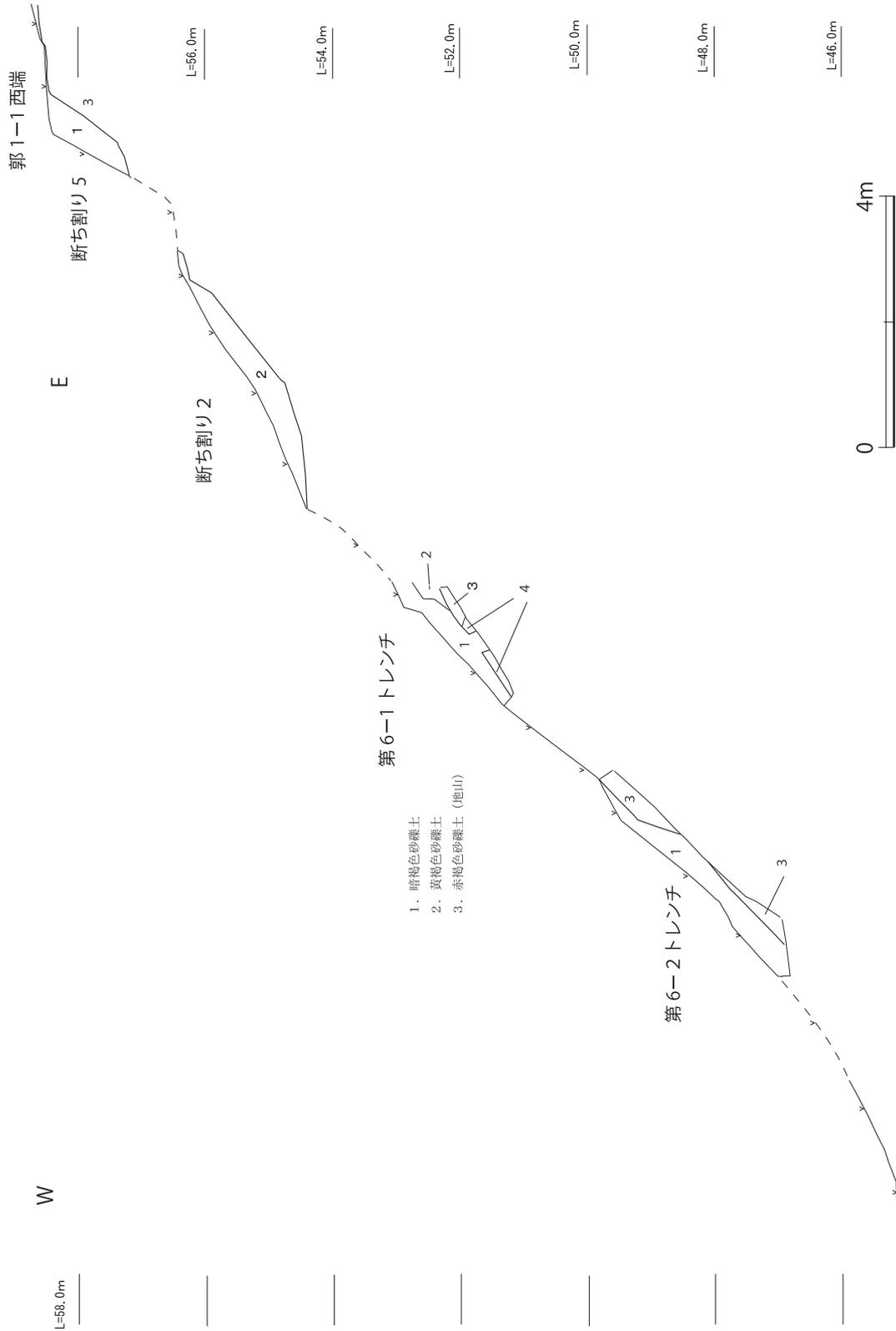
5)中山城の構造

中山城は連郭式の山城である。村田修三氏の評価によれば一時期に造られたものではなく、順次築造されたものとされている。堀と郭とで守る構造に統一性がないことに注目しているのだろう。また、由良川河口に近いところに設置された城であるので、日本海方面から内陸部に攻め込まれないような判断があったのではないとも言われた。さらに、千田嘉博氏は点々と築造された郭と郭との間に、必要以上の堀切を設けており、この城の守備は一人ではなく、あるいは当番制のように幾人かの武将によって守られていたのではないか、と言われた。

さて、中山城跡の断面図を作成した。これによれば、東西方向は東側は急斜面で平坦面を造っていないのに対して、西側は郭1-1地点から3か所に段々の平坦面を造成しており、居住を視野に置いた構造と考えられる。しかし、発掘調査の成果によれば、頂上ではなく一段低い郭1-3が風を防げる恰好の場所にもかかわらず、建物が1棟のみであり、生活空間とは想定できない。台所施設が見られないからである。南北の断面に注目してみよう。郭1-1を中心として南北に土塁を築いている。北側は切岸1から堀切を経て、小さな土塁がある。これは、ピンポールで地面を挿したところ、硬い地面であったので、地山を掘り残して築いたものである。それに対して南側は急斜面の切岸1の下に2重の土塁と堀切を設けている。そして、1か所の郭(平坦面)を設



第39図 郭1-1南東西断面図(南部)



第40図 郭1-1～郭1-3断面図(北部)



第41図 第4~6次調査地南北断面図

けて、そこに、墓SX07を設置している。さらに南には小さな切岸を設け、それより南側は狭い平坦地が続き、そこは江戸時代の墓地となっていた。

6) 丹後の水軍

丹後は日本海に面しており、地理的理由から水軍がいたことがわかっている。ここでは、いくつかの文献史料から、丹後の水軍の実態を明らかにしたい。

水軍に関する史料で古い部類に入るものは、大永7(1527)年に「丹後の海賊が、西小浜(福井県小浜市)に侵入した」という記事である。「羽賀寺年中行事」(中島利雄「第3章 室町時代の郷土」『舞鶴市史』)の文を意識すれば、「この年(大永7年)、丹後の海賊等が蜂起して若州(若狭)の浦々に押し寄せ、資財を奪ったり、放火したりしたのである。そこで、当国(若狭)の諸勢力が加佐郡に出陣したのであるが、この時、越前よりの援軍が、三方郡(若狭)にあつて乱暴を働いたという」のである。また、「天文九(1540)年、七月十四日、越前の船およそ五百艘が丹後(国)加佐郡へ来襲し、十七日に漕いで帰着したのである。これは、丹州(丹後)の海賊がたびたび越前へ来て、浦々を残(攻カ)したので、報復として丹州の浦を攻撃すべく来たというのである。しかし、武威なく帰還したので、世上を欺く行為であった」という。

このように、たびたび丹後の海賊(水軍)は、若狭や越前を来襲していたことが知られる。この2つの記事の間に水間と由良の合戦がある。水間は中山の隣村である。「白井家文書」によれば、永正17(1520)年、白井石見守(清胤)が紹壯(武田元信)に水間村を治めることを命じられている。その18年後、天文7(1538)年には「去月(7月カ)十五日、丹州由良浜において合戦(があり)、被官人等忠節神妙」であったので、白井民部丞が(武田)宗勝から感謝されている。また、「去月(7月カ)十五日、丹州加佐郡水間村合戦(にて)、被官人(は)突鎗(槍の1種)、兵具をいろいろと分捕」ったことを、白井民部丞が武田宗勝から褒められている。ここに記された宗勝とは武田元光のことである。実はこの水間の合戦は単に武田氏と一色氏との戦いであったとは言い切れないのである。武田氏の重臣である栗屋元隆が元光の家督相続に反対して乱を起こしたのである。栗屋元隆は加佐郡田辺に陣を張っていたが、「親俊日記」によれば、名田庄に入り、7月28日条には「名田庄没落」とあり、丹波へ走ったという。すなわち、水間の合戦とは、武田宗勝方と反対勢力との戦いであり、その反対勢力に一色氏が加担していたのかもしれない。

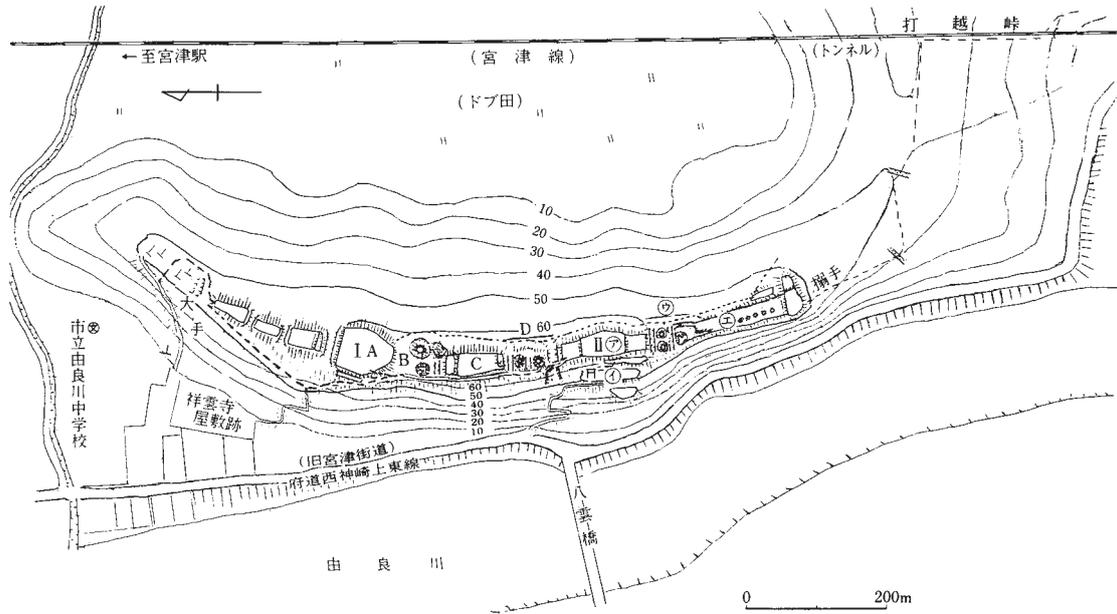
さて、水軍の記事は尼子氏による富田城奪還時に認められる。「立原・福屋両家伝」(「阿波国古文書」)によれば「永祿12(1569)年の春、立原雲州が牢人へ内通し、(尼子)勝久を丹後へ招聘し、丹後・但馬の浦人所々の牢人相催し、雲州へ渡海す」とあり、丹後・但馬の水軍が出雲へ出撃したことが知られる。「日御碕神社文書」によれば、この時の軍勢は「両但国賊船数百艘」とある。両但とは但馬、丹後の意味であろう。これ以降尼子方はたびたび出雲・伯耆の海岸を攻撃しており、毛利方は弱って將軍足利義昭から海賊停止令を出してもらおうよう織田信長にとりなしを頼んでいる(元龜2(1571)年4月11日条「小早川家文書」)。

なお、「史料綜覧」の天正3(1575)年9月28日条に「吉川元春ノ兵、尼子勝久の属城丹後由良ヲ攻メ、是日、之ヲ陥ル」と出ているが、中島利雄氏は伯耆由良の誤りではないかとの見解を述

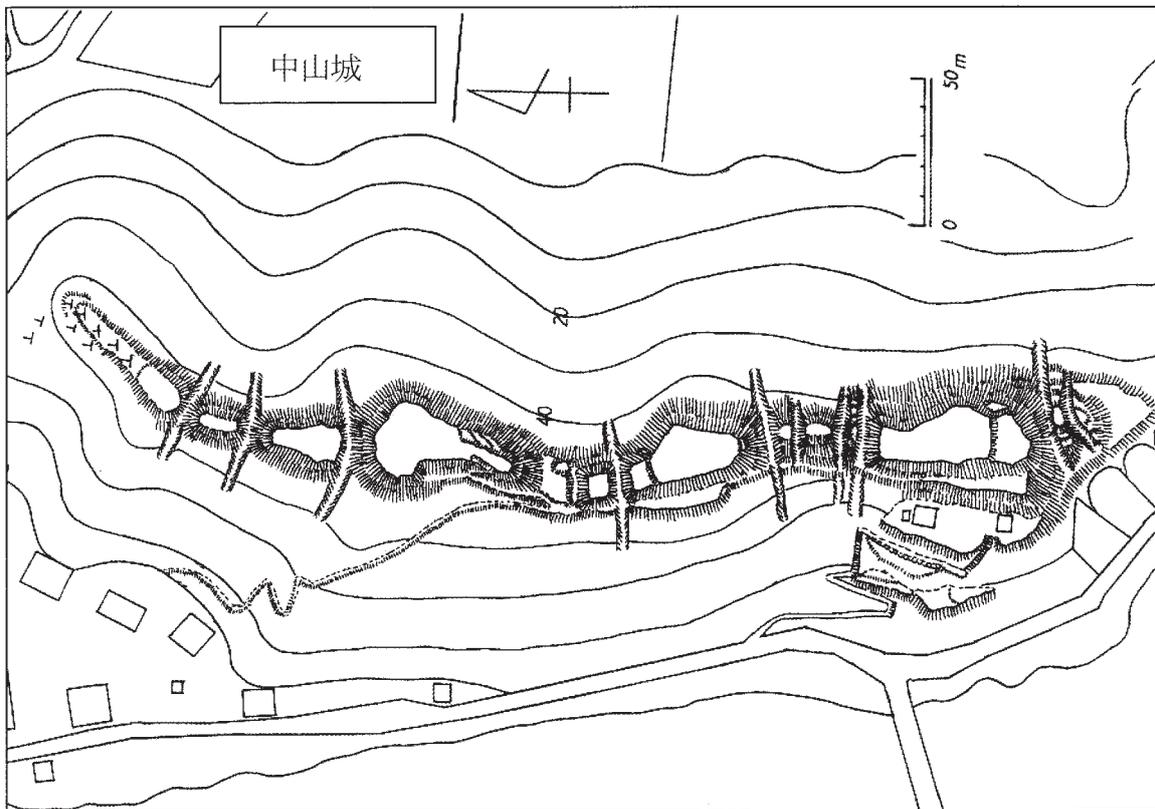
べている。今後、検討すべき記事である。

7) 中山城跡の研究小史

中山城跡の研究の嚆矢は、昭和55年に刊行された『日本城郭体系』である。岡野允氏の文責で書かれた内容は、当時の城郭研究の考えを示している。この本に紹介された丹後地域の城郭は14か所に過ぎず、その1つに中山城跡が選ばれていることは、いかにこの城が重要であったかがわ



第42図 中山城跡縄張り図(1) (岡野允作図『図説 中世城郭事典』より引用)



第43図 中山城跡縄張り図(2) (『舞鶴の山城』より引用)

かる。近年発刊された『舞鶴の山城』では300か所が報告されている。

1. 規模は、300×30mとしている。
2. 位置の特徴は、建部山城の北西約1kmのところにある、由良川に沿って細長く南北に横たわる丘陵に中山城はあった、としている。
3. 城主については、沼田幸兵衛とする説が知られているが、これは『一色軍記』の影響とみられ、幸兵衛の謀叛について他に傍証がなく、『一色軍記』そのものが潤色や虚構が多いのと同様に、信憑性に欠けると思われる。その点について、独自の史料や地元の口碑にもとづく文書(『嶽文書』『竹原文書』『加佐郡寺社町在旧記』『河内守様高付覚書』など)は、いずれも一色左京大夫を城主とする説を採っている。また、地勢上からみても、建部山城と中山城は本支城の関係か居城と諸城の関係にあったとみるのが自然で、当城には建部山城一色氏の陣代が在城したものと思われる。
4. 石高については、『嶽文書』には「一色左京大夫義直、所領三千五百石」と注記されているが、これは、加佐郡の直轄領を近世初頭の村高で表示したものであるとしている。
5. 一色義道について、天正3(1575)年、織田信長の越前攻めには、一色義道も矢野・大嶋・桜井氏などの加佐衆を率いて多数の水軍で参戦しており、義道は喜多の入り江や神崎湊に舟師を擁していたものと推考される。
6. 細川氏段階の城主について、細川幽齋(藤孝)の義兄で若狭出身の沼田勘解由左衛門清延が当城主であったが、小兵衛の代に主君忠興と共に出陣中に有名な田辺籠城があり、留守居の者たちは城を焼き払って幽齋が立て籠もる田辺城に入ったといわれる。その後、ほどなく慶長5(1600)年に関ヶ原の合戦があり、その功で細川氏は九州小倉三十九万石の領主となって転封され、沼田氏も行をともにしたので、当城は廃城になった、としている。
7. 城の構造について、当城は典型的な連郭式で、東側の下方はドブ田で、西側の崖下には由良川が流れて惣堀の役割を果たしていた。大手は北側の現在の市立由良川中学校の東隣にあり、搦め手は南側の打越の方で、いずれも城山の麓を走る由良経由の宮津街道に通じていた。

つぎに村田修三編の『図説 中世城郭事典』(昭和62年刊行)では、

1. 城主は地元文書である『嶽文書』ほかを引いて、一色左京大夫とし、一色氏の居城である建部山が南東1kmにあることから、直轄城と考えている。『一色軍記』を引き、天正7(1570)年、細川藤孝に攻められ、建部落ちした一色義道は、いったんは中山城に逃れたものの、城主沼田幸兵衛の謀叛にあい、城外で自刃したというのが、『細川家記』など異説がある。その後、細川忠興国主のとき、家臣沼田清延を城主に据えたが、慶長5(1600)年秋、九州に移封となり、廃城となった、と説明している。
2. 城の構造については、縄張りは南北2つのグループに分かれるとした。北側の仮称Ⅰ-Aは主郭にあたる。今回の調査地は仮称Ⅱグループの地点に当たるので、この部分の記述を紹介する。ⅡグループA地点(今回調査の郭1-1に相当)は、両側の袖小郭と西側下、Ⅱグル

ーパイ地点(郭1-3に相当)城山八幡神社の腰曲輪に擁立された格好で、南方の主座にあたる。八幡参道は脇^{からめて}搦手となり、旧宮津街道を扼し、また、城の用水にも便利したかと推定している。Ⅱグループウ地点(第4次調査地)はⅡグループア地点より7m崖下であり、3箇の円墳形隆起が鼎立し、前後に空堀を施して搦手の虎口を形成している。これに続くⅡグループエ地点(第1・2・4次調査地)曲輪の先端部は1m余り盛り上がり、幅広い土塁形となっている。それよりさきは急坂な搦手道で東方に屈曲する大きな鞍部を経て、打越峠から建部山城の搦手につながっていると評価している。

城の構造については、縄張りは南北2つのグループに分かれるとした。北側の仮称Ⅰ-Aは主郭にあたり、南北両側よりは約7mは高い。北方大手面は三条に亘って、堀切られて長方形郭が連立するが、眼下の大手坂に対し横矢の櫓門城戸も想定される。Bは三方土壁形の場所柄武者溜りとも見なされる。C南側の掻き上げ土塁とそれに隣接するところのDには、高さ4mで、天場3.4mの円墳形突起が2個縦列して変形土塁をなしている。前後を三条の堀切が走る。ここは、丘陵の腰部にあたる地峡でくびれ、東側も豎堀様で、一応南北の切所となる。万一両者どちらが危急に瀕しても応急な措置が取れる構えと見られる。Ⅱグループのア(今回の呼称では郭1-1)両側(南北の意味か)の袖小郭と西側下のイ(同郭1-3)城山八幡神社の腰曲輪に擁立された格好で、南方の主座にあたる。八幡参道は脇搦手となり、旧宮津街道を扼し、また城の用水にも便利したかと考えられる。

つぎにアより約7m崖下のウ(第4次調査地)は、三個の円墳形隆起が鼎立し、前後に空堀を施して搦手の虎口を形成している。これに続くエ(第1・2次調査地)曲輪の先端部は約1m余り盛り上がり幅広い土塁形となっている。それよりさきは急坂な搦手道で東方に屈曲する大きな鞍部を経て打越峠から建部城の搦手に繋がった。

この文によって、調査前の中山城の状況がわかる。

さらに『八雲のれきし』では、中山城は標高60mの山頂を中心に、約600mにわたる尾根筋に10か所あまりの郭が、ほぼ一直線状に並ぶ連郭式の山城である。中心をなす一の丸、二の丸、三の丸をはじめ、諸郭の東側は急坂の上、周囲は腰を没する深い田で守られていた。

反対側の西側は、山頂から由良川までの急勾配の自然の要害で、北側の尾根はゆるやかであるが、深い空堀が2か所あり、敵の攻撃に備えている。また、水間川を北側の山すそに引き巡らして堀としていた。

城主については、①一色左京太夫説と②沼田幸兵衛説③貫幸兵衛説とがあり、根拠となる文書として、①は『嶽文書』『竹原文書』『丹後旧語集』『加佐郡寺社町在旧記』などを引いている。②は『一色軍記』『丹後旧事記』『田辺旧記』『丹哥府誌』などを引いている。③は『細川家記』を引いている。結論としては、地元文書をひいた①一色左京太夫説を採っている。

最後に『舞鶴の山城』では、特に立地に注目して紹介している。城館は打越峠から北に延びる尾根上にあるが、この打越峠の下を北近畿タンゴ鉄道宮津線が通っており、またかつての宮津街道も中山を通っており、今も昔も西舞鶴一由良・神崎間の交通の要所となっている。周囲は西に

は由良川が流れ、北・東は湿地帯であったと考えられる。由良川の河川交通を管理する城館として注目される。

中山城は、南北に延びた尾根を十本の堀切で遮断し、14か所以上もの曲輪数を有する大規模な遺構である。しかし、曲輪の構成に連続性がなく、縄張りにまとまりがないのが特徴であるとしている。(今回の調査地である)南の曲輪からは由良川の西斜面にそって四段の曲輪があることから、城主の河川交通への関与を示唆し、また、中央部の曲輪は北麓の集落へ道がつながっていることから、集落との関係も考えられると指摘した。

城主についてさまざまな説を紹介した。まず、『一色軍記』や一部の近世地誌類にある沼田幸兵衛である。しかし、この説には傍証がなく、『一色軍記』も信頼性に欠けるとした。また、細川家の記録である『綿考輯録』は、中山城主を一色氏方の貫幸兵衛とし、「山中(中山)」で激戦があり一色義道が戦死したことは記しているが、裏切り云々には触れていない。一方、『嶽文書』や他の地誌類は城主を一色左京太夫としている、と淡々と記載している。これとは別に16世紀前半の状況については『白井家文書』には水間村で戦いがあったことを記載している。中山村と称したのは天正年間以後であるので、水間の戦いでも中山城が使われたことは想像に難くない。『綿考輯録』によると、細川藤孝は一色氏滅亡後の中山城に家臣の沼田延元を配置していたが、田辺籠城後に際して自焼させたという。平成20年の京都府による発掘でも、焼土が確認されたことを指摘している。

7. まとめ

発掘調査の結果、第1期は16世紀第2四半期に相当することが判明した。郭1-1に2棟(建物1・4)の建物を建てていたが、北部には古墳の高まりがあったと考えられる。郭1-1南には柵を築いていた。この平坦面の南西部は自然地形のままで、張り出しはなかった。郭1-3も同じで、自然地形のままであった。郭1-4は、掘立柱建物6があった。おそらく、見張り台として機能していたと考えられる。

第2期は16世紀第4四半期に城が一度造り替えられ、郭を広げている。郭1-1にあらたに2棟(建物2・3)の建物を建てていたが、北部にあった古墳の高まりは削られ、平坦にされた。この西側にある郭1-2部分は第1期には切岸1の人工的な斜面であったが、盛り土され平坦面が造成された。ここに、郭1-1から張り出させた棧敷あるいは舞台状の施設が建設された。

郭1-4には建物はなく、ただ平坦面のみであった。

中山城に関する同時代の文献はない。周辺に関する史料は、永正17(1520)年に白井清胤が若狭の武田元信から、水間村の支配を命じられているが、水間村は中山村の隣村である。天文7(1538)年に水間で戦いがあり、白井清胤が武田元信から、軍功を誉められている。このように16世紀前半には若狭武田氏の支配下であった可能性があるが、出土した土師器皿は16世紀前半でも終わりの時期であり、また、もっとも地域色が出る土師器皿は京都系であり、若狭の影響は認められない。ただし、今回の調査地での結果であり、水間村に近い主郭部分がまず造られた可能性は高い。

江戸時代に書かれた『一色軍記』をはじめ、いくつかの文書を総合的に検討すると、一色氏が城主であった1579年、織田信長の指示で丹後に攻め入った細川藤孝・忠興、および明智光秀の連合軍によって、まず、建部山城が破られ、一色義道は中山城に逃げ込んだものの、中山城は落城したようである。その後は、細川氏の部下であった沼田勘解由左衛門清延が城主であったようである。『八雲のれきし』に記載された沼田氏の系図によれば、沼田氏は若狭の出身で、小浜から来たようである。清延の妹である麿香が藤孝の妻であったとある。別の文献によれば永禄6(1563)年嫡男忠興が京都一条戻り橋の館で誕生したが、母は沼田光兼女麿香(『細川家記』)とあるので、細川段階には、腹心の部下を中山城に配置したことがわかる。1600年の関ヶ原の戦い直前に、田辺城籠城が始まるが、中山城にいた者たちが、城を焼いて田辺城に合流したという。郭1-3の建物5の掘形には焼け土が入っていたが、この焼け土が1579年の戦いの時か、1600年の自焼の時なのかは出土遺物がなく判断がつかない。1602年に主君の細川氏が九州の小倉に移ったときに、沼田小兵衛は一緒に行ったようで、城の出土遺物が1600年初頭の唐津焼を最後に出土しないことと合致する。

沼田氏が入城した直後である天正9(1581)年には、信長の命により鳥取を攻めていた豊臣秀吉に援軍を出した。日本海に近いという戦略上の重要拠点であるこの地周辺には、神崎はじめに水軍が控えていた。細川氏の腹心の部下である沼田氏が入り、その時、城は改造された。由良川方面に突き出した舞台、あるいは棧敷のような施設の存在は、この周辺で天目茶碗や土師器皿が出土したことと考え合わせれば、宴が催された可能性がある。細川氏は能や、連歌会をしばしば催しており、あるいは、風光明媚なこの地で宴が催されたのかもしれない。山椒大夫伝説の舞台であったことや、建部山攻防戦の舞台であった山を見上げるこの地は、連歌の恰好の題材を提供したのかもしれない。

注1 辻本和美・竹原一彦「中山城跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第6冊 財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1983

竹原一彦「中山城跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第10冊 財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1984

竹井治雄「中山城跡第3次・中山近世墓発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第122冊 財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2007

戸原和人「中山城跡第4次・中山近世墓発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第128冊 財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2008

注2 『日本城郭体系』11 京都・滋賀・福井 新人物往来社 1980

注3 『八雲のれきし』八雲公民館 1996

注4 『舞鶴の山城』舞鶴山城研究会 2009

注5 今谷明「室町・戦国期の丹後守護と土豪」(『金屋比丘尼城遺跡発掘調査報告書』加悦町教育委員会)

1980

注6 大岩洋一ほか「大俣城跡」(『京都府遺跡調査概報』第75冊 財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1997

注7 井上金次郎「第4章 中世の郷土文化」(『舞鶴市史』通史編(上) 舞鶴市役所) 1993

参考文献

「明智・細川と両丹地方」京都府立丹後郷土資料館 常設展資料5 1979年

「細川幽斎と丹後」京都府立丹後郷土資料館 特別陳列図録 1992年

『細川幽斎一戦塵の中の学芸』笠間書院 2010

村田修三編『図説 中世城郭事典』新人物往来社 1987

『舞鶴市史』『宮津市史』全般的なことを参照した。

付表 中山城跡関係年表

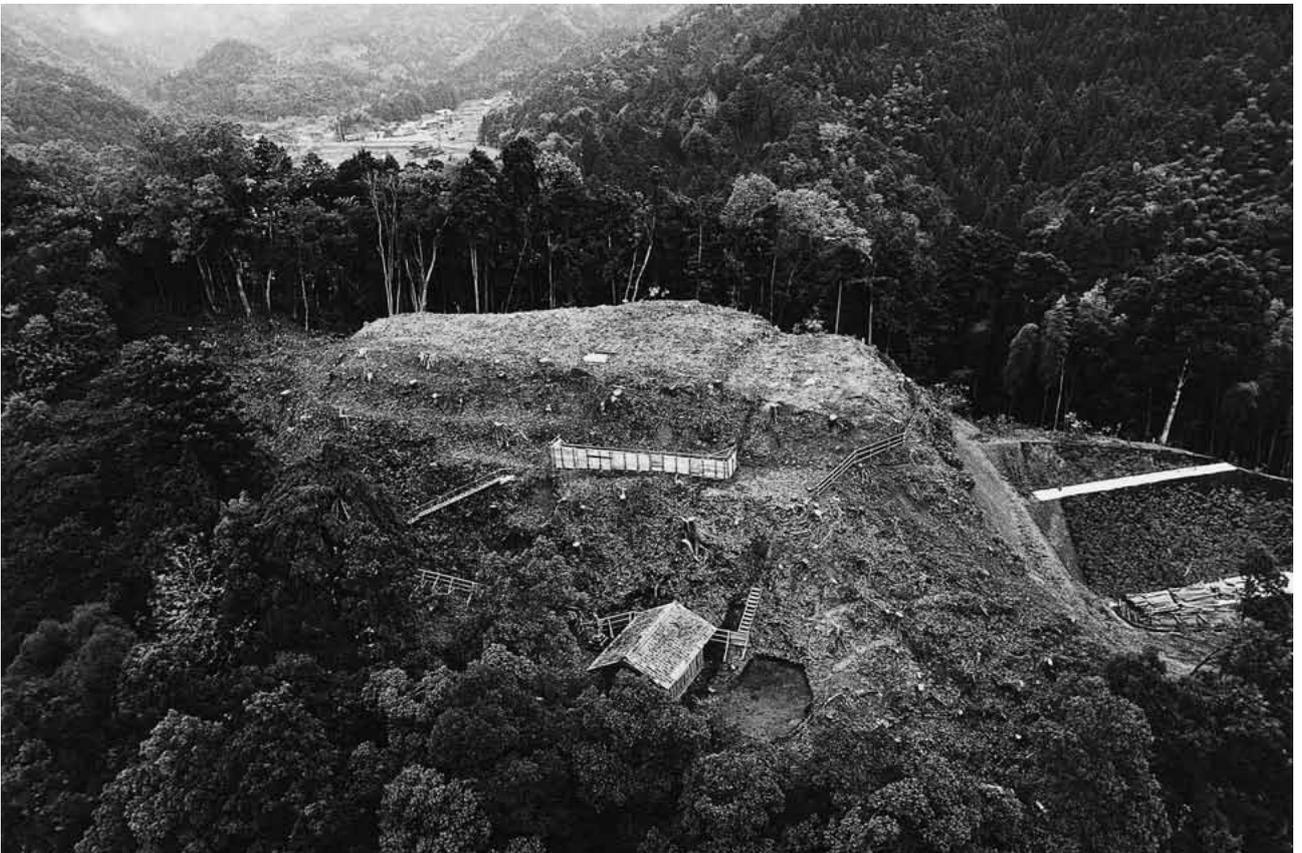
西暦	和暦	月日	出来事	出典
1520	永正 17		白井清胤が主君の武田元信から水間村の支配を命じられている	白井家文書
1527	大永 7		丹後の海賊、西津小浜(福井県小浜市)に侵入。	羽賀寺年中行事
1538	天文 7		水間の戦い、白井清胤が武田宗勝から軍功を賞される。	白井家文書
1540	天文 9	7.14	京都府地誌によれば中山村と称したのは天正年間以後越前船およそ500艘加佐郡へ来る。これは、たびたび、丹後の海賊が越前へ来て荒らすための報復。	羽賀寺年中行事
1569	永禄 12	春	立原雲州が尼子勝久を丹後に招聘した。	立原・福屋両家伝
		6月	里村紹巴、若狭から丹後に入り蛇島(じゃしま)に渡る。2日間滞在。大志万但馬守らと連歌会を催す。その後、天橋立に向かう。再び、蛇島に戻り、一色式部少輔に会った後、帰洛。	天橋立紀行
		6.23	尼子氏出雲に入国。	立原・福屋両家伝
1575	天正 3	5.20	信長の武将羽柴秀吉、越前立石浦の篠河兵庫に舟役を徴するに依り□(丹後)及び若狭の舟手に命じ、同浦に舟を繋留することを禁止。	立石浦共有文書
		6.17	信長、明智光秀を遣して、□(丹波)、□(丹後)を平定しようとし、川勝継氏、小島左馬助に対して、忠節を誓わせる。	記録御用所本古文書
		9.28	吉川元春の兵、尼子勝久の属城□(丹後由良)を攻め、是日、之を陥落させる。	細川家文書・吉川家文書
		10月	信長、但馬山名氏の要請により、惟任光秀を派遣して、荻野直正を同国竹田に攻め込ませる。	細川家文書、兼見卿記
1579	天正 7	5.5	信長、羽柴秀吉の要請により、諸将を、□(丹波)に派遣し、惟任光秀を援けて、□(同国水上市)波多野宗長、宗貞父子を攻撃させる。	小島文書、丹波志、久下文書ほか
		7月	惟任光秀、長岡藤孝と共に波多野氏の余党を□(丹波峰山城)に攻めて、これを陥落させる。又、一色義有を□(丹後弓木城)に攻め、これと講和する。	細川家記、松井文書、有吉家代々覚書
		10.4	惟任光秀、信長を安土城に謁し、□(丹波)、□(丹後)の平定を復命する。	原本信長記

西暦	和暦	月日	出来事	出典
1580	天正8	4.24	信長、羽柴秀吉の小早川隆景を備中高山に包囲しようとするのを聞き、長岡藤孝、一色満信に応援を内命する。	細川家文書・吉川家文書
1581	天正9	3.28	羽柴秀吉、近江長浜商人の商売船に折紙を与え、若狭、□（丹後）の海賊の違乱に備えさせる。	南部文書
		4.12	長岡藤孝父子、惟任光秀、紹巴等を□（丹後宮津）に饗応する。	津田宗及茶湯日記
		9.4	信長、□（丹後）一色満信、矢野藤一郎の知行分を割いて、長岡藤孝、惟任光秀に分け与える。	細川家文書、兼見卿記
1582	天正10	6.2	本能寺の変。	
		6.9	惟任光秀は長岡藤孝、同忠興父子を誘うが、藤孝等は応じず、羽柴秀吉に応じる。	細川家文書、細川家記、細川忠興軍功記、太閤記
		7.2	□（丹後田辺）の長岡藤孝、本能寺に故信長追善連歌会を催す。	秀吉事記、太閤記、細川家記ほか
		7.11	秀吉が忠興に丹後一円支配を安堵する。	細川家文書
		9.8	長岡忠興、□（丹後弓木）の一色義有を、同国□（宮津城）に誘殺す、尋で、□（弓木城）を取る。	細川家記、細川忠興軍功記、松井家譜、細川忠興記
1584	天正12	8.25	丹後田辺において連歌。	連歌総目録
1592	文禄元	4月	一之斎（沼田弥七郎統兼）より、父宗禅（上野介光兼、幽斎の岳父）三十三回忌の懐旧連歌の発句を乞われる。	詠草「永青文庫」
1597	慶長2	1.23	田辺城で能楽。細川幽斎は女郎花の太鼓をたたく。	古来番付「永青文庫」
1600	慶長5	7.17	石田三成により忠興夫人玉（ガラシャ）自殺させられる。	時慶卿記
		7.18	丹後田辺城に籠城を開始。	細川家記・時慶卿記
		9.15	関ヶ原の戦い。	
		9.18	田辺城を下城し、翌日、丹波亀山城に入る。	細川家記
		12.26	忠興戦功を認められ、豊前・豊後国39万石を拝領し、入国。豊前小倉城を本拠と定める。	細川家記
1601	慶長6	閏11.29	幽斎がはじめて豊前に下向。	舜旧記

圖 版



(1) 第5次調査地上空から水間を望む(南西から)



(2) 調査地全景(西から)



(1) 第1-1トレンチ全景(東から)



(2) 第1-1トレンチから建部山を望む(北西から)



(3) 第1-1トレンチ土層断面
(南西から)



(1)第1-2トレンチ全景(北から)



(2)第1-1・1-2トレンチ全景
(北西から)



(3)第1-1トレンチと切岸2
(西から)



(1) 第2トレンチ上部全景
(南西から)



(2) 第2トレンチ下部土層断面
(南西から)



(3) 第3トレンチ全景(東から)



(1) 第3トレンチ土層断面
(北東から)



(2) 第4・8トレンチ調査前
(北から)



(3) 第5トレンチ上部土層断面
(南西から)



(1) 第6-1 トレンチ全景(西から)



(2) 第7 トレンチ土師器皿出土状況
(東から)



(3) 第8 トレンチ全景(北から)



(1) 第6次調査地上空から由良川上流を望む(北西から)



(2) 調査地全景上空(上が東)



(1) 郭1-1 調査前全景(南から)



(2) 郭1-1 調査地全景(北から)



(1) 郭1-1 掘立柱建物跡1 全景
(北から)



(2) 郭1-1 掘立柱建物跡2 全景
(北から)



(3) 郭1-1 掘立柱建物跡3 全景
(北西から)



(1) 郭1-1 掘立柱建物跡4 全景
(南西から)



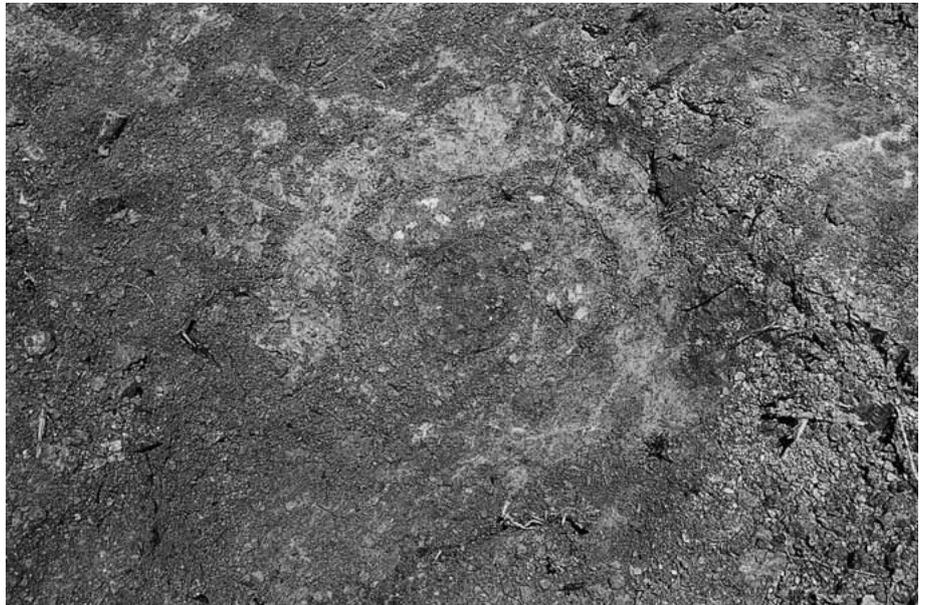
(2) 郭1-1 調査状況(北から)



(3) 郭1-1 柵1 (東から)



(1) 郭1-1 掘立柱建物跡1 柱穴
(北東から)



(2) 郭1-1 掘立柱建物跡2 柱穴
(西から)



(3) 郭1-1・郭1-2 土層断面
(西から)



(1) 郭1-2南部柱穴全景(南から)



(2) 郭1-2南部柱穴全景(北から)



(1)切岸1、郭1-2全景(北から)



(2)切岸1、郭1-2北部全景
(北から)



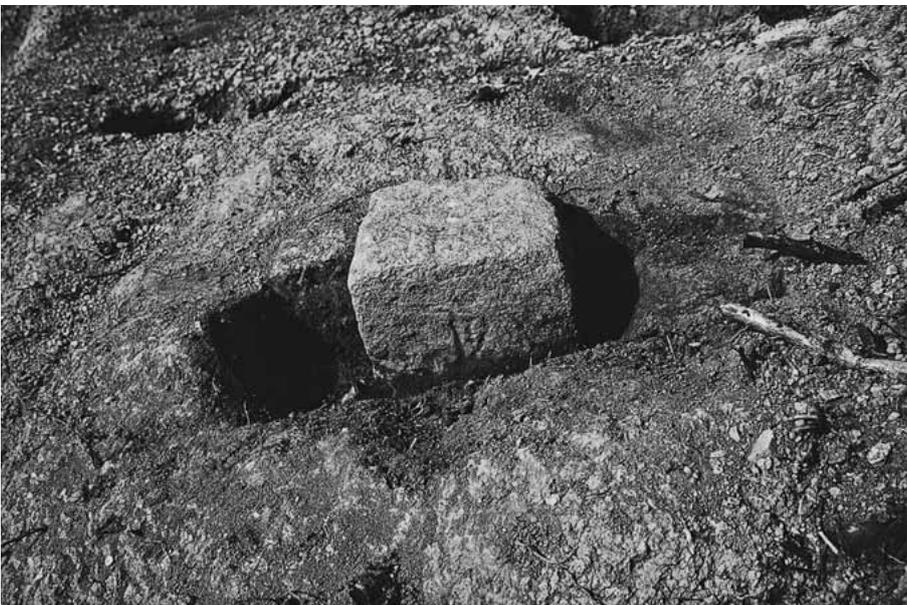
(3)切岸1と郭1-1との断ち割り
(南から)



(1) 切岸1と郭1-2との断ち割り
(南から)



(2) 郭1-2 檣敷状建物跡の礎石
(南から)



(3) 郭1-2 檣敷状建物跡の礎石
(南から)



(1) 郭1-1南の東部(北から)



(2) 郭1-1南の西部(西から)



(1) 郭1-1南柵2(西から)



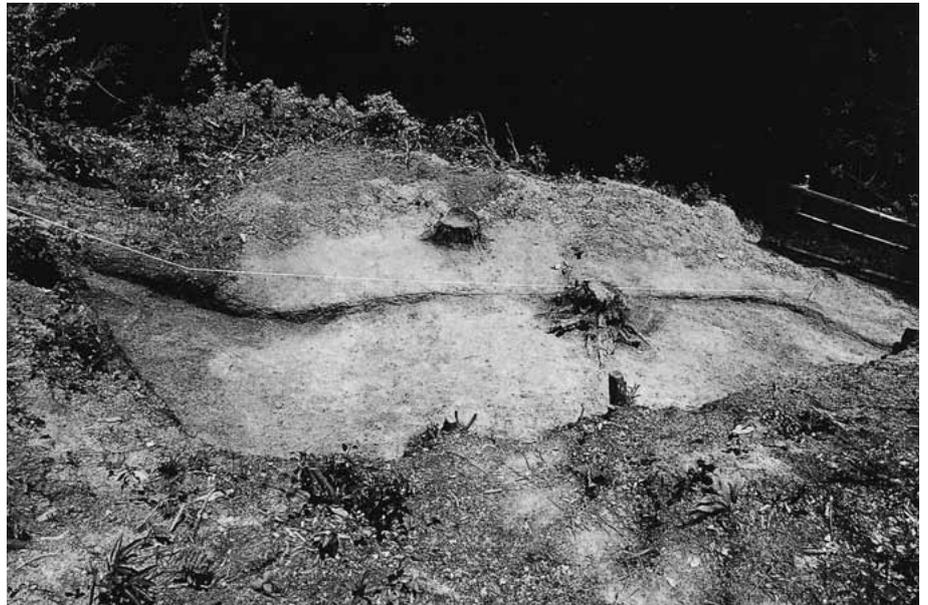
(2) 郭1-1南下層(北から)



(3) 郭1-1南下層柱穴(北から)



(1) 郭1-1 南靴(こはぜ)出土状況
(北西から)



(2) 郭1-5 全景(西から)



(3) 堀切下部、神社階段部分
(南東から)



(1)堀切、郭1-1北斜面(北から)



(2)堀切、郭1-1北斜面(東から)



(1) 郭1-1北斜面の戦国時代の道
(北西から)



(2) 戦国時代の道(北西から)



(3) 郭1-1北斜面の土層断面
(西から)



(1) 郭1 - 3 全景(北から)



(2) 郭1 - 3 掘立柱建物跡5 (東から)



(1) 郭1 - 3 掘立柱建物跡5
北部柱穴(南西から)



(2) 郭1 - 3 掘立柱建物跡5
南部柱穴(東から)



(3) 郭1 - 3 掘立柱建物跡5
南部柱穴(東から)



(1)切岸2掘削状況(南から)



(2)切岸2南部(南西から)



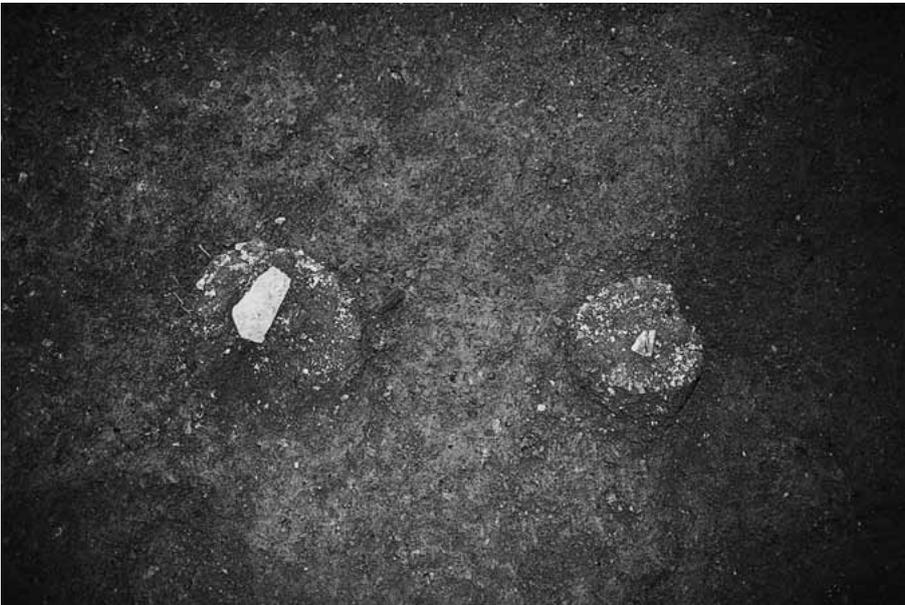
(1) 郭1 - 4 北部(東から)



(2) 郭1 - 4 北部(南から)



(1) 郭1 - 4 南部(南から)



(2) 郭1 - 4 下層遺物出土状況
(北から)



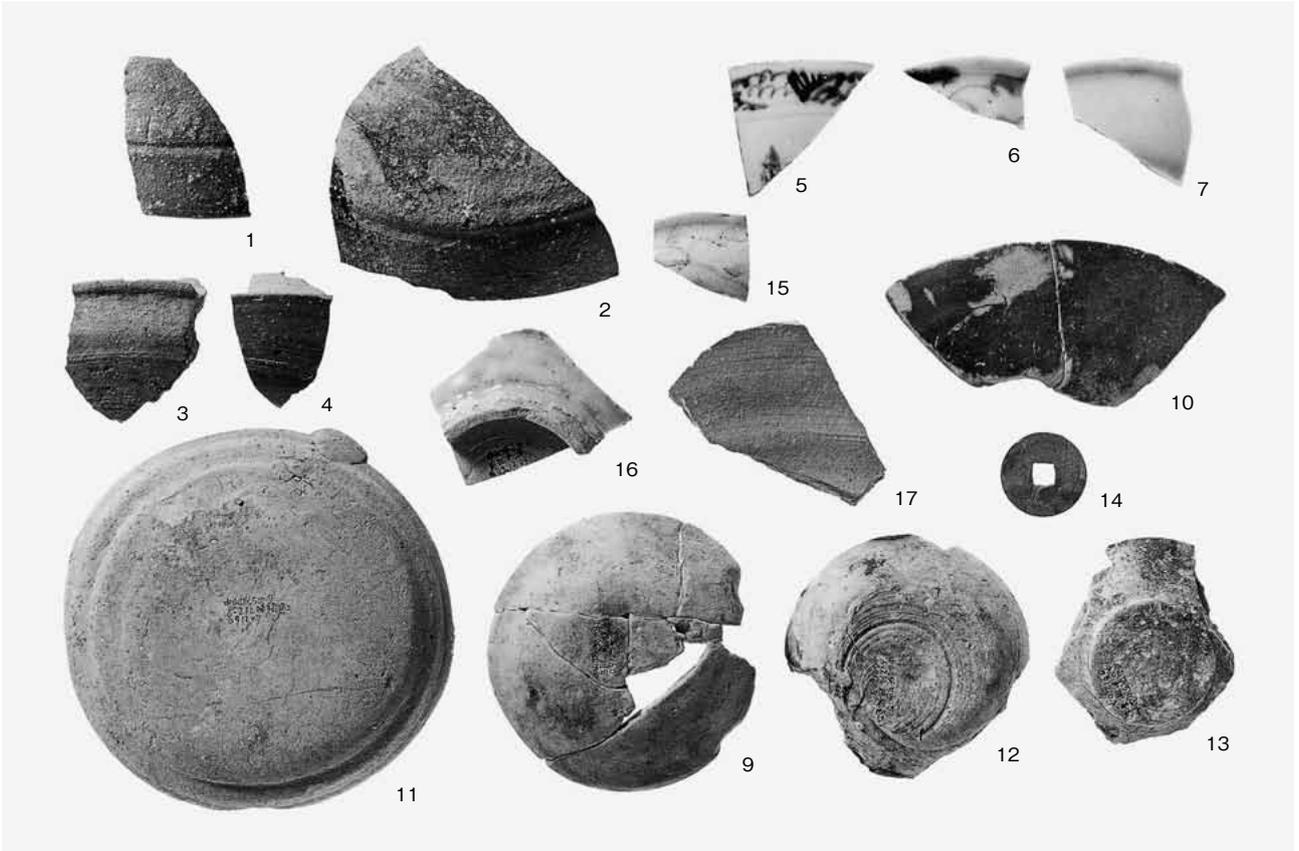
(3) 郭1 - 4 下層柄頭出土状況
(西から)



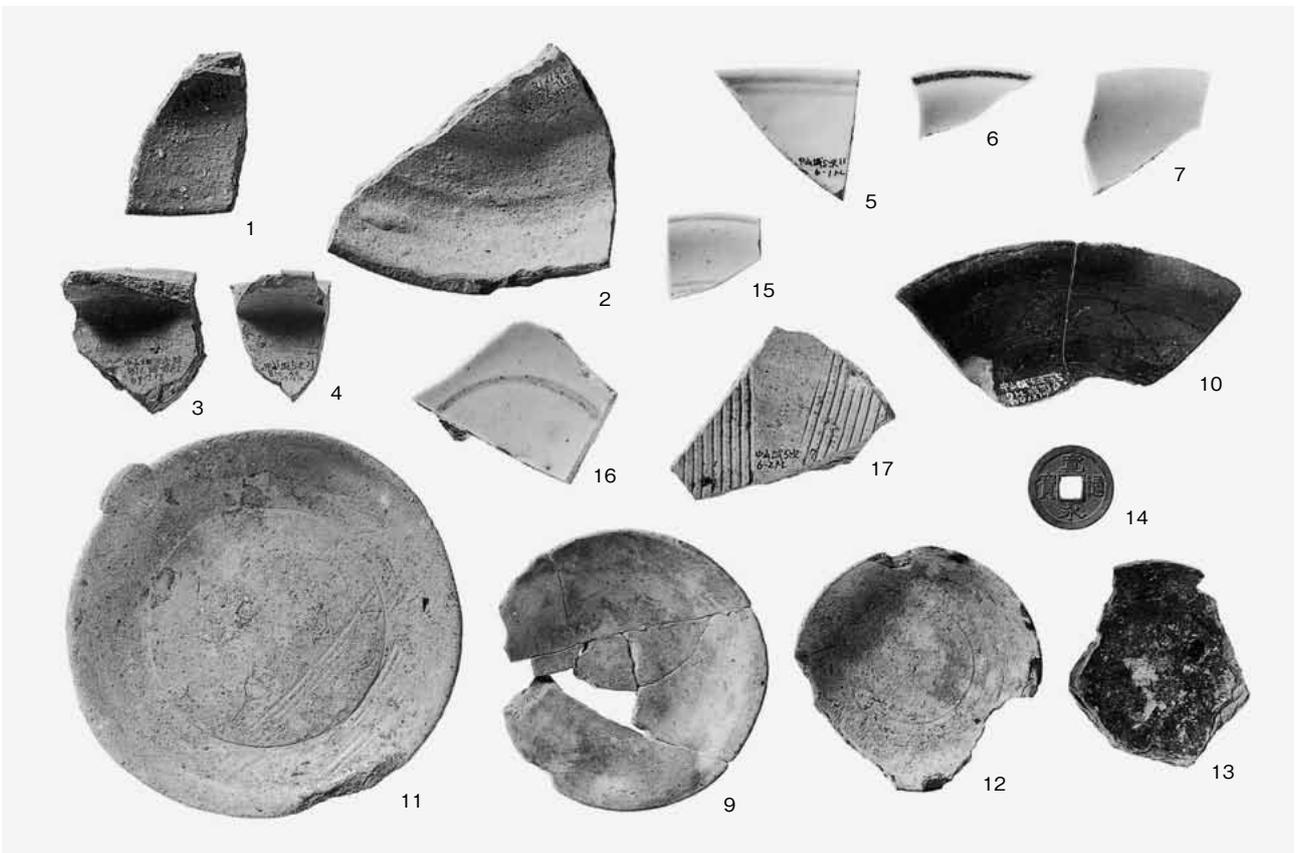
(1) 郭1 - 4 中央部全景 (西から)



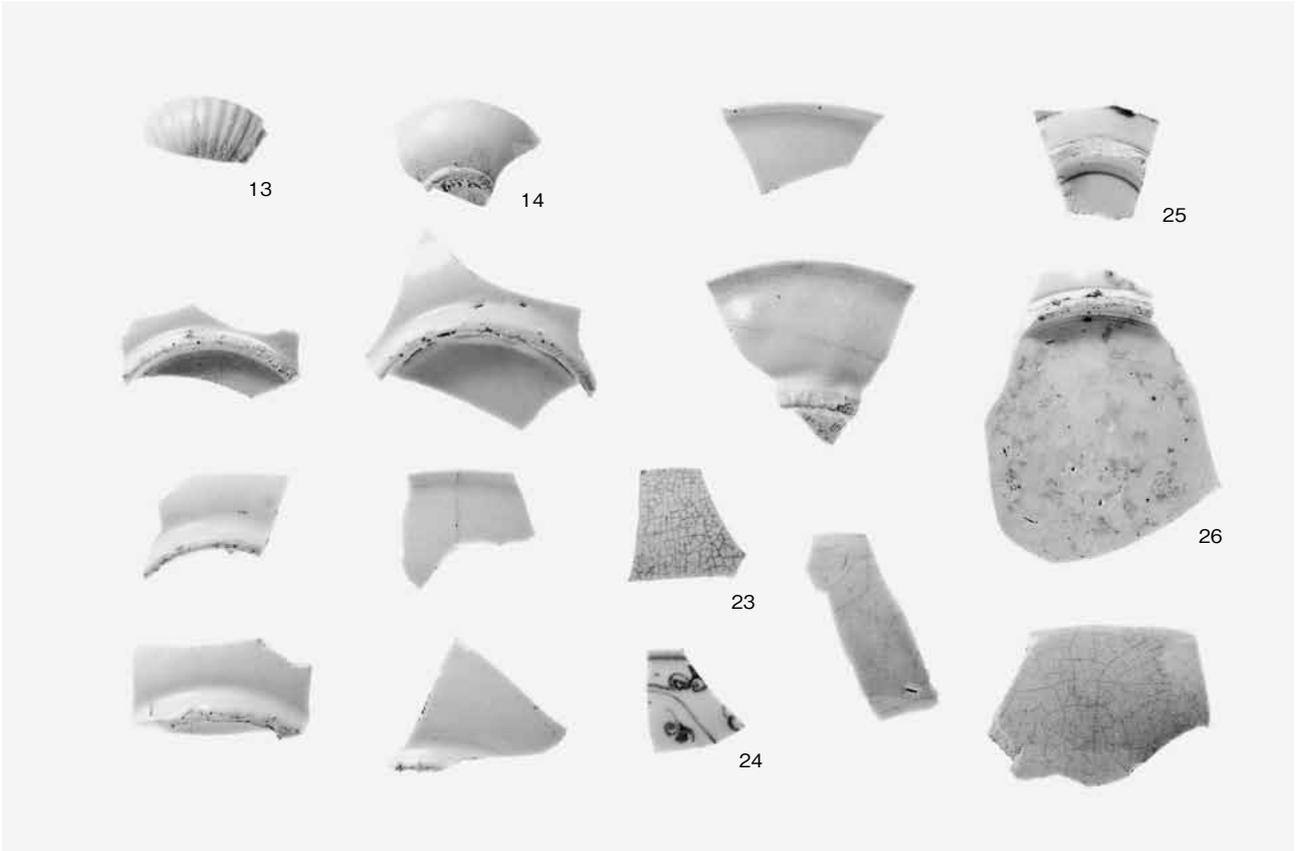
(2) 郭1 - 4 掘立柱建物跡6 (北から)



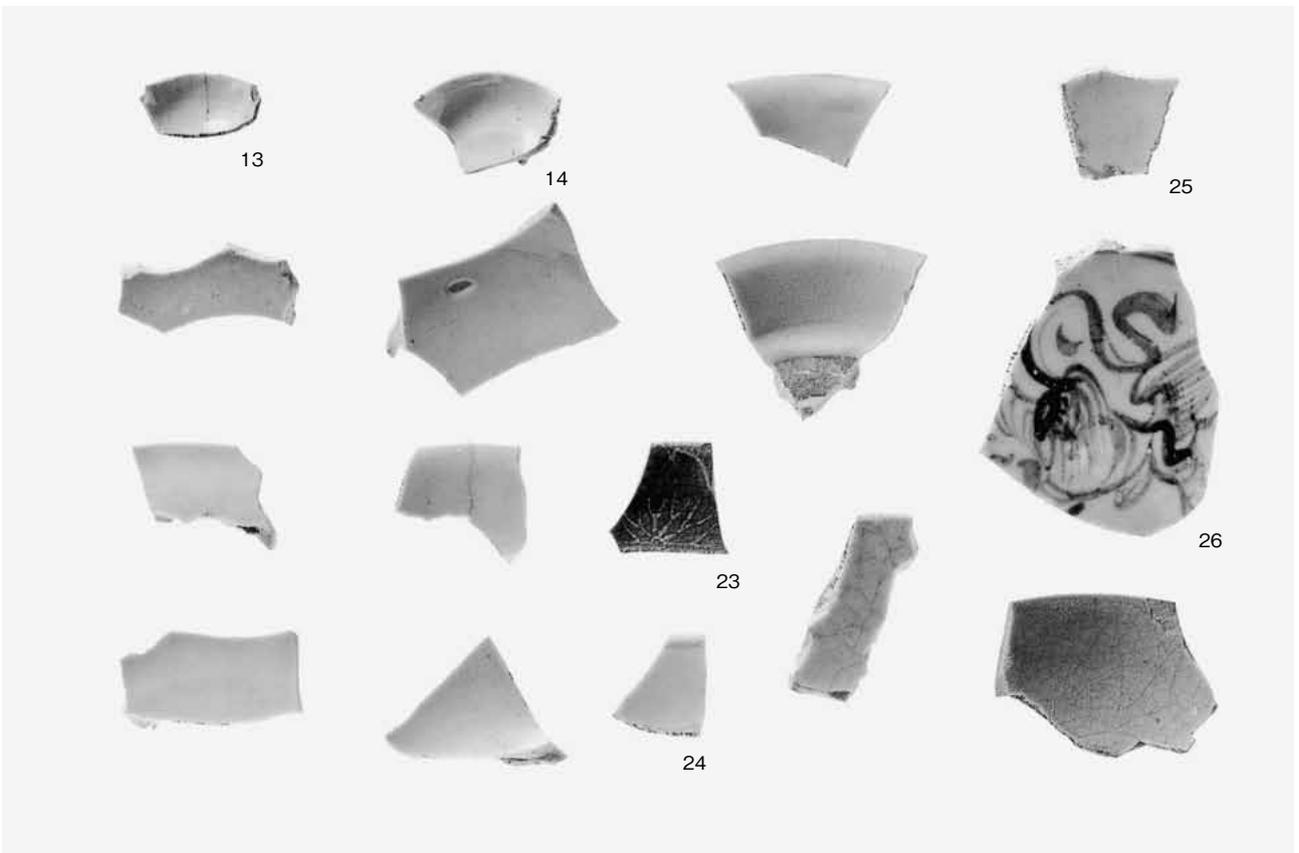
(1) 第5次出土遺物



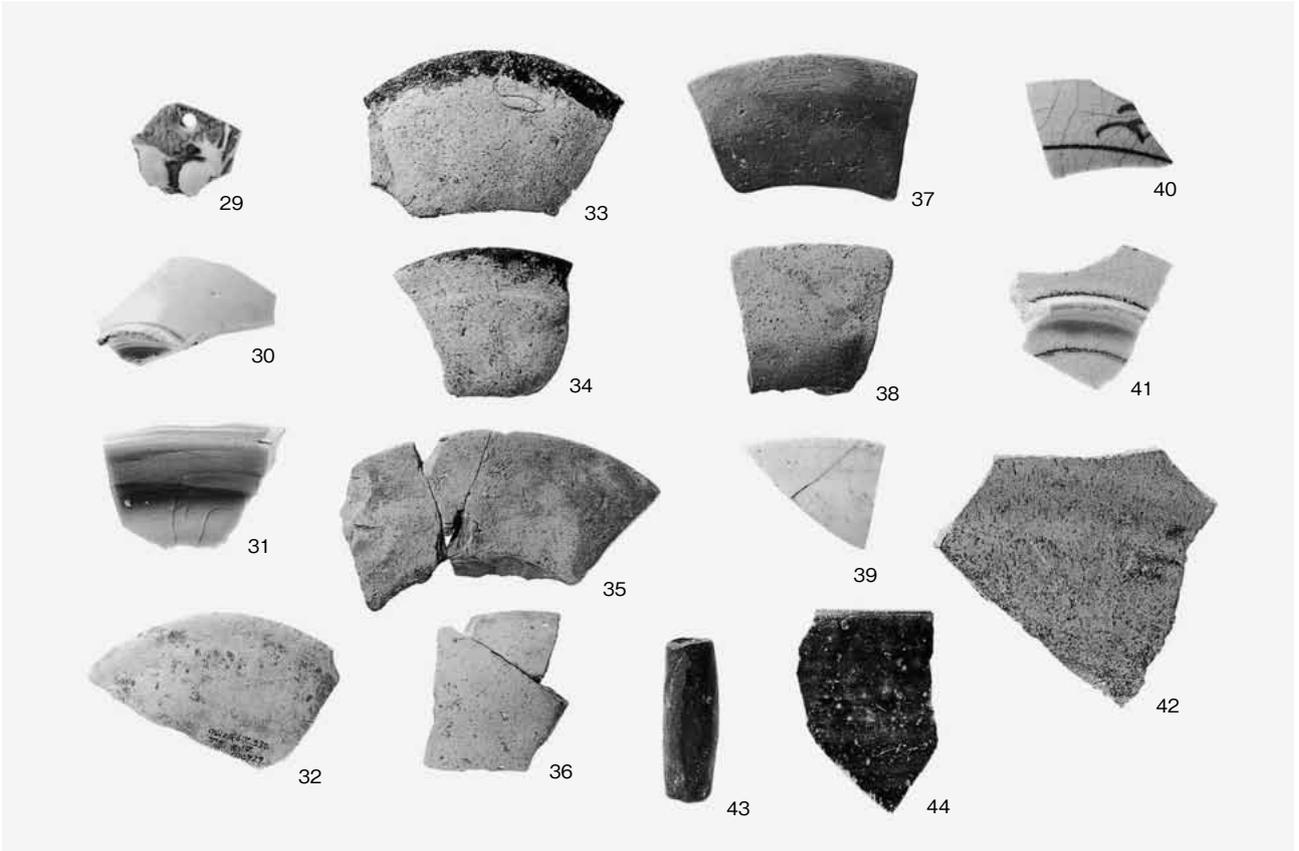
(2) 第5次出土遺物(裏面)



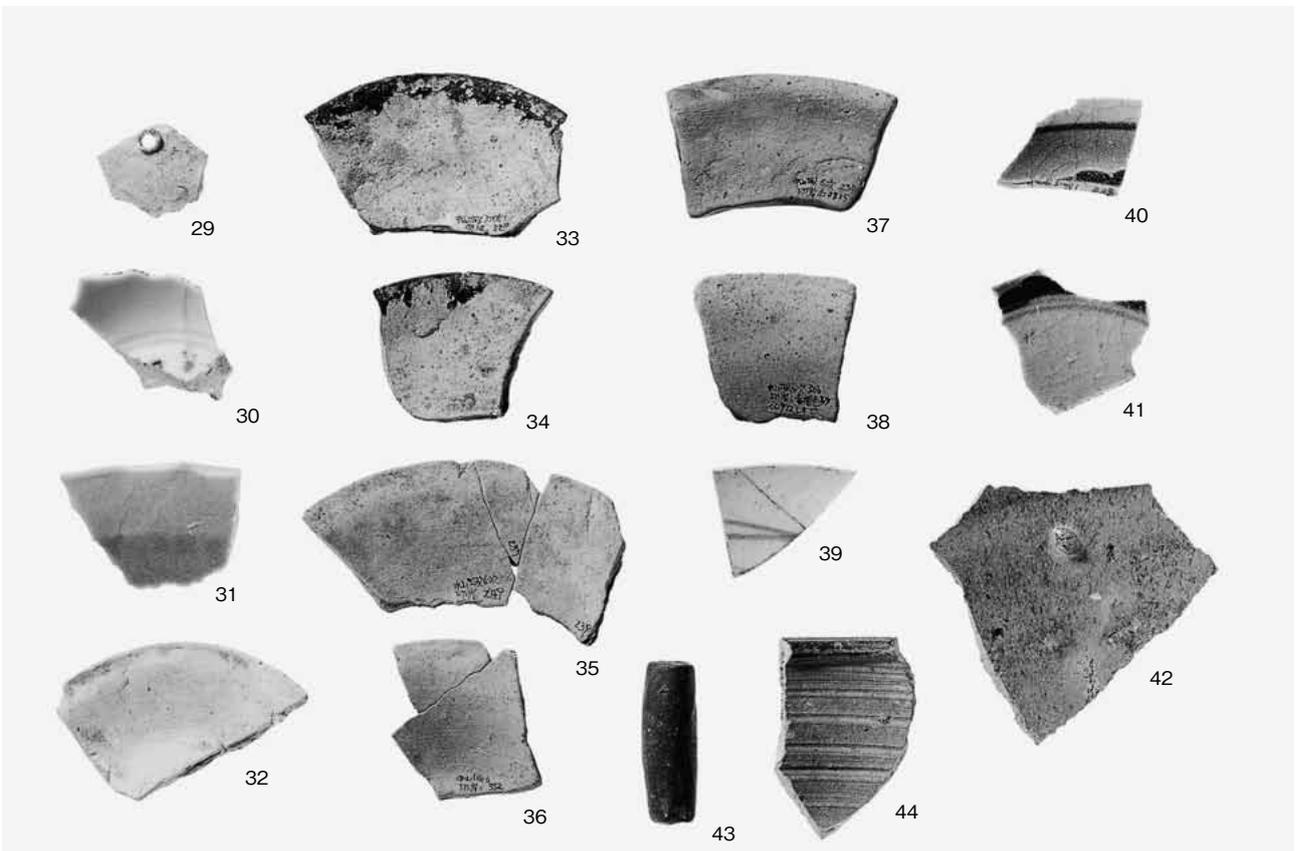
(1) 第6次出土遺物 1



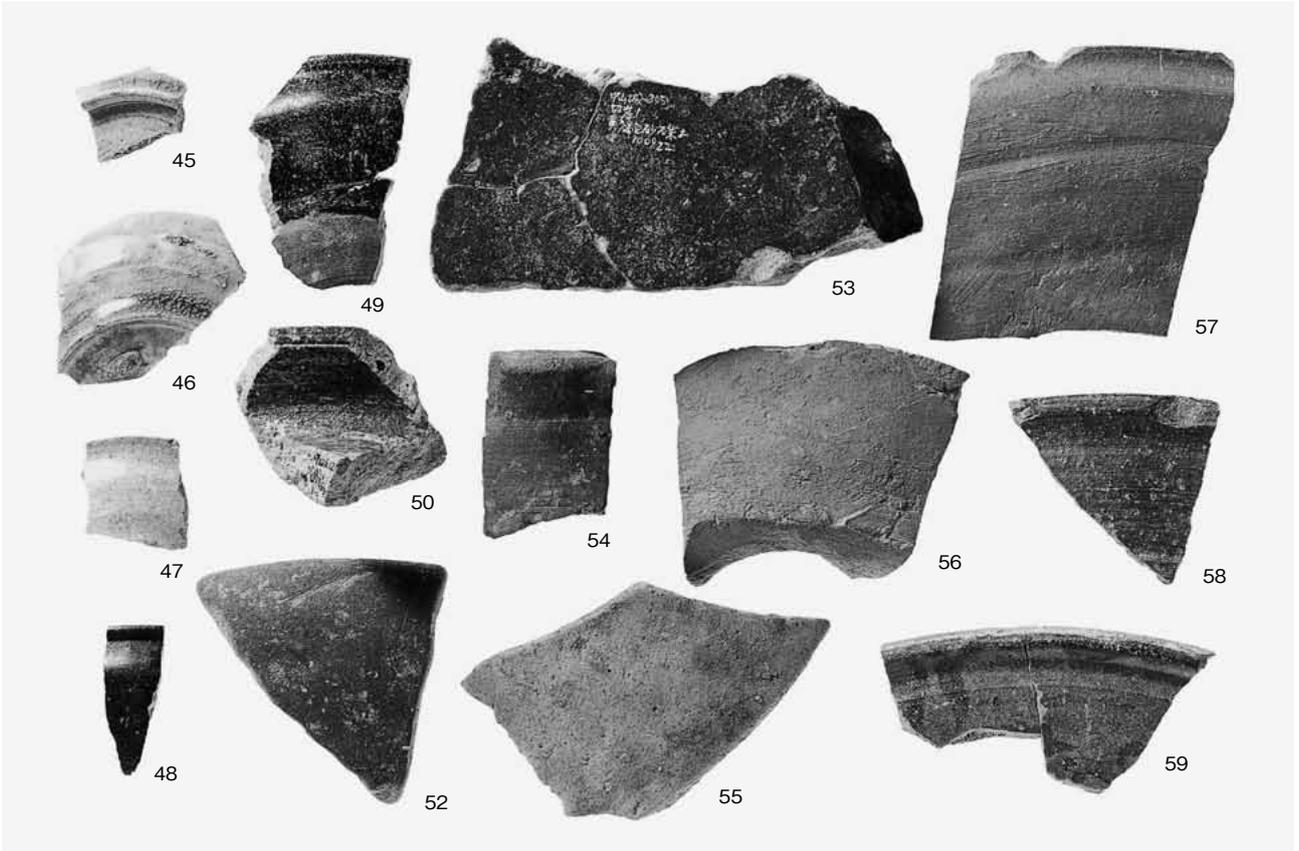
(2) 第6次出土遺物 1 (裏面)



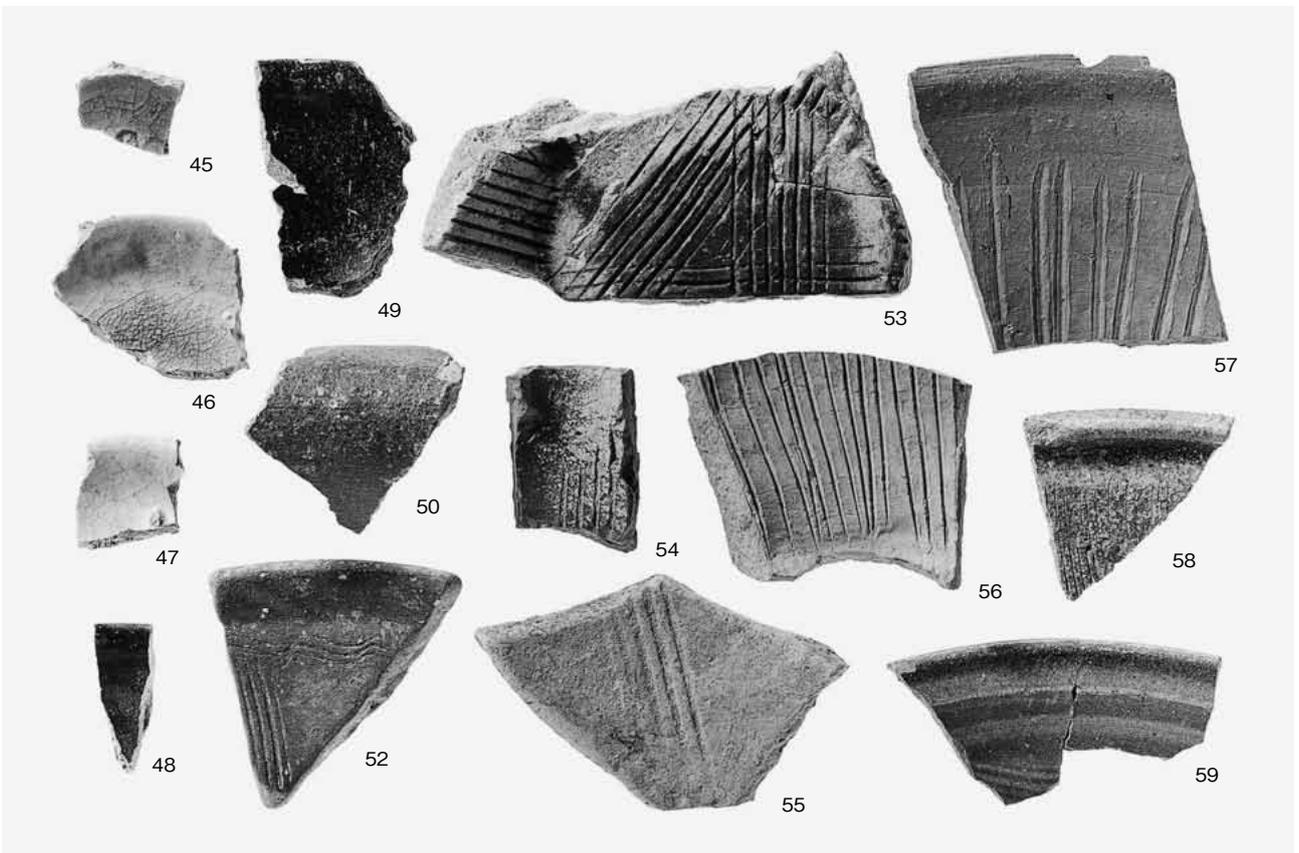
(1) 第6次出土遺物 2



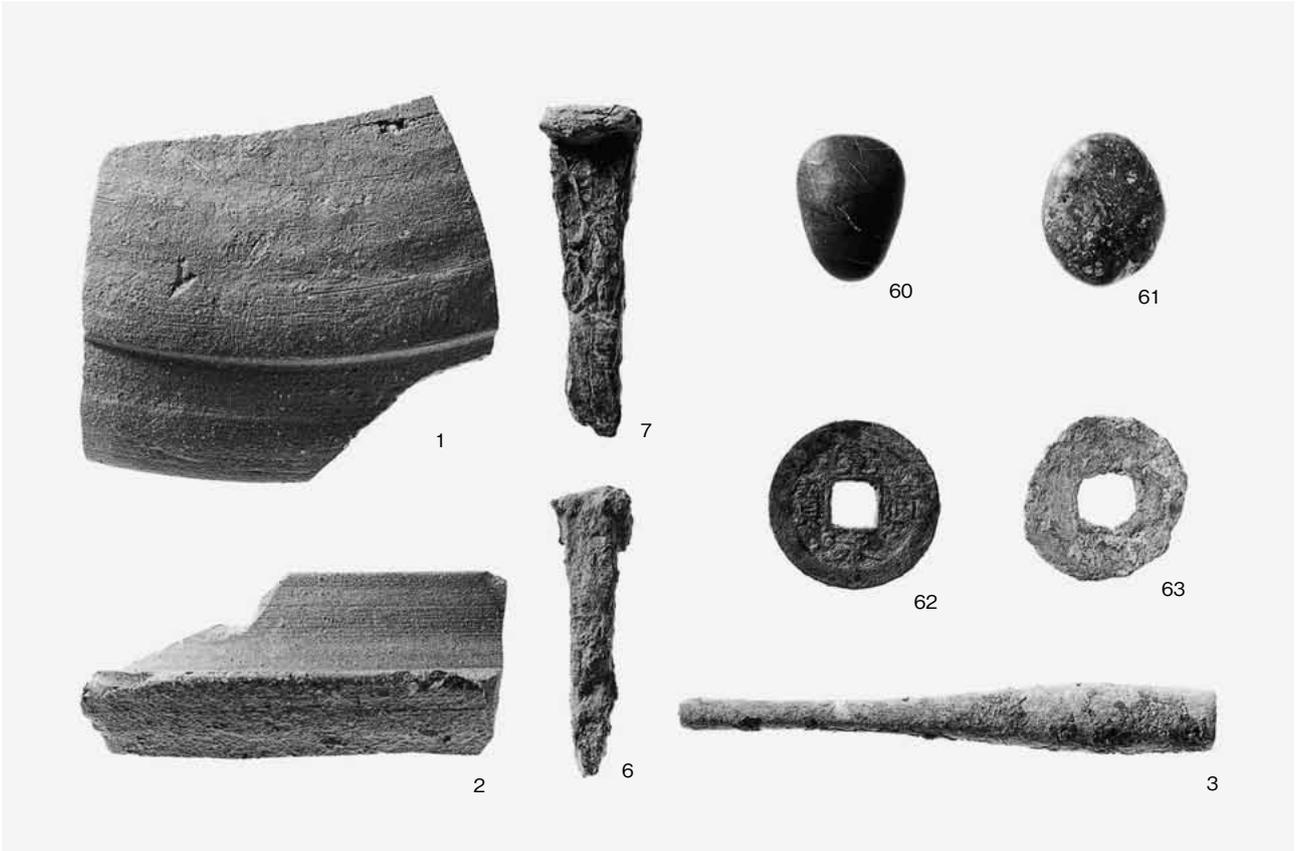
(2) 第6次出土遺物 2 (裏面)



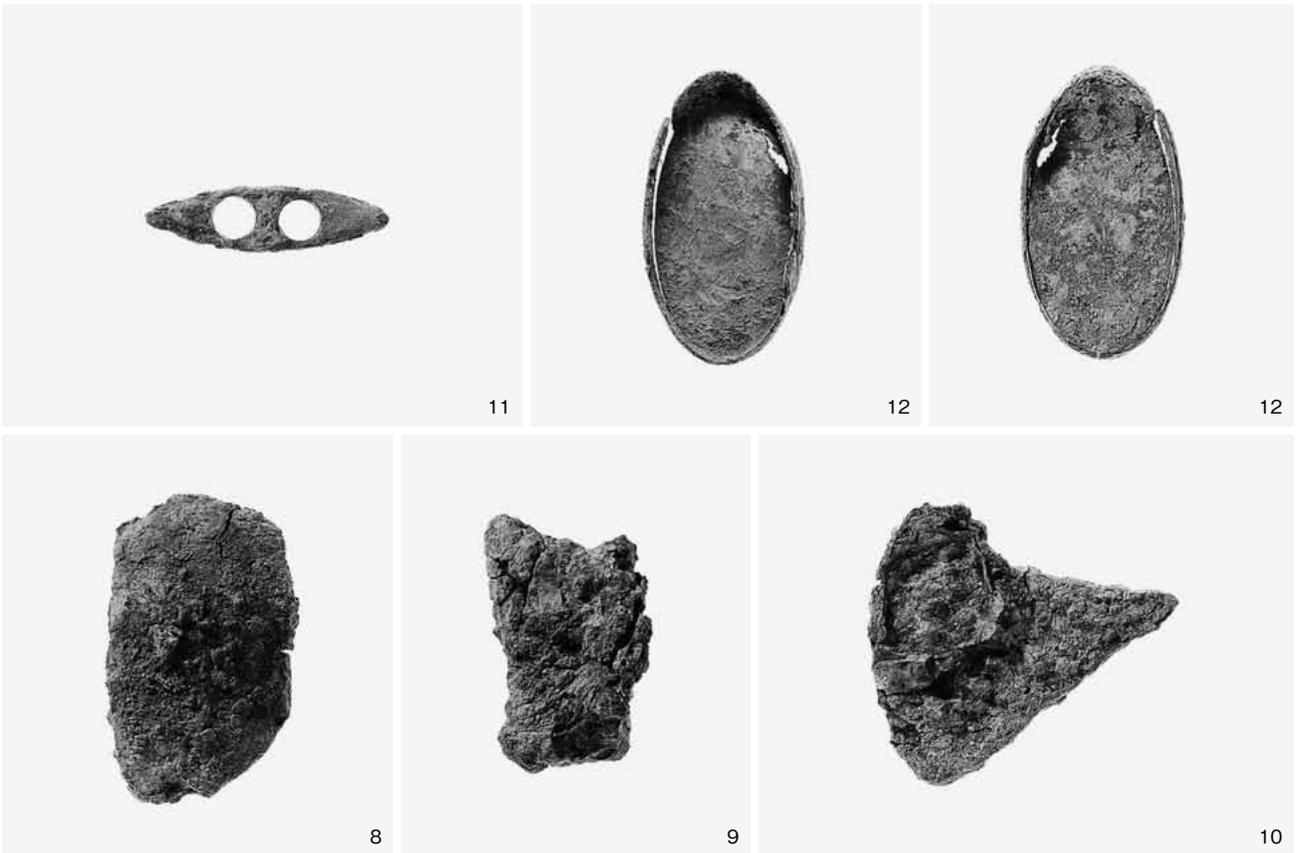
(1) 第6次出土遺物3



(2) 第6次出土遺物3(裏面)



(1) 第6次出土遺物 4



(2) 第6次出土遺物 5